万国の労働者・被抑圧民族団結せよ

鉄鎖を砕け

2

共産主義者同盟(全国委)
マルクス・レーニン主義派

鉄鎖を砕け

はじめに

今日、共産主義者同盟系諸組織の統合が叫ばれ、又、それとは逆に分裂などが進行するというように、新たな胎動が確実に始まっている。新たな政治闘争の時代が開始されて、今日ほど真のプロレタリア革命党が要請されている時はない。『鉄鎖を砕け』第二号は、そのささやかな一歩となりうるであろう。

本号に掲載された論文は、すべて七五年に発表されたものである。わが同盟が現在、この昔の論文を復刻するのは、創刊号で述べたように、わが同盟の歴史－軌跡を明らかにすることと同時に、多くの共産同系諸組織が第二次ブントの誤りを清算せんとしているにもかかわらず、未だその作業が部分的なものであり、マルクス・レーニン主義に貫かれた綱領、戦術、組織の確立としてなされていないことを克服するためである。

第一部は、全国委員会系の組織の批判であり、第二部は、関西ブント系での対極をなす、いわゆる「革命戦争」を路線としている組織の批判である。「烽火」派批判と赤軍プロ革派批判の論文は七五年二月、赤報派批判が同九月、赤軍ML派批判が同一一月、ボルシエビキ派批判が同一二月に、それぞれ『マルクス・レーニン主義通信』紙上に発表されたものである。

それらは、現在ふりかえってみれば未熟な部分もあるが諸組織の基本的性格の批判としては今なお有効であると思っている。個々の論文について、現在、最低必要と思われるコメントをつけておこう。

一番最初めの論文は、「烽火」派が未だ分裂する以前に書かれたものである。現在の「烽火」派が、全国委員会がひきずっていた政治過程をおいかけての集会、デモへ向けた煽動、いわゆる大衆運動主義をそのまま継承し、なおかつ「中央集権非合法党」にさまざまな含みをこめてもっともらしく看板としていることを見るとき、この論文の批判は、そのままあてはまるのである。

ボルシエビキ派批判の論文には、トロツキズムの評価が展開されている。第四インターがマスコミをにぎわしている昨今、その意味では時宜にかなったものといえるかもしれない。周知のように、ボルシエビキ派は、赤軍派系の『プロレタリア独裁』編集委員会と合同し、まもなく分裂した組織である。この事実は、彼らが言っていた「綱領上の統一による合同」なるものがいかにまやかしであったかを如実に示している。その原因は、両者の生粋の清算主義にある。すなわち、前者は、これまでのブントは女性差別を温存していたから全て誤りであるとして生まれた組織であり、後者は、連合赤軍事件後に総ざんげした部分に端を発しているのである。従って、「紅旗」派の分裂は歴史的に不可避なものであった。

赤報派批判の論文は、一二・一八路線の総括を含むものである。赤報派は最近、全国政治新聞の役割の重要性を認識したようである。だが彼らはそれを、『何をなすべきか』の理解が不十分であったという総括から主張し、綱領、戦術、組織の転換としては語られていない。このような主張は、逆に自らの路線の誤りを隠蔽する役目をはたすことになるのである。

赤軍二派を批判した論文は、特にプロ革批判は評注的なものであり

今日からみれば不十分なものであろう。プロ革派は最近塩見らを除名した。だが彼らに要求されているのは、「塩見理論」の総括なのである。

さて、本号によってガリ刷りの『マルクス・レーニン主義通信』は、ほぼすべてが復刻された。未だ復刻されていない主要な論文は「烽火」一分派たる永井グループを批判した論文と、ボルシエビキ派が「烽火」派内フラクションだったころの女性解放理論を批判した論文だけである。前者は、永井グループが今やまったく政治的活動を放棄していることによって、復刻の必要はないであろう。後者については、何かの機会に復刻する予定である。

今日、赤報派や赤軍ML派、あるいは本号でとりあつかっていない共産同系諸組織においても、全面的な政治暴露、煽動を活動の重要な部分にすえるようになってきている。そして、それをさらに広く深いものとするためにも、共産同系諸組織の統合は必要なことである。だが、先述したような傾向は、現在では未だ部分的、一面的な第二次ブントの総括から生まれているにすぎない。それ故、今問われていることは、第二次ブントの組織実践を総体的に総括すること、従って、諸組織の綱領、戦術、組織上の相違を鮮明にすることによって、はじめて統合の機は熟すであろう。

目　次

第一部　「烽火」派の「組織日和見主義、政治的妥協主義」はいかに克服されたか……2

三号決議による「烽火」派の「新しい路線」……3

（1）……3

（2）「共産主義者同盟の組織建設についての若干の総括」……3

（3）「一二・一八路線下での組織建設と規律について」……4

の項に関して……6

（4）「全国委員会、第二段階の組織と規律建設」に関して……6

（5）「わが同盟の組織的質と規約・規律建設の立場」について……7

（6）「我々の党組織を中央集権非合法党へと飛躍させよう」に関して……9

（7）結語……12

「プロレタリア通信」は結集をよびかける……13
まとめ……15
共産主義的宣伝、扇動、組織を放棄し、トロツキズムに屈伏した観念サークル
共産同（全国委）ボルシエビキ派を再批判する……16
第一章 共産同（全国委）と党綱領問題
―党綱領確立へむけて（序）―について……17
第二章「総括への序説」について……39
第三章「資本主義批判と唯物史観について」について……42
第四章「組織論確立の為に」について……45
終章……50

第二部

一二・一八―全国委の革命的継承・発展の事業から逃亡し
非マルクス・レーニン主義、召還主義
に転落した赤報派を批判する……52
I 綱領上の問題について……53
II 戦術上の問題について……59
III 組織上の問題について……65
おわりに……68

革命戦争路線の枠内で資本主義の解釈論争に終始する
赤軍プロ革派、ML派を批判する……69
『赤軍』（プロ革派）再刊準備一号「政治・組織報告」批判……69
「赤軍」M・L派批判……75
（I）綱領の原則的部分について……75
（II）戦術における生きたものと死んだもの……81
（III）組織路線について……84

第一部

「烽火」派の「組織日和見主義、政治的妥協主義」はいかに克服されたか

同盟（全国委）の分裂から数ヵ月がたった。今回の分裂について我々は、『マルクス・レーニン主義通信』臨時号、四号で政治的、組織的、理論的性格を公表し、「烽火」派は『烽火』紙上で声明文と「仲台論文」批判を公表した。当初、多くの同志達によれば、分裂についての対立点が不鮮明であるという声がささやかれ、そのことが党内・分派・党派闘争の中でどのような色あいと色あいの闘いであったのかがしばしば見失われ、逆に一面化して問題をたてたり、又、空文句と虚勢でもって問題の核心をそらすという泥沼的状況をうみだしていた。わがマルクス・レーニン主義派による『通信』四号によって端緒的に今回の分裂とブント党内・党派闘争に対する一定の立場と方向が提出されるや、「烽火」派はCC決議、新聞紙上、プロ通等をもって一昨年八月ー昨年四月にわたるCC論争を歪曲し、〃沼地派〃の道をはき清めだしたのである。何よりも混乱をーそうだ！　分裂に対して、ことの性格をあいまいにすることをもってしか自らの延命の道がありえなかった「烽火」派にとっては、混乱をもちこむことが唯一の救いの道であったのかもしれない。しかし、時がたつにつれて感情的な叫びは後景に退き、分裂の基本的な論争点が、歴史的にもそうであるように、現われ始めてきている。

現在、我々の手中に二つの文章がある。「烽火」派の『三号決議』と『プロ通』がそれである。これらの文章は、きわめて鮮かに「烽火」派の無原則性と諸実践の清算と修正を示している。我々は、この二つの文章を批判するにあたり、「烽火」派の分裂後の組織的経過をあわせみるならば、なお一層彼らの荒廃ぶりを知ることができる。特徴的には、第一に議長の「交替」であり、第二にT君の逃亡という事態である。以上の事態は、中間派の崩壊ということであり、一定の「立場」をもった××Gの浮上である。

YとKによる「烽火」派指導部の政治的結合、これが彼らの分裂後の状況である。いうまでもなく彼らによる「烽火」派の指導は、

結論的にはCC論争の清算であり、と同時にブント党内・党派闘争の歪曲とから生みだされていることである。それでは、個々の文章の検討からその事実を見ることにしよう。

三号決議による「烽火」派の「新しい路線」

三号決議は、全国委の実践からうみだされた諸々の現象を、一方ではとりだし、他方で一二・一八路線を強調しながらも、そのことは相対的に別の次元で総括が提出されている。これが彼らのやり方なのだ。

「全国委指導部、とりわけPBのこの間の組織指導上の自己批判は、組織日和見主義ー政治的妥協主義として」まず提起される。「政治的妥協主義」という場合、我々は一九〇三年のロシア社会民主党二回大会でのプレハーノフを思いださずにおれない。さてこの「組織日和見主義ー政治的妥協主義」なる「指導部」は一体だれのことか？　又、歴史的にはどのように形成されてきたのか？

（1）

「組織日和見主義ー政治的妥協主義に、我々（？）が打ち勝ちえなかった結果」として第一に「第一次ブント以来の共産同党内闘争の唯一の継承者……全国委は、自らの一二・一八路線内党内闘争の獲得地平を、真の共産主義党の、綱領ー組織ー戦術の確立へと集中させることに失敗し、今から始まる一連の中央委員会で、改めて全党課題としてとりあげるという、不必要な党建設の遅延をもたらした」とされる。

このことは明らかに、全国委の一連の諸実践が「不必要な党建設」であったということをもって、第二段階的実践は「不必要」な実践であったわけである。何という大胆な！　しかも「唯一の継承者」たる全国委は「烽火」派によってその組織的生命が断たれたのである。「思想が実現を迫るだけではたりず、現実がそれ自身思想へと突き進むのでなければならない」（『ヘーゲル法哲学批判序説』）というマルクス主義の命題を清算しながらも、わが「革命的左翼」には多くのマルクス主義者が存在することが許されるのだろうか？

第二に、「伊集院一派」を打倒できず、「党を一歩建設する絶好の機会を失い」、第三に「指導部の組織日和見主義ー政治的妥協主義は、伊集院一派と闘争しきれなかったところのサークル主義、組合主義的組織へと」党を解体せしめたこと、このことの克服が彼らの出発点である。

しかし、まだ全国委への攻撃はくり返される。以上のような事態は、「全国委結成の党的地平からの転落であり、中央委員会全体としては、我らの一二・一八党内闘争地平を、この二年半の間に、我らの綱領ー組織ー戦術の原則的確立へと集中させる作業を、日和ってきた結果の党員の解体現象である」、と。

すばらしい！　かつて自己の組織の弱点をはっきりと明瞭に、しかも直感的にただの一言で提起した革命家が存在したであろうか。そしてその弱点＝原因は指導部が党の作業を「日和ってきた」ことといい、他方で下からの、大衆のレベルからの党を批判するあのや

り方を武器にしているのではなかろうか。一体、今回の党内＝分派闘争の中で、どのような態度をとってきたのか、まず主張すべきである。この決議の筆者は、おずおずとこの決議全体に筆者自身の一貫した、しかも一二・一八路線下で斥けられた地方主義、俗流民主主義の主張をよみがえらすのである。

以上のような弱点を克服する彼らの任務なるものがどのような代物であるのか次にみていくことにしよう。

「任務の第一は、そのような党内論争の組織者たることである。第二は、このような党内論争を、党の日常的一切の実践の成果として結果させ、かつ集中させる唯一の条件、中央集権非合法党の組織を建設する建設者である」こと。これが彼らの「中央委員会の必須の立場」なのであるから、先述された諸々の欠陥は、そのような「必須の立場」が存在、確立されていなかったことから必然的に生みだされた結果であったことになる。しかし、全国委そのものを一二・一八以降「不必要な党建設」という清算をやったあとで、「中央集権非合法党」が形成されていなかったから云々というこの種の論法は、「中央集権非合法党」をもっぱら完成された形のととのった理念にせばめ、完成や定形が現実の組織と実践から生じること、あるいは発展するという弁証法的把握を否定することを意味するであろう。

（2）「共産主義者同盟の組織建設についての若干の総括」の項に関して

彼らの総括の方法は、第一に「プロレタリア独裁と党と階級の区別、そして作るべき党の形と質」を軸に、第二にブントの党内・党派闘争を通して「党建設上の課題」を明らかにし、第三に、「全国委内の陥っているどのような傾向と闘う」のか、である。まずブントの歴史的経過から出発する。

「第一次ブントは、六全協以降の日共の合法主義の中から誕生した。結果は、非合法党日共の戦術と組織を捨象し、自らの綱領的立場として合法主義を前提的に有していた」。又、サークル主義は「反スターリニズムをハンガリー事件の告発から立てることに象徴されるプチブル性」からうみだされ、故に「これ以降の共産同の歴史が党の組織と規律を内部から要求するためには、六〇年代後半に始まる武装闘争にまたねばならなかった根拠が」あると。

そもそもこのようにブントの出生を主張する場合、結論は、日共からでたのはまちがいであったということになり、又、綱領的立場は「世界革命、暴力革命、プロ独」という原則的宣言としてある以上、「合法主義を前提」としたなる批判は重大なる歪曲である。実践的に、この原則的宣言が、その当時の階級闘争の到達地平の中で、どのような限界を有していたのかが問題なのだ。そしてブントが「ボリシエビキの鉄の規律を拒否」を明確な規準でもって行ったのでなく、そのような条件と内実を欠いていたことが問題なのであり、このように問題をたてることによってしか、ブントの継承発展は語れないのだ。また規律が問題になったという把握が「六〇年代後半に始まる武装闘争の開始」というブントに限られた戦闘に限定すると同時に経験主義的であり、歴史的な階級闘争の教訓化を拒否する狭い視野であり、マルクス以降の階級闘争が世界的広がりと普遍化の中で発展してきたことに無自覚な態度である。以上のような観点

から、規約の発生過程が空文句とあいまいな概念でくどくどしく語られる。

六〇年代後半の武装闘争の中で「基本的には、組合的ヘゲモニーでない全く新しい権力＝戦闘団指揮権力が作りだされた。自然発生的戦闘団組織と、その自然発生的戦闘団指揮権力＝これがブント史上での〝合法主義的組織〟克服の出発点で」あったと。そして、この「指揮権力」（？）は、「日常的存在形態で」なく、だから「その内部には規約は発生せず、指揮権力という新しい権力は日常的活動時には〝霧散〟する運命にあった。しかし階級闘争の発展は党を揺り動かし、「その戦術的突破の方向の中で、党の一部において創出された。……それは〝組織された暴力〟であった」「全共闘SSL部隊」「地区軍団」として、これらは「日常的組織であり、戦場と工場をつな」ぎ、「日常的政治指導部が戦闘指揮をかねることによって統合の指揮権力構造を生みだし、従って一定の個別な集中と平等のための規律、組織運営のルール『規約』が創出される根拠」を有していたというのである。だが否定的側面を克服しなければならなかった。「それは、決して党的組織、規律、規約ではなく、各グループ間の個別な、分権的な自然発生性の枠内のものであり、しかも決定的には、当時の最高指導部の大部分は参加していない、党の現場の下部の独自的形成」であり、学生と労働者が分断していたことを。

まず九回大会以前の概略について見るならば、戦闘時の具体的な事実＝経過は述べられている。これは政治の最高の形態としての軍事として、軍事を語る原則から逸脱し、政治を切りはなし、唯武器主義から考察される。「新しい権力」「指揮権力」等のように不明確な誤った概念を乱用することで何か意味をもたせようとし、そうすることによって党の規律、規約の条件をただ武装闘争と、それを推進した組織（狭い意味での）の経験からのみとりだすことは一面的であり誤りである（このことについては後にふれる）。

九回大会以降の展開で特に注意しておかねばならないのは、九回大会の路線的帰結であるRG建設と恒常的武装闘争に関する総括の方法の反動性である。具体的にRG、地区軍団、Yを総括するとすれば、当時の階級情勢、労働者人民の意識程度、それとの関連での党の政治主張と組織性格等々の分析から始めなければならない（ただ具体的戦闘の権力との関係の教訓化という技術的領域は残るが）。

決議は、RGと地区軍団、Yに関して、前者は「自己を党ではなく軍隊であるという自覚を前提」「徹底した個人的自由と個人的判断の否定」「絶対服従を求める統帥の論理」を生みだし、後者は「政治警察との闘争に関する規律……〝弾対規律〟がより高度に獲得され」「RG……軍隊でありきったのに対し」「……軍隊編成をとる地域、工場のプロの指導者としての別の基本任務があった」「地区党工場活動を一方で自己の任務」等として描いている。

そもそも当時のブントの組織決定の下に建設された諸々の機関を別別にとりだし、そこから戦闘を組織する場合に生じる諸結果を云々することは、当時の組織と政治的方向が何を軸にしてたてられたのかを不問にする反動的主張に他ならない。このような主張の客観的性格は、中央に対して地方を対置する方法と同一の思想であり、サークル根性からする中央集権主義に対する反発以外の何物でもない。更に、ここから不可避的に中央軍そのものに反対することをもって、明らかに組織路線を固定化した、柔軟性のない観念的主張に落しこめているので

ある。我々は、第一次RG、地区軍団を担ったメンバーが当時の組織の主要なメンバーでありながらも、過半数にも及ぶ権力への屈伏者をだしたという事実をも総括しておかねばならない。

以上の展開が彼らにとっては「最初の鉄の組織と鉄の規律の建設史」として描かれ、地区軍団、Yが絶対化されるに至る。しかし、全国委は、そのような経験を軍事組織の片すみにおとしこめていたとして「烽火」派の進むべき方向が打ちだされるのだ。「六九－七〇年秋の非合法闘争の組織と規律に関する成果は客観的には、当時の我々の指導部にこそ集中されなかった。この事態を招いた原因は、主として路線の問題、特に軍事路線の当時の限界である」しかし、これが問題なのではなく「党建設から組織建設問題を排除する指導傾向、逆にいえば、組織問題を政治路線の問題にすりかえる傾向」が問題であると、政治問題－組織問題の区別と区別、これが彼らの組織建設を語る立場なのである。マルクス・レーニン主義で武装することを出発点とした一二・一八路線への反逆が開始される。

（3）「一二・一八路線下での組織建設と規律について」に関して

鉄の規律によるボリシェビキ党の建設に関するレーニンの引用は、彼らが何をまちがえてレーニンを引用しているのか疑いたくなる。これは、レーニンの次の語を、意識的に排除したのか、そうでなければマルクス・レーニン主義を実践に適用しえない革命家のそれである。「プロレタリアートの無条件な中央集権ともっとも厳格な規律こそがブルジョアジーに勝つための根本条件の一つであるということをはっきり示した。この点はよく問題にされる。だがこれは何を意味するのか、どのような条件の下でそれができるのか、といった点に関する検討は、きわめて不十分である」と、続けてレーニンは「なぜボリシェビキが革命的プロレタリアートにとって欠くことのできない規律を作りだすことができたのかという原因についてもっとも真剣な分析をもっとしばしば行うべきではないだろうか？」（『共産主義における「左翼小児病」』）。そして、「ボリシェビキが存在してきた全期間の歴史だけが」それを「説明することができる」と述べている。

彼ら「烽火」派は、ただ鉄の規律の必要性を学んだにすぎない。先にふれた政治と組織の区別の強調に鉄の規律を付与し「一二・一八路線下での組織建設」が語られる。

「旧神奈川左派のそれが、実践的第一次武装闘争とかい離したところでの、組織と規律の思弁的取扱い－党母体論－という決定的誤りをもってはいたが……それを軍事の、戦闘組織の独自の問題として全党問題への道を閉ざすことはなかった」。そして、「軍事組織をもたなかったが故に、たとえその内容が誤ってはいても、自らの組織の性質の決定と規律を全組織の課題として取りくんだそのとり扱い方は全く正しい」と絶賛される。「烽火」派の俗物性がますます明らかになった。内容はまちがっていても組織はつくれる!? そして「烽火」派は「軍事組織」をもっていたら火傷をするという追従主義の沼地まで到達した。そのような立場からは、全て革命組織は「戦闘団主義」であろう。

ここまでくれば政治的一貫性の欠除という事実が暴露される。一二・一八路線は、「戦闘団主義であり」、だから「その規律は、RGの服務規律から始ま」る。「中央集権組織の目的が、戦闘団指導部の中

央集権へとなっていったのは、一般的には、路線の誤り……戦争論に代行される基本的戦術の根底的誤りで」あり、「七〇年六月〃高原会議〃－の到達地平の敗北の結果」であった。「組織路線は、旧関西フラクの先述した弱点－……軍事専門部の独自の問題として終息した－の結果、共産同の全成果を総括するものとしてはたてることができなかった」という観点から、一二・一八路線下における党内闘争を一切否定し、これ以降の行論では組織の否定的状態が誇大に語られる。そして一二・一八ブントの政治的、組織的（軍事的）中枢であったCCでの諸論争を明らかにし、全国委のとった態度がどうであったかを分析するのでなく、専ら、こうであったにちがいないという主観から批判されている。PB＝YB、RG＝政治軍隊という組織規準に対して、口先では承認しながらも、軍事組織の再編が開始されるや逃亡したのはだれか！ 一二・一八ブントでは党内闘争が閉鎖されたから全国委は結成されたのか！ 特に関西地方委では、赤軍派との分派以降、労働者の組織化を党の最大の任務として遂行してきたのか!? 一二・一八下において「工場細胞の任務」が狭くなったという主張は、自らの総括をせず、全て一二・一八に負わせるやり方ではないのか！ ブントの歴史を知らない若い活動家に対する「教訓」ならば、もっとましなボロのでないやり方を考えたらどうか!!

決議でも述べられている「戦争論」について見るならば、一二・一八ブントが資本主義批判、過渡期世界論、そして中央集権党建設、二派止揚八派解体という総路線の中で、とりわけ党の立脚点を武器に出発しながらも、それが現実の運動－実践－において、かつての狭い小ブル的戦術を払拭しきれなかったことが「戦争論」への態度をあいまいにしたのである。だからして、三里塚戦争や秋の武装闘争の再開という中での戦術的分岐が組織的分裂（党の危機）へと導いたのではないのか。

この一二・一八ブントの分裂という事態は、明らかに「マルクス・レーニン主義の復権」をかかげた一二・一八ブントが、それを実践化－対象化しようとした段階で亀裂をうみだしたのであって、この亀裂に現われた「マルクス・レーニン主義の復権」の内実－一二・一八ブントの綱領的立場－において明確にしなければならない。そうすることによって「戦争論」なる小ブル的戦術を、真にプロレタリア的な戦術へ転換することが可能になるのである。しかしこれは、労働者階級の経験にもとづいて我々の指導の正しさが点検されることによって真実のものになる。その意味では、全国委の諸実践の意義を評価しなければならないのだ。

「烽火」派が「我々の手でのみ果さ」れるという決意は、歴史を三・四年ひきもどさなければ正当化することのできない論理である。

（4）「全国委員会、第二段階の組織と規律建設」に関して

全国委の総括が（1）で検討した立場から述べられる。そして、この項は「中央委員会の党建設の事業の性格と任務を明確にするため」に提案されている。

「共産同史をつらぬく党建設の最高の到達地平」を確認することから出発する。

「中央委員会の決定の執行を、中央書記局、J機関の二中央機関をもって行っている。分業〃を否定しようとするのでなく路線の二元性

について」確認することが前提とされている。しかし、ここに全国委の矛盾の萌芽が存在し、発展したのだと。二つの中央機関がそのままCCの〃分業〃へと持ちこまれることによって「固定化される傾向に陥った事」「その結果……二つの党建設の遅延に直面した。その第一は、自らの一二・一八路線内での党内闘争を貫徹しきる事をおしとどめ、党内に組合主義、サークル主義を克服しないまま、温存させることによって、伊集院一味を再発生させた。第二は、一二・一八路線の克服の、それ自身、断固として正しい二つの到達地平を唯一統合する中央委員会、全党指導の基準と、わが同盟の綱領、組織、戦術の確立としてたてる事、更にいうなら、我々の党派性を政治方針上の問題や、或いは、統一戦線の政策問題に解消するのではなく、その一切のよって立つべき基準と、そこから出る一切の成果を、わが同盟の大胆な綱領、組織、戦術の原則的内容の深化、発展としてとらえる指導の基準をあいまいにし、政治的妥協、組織的日和見主義を発生させ」る結果をもたらしたと主張している。〃分業〃を止揚する基準が問題だとすれば、又それが明らかにされなかったから、否その止揚に向けての作業を「指導部が日和った」から「伊集院一味が再(?)発生」したということなのか? そうだとすれば今回の分裂はどのような意義をもつであろうか? 「伊集院一味はこの事業が必ず行きつくであろう彼らの政治的、組織的本質の根底的暴露と打倒を知ったが故の共産主義者の事業からの逃亡」だった!?

このように「総括」することによって、まず第一に、全国委員会の結成時における否定的側面、すなわち戦術上の転換の中で明確な規準をもって結成されるにいたらなかったという事実を逆に賛美し、第二に、それ以降の特に七三年八月以降のCC論争の根拠が宿されていた事実を、何か「指導部が日和った」ことに求め、わがマルクス・レーニン主義派が打倒の対象とした「組合主義」ー経済主義、それと関連した理論闘争を一切理解することのできなかった徒輩が語るにふさわしい主張である。そして第三には、全国委の第二段階という実践の過程で何が問題の軸になっていたのかが一切不問にされた形で「伊集院一味」の発生を語るとは何という都合のよい主張であろうか。第四に、彼らは「その一切のよって立つべき基準」=森羅万象の基準を明らかにせんとしているではないか。この決議の筆者は日向派との党派闘争を通して形成された一二・一八資本主義批判を爪の垢ほども理解していないのである。決議として通る中央委員の態度がなんと「烽火」派らしいではないか! 「全国委員会の特別の弱点を自覚する」(?)とは一体何かね。もっと真剣に全国委の埋論と実践を総括することを勧める。

「党建設は党派闘争であり、党派闘争は党内闘争である!」(?)というテーゼはどうも「指導部」に対する批判者に向けられているように感じられる。「共産同史の一切の党派・党内闘争を総括し……綱領、組織、戦術の原則的宣言まで高め……この事業は不可避的に党内闘争の原則的組織化という手段を抜きにありえない……歴史的組織の質をサークル主義、戦闘団主義の打倒、中央集権非合法党の建設をもって克服することこそが重要……レーニンは『分裂は混乱よりましである』と……」「ドイツ共産主義者の分裂」(『共産主義における「左翼小児病」』)をもちだしてきているが、党内闘争が党を強化するということは、「党内の種々の色合いの間の闘争は不可避であり、この闘争が無政府状態に導かない限りは、又この闘争が全ての同志や党

員に一致して承認された枠内で行われる限りは、必要でもある」(『一歩前進二歩後退』)という、相矛盾するようなレーニンの主張を、その時期における論争の中心的で基本的な問題が何であるのかを抜きに引用すれば、結論の相違をもたらすものである。又、中央集権党の必要性は語っても語りきれないほど革命闘争にとって必要不可欠なことであるが、レーニンがナロードニキとの闘争、経済主義者との闘いを通して、マルクス主義がロシアにおいて勝利をおさめ、労働者階級と結合し、それ故、規約一条に表現される思想の条件をかちとり、もってロシアの諸々のサークルを一つの強固な組織に統合することが緊要の任務たりえたことを確認しておかねばならない。

「烽火」派は、「綱領、組織、戦術」「中央集権非合法党」の必要性を絶対的に認めているが、それを空語化し、わめきちらすことが共産主義者の任務だと思っているのだろうか?

次に、全国委結成後に提出された「戦士=組織者」論文の限界を指摘しているが、奇妙にも、観点が違うが、我々が問題としている点を彼らも感じているらしい。「一二・一八路線の……他の決定的な欠落点、現実の被支配階級の指導を〃人民の組織者〃としてうちだした……ただ……この論文は少くとも一二・一八路線下でうちたてられた〃中央集権〃という原則を、それにまつわりつくいくつかの誤った雑物の中から正しく選びだして、自らの指導の原則の一つとすることをしなかった」、そのことが「〃中央集権〃をわが共産同の歴史的到達地平として確立しえなかった」ことに導いたのだと。だが、この主張は、先程ふれた「高原会議」の絶対的正しさを歴史的におさえる以上、一二・一八ブントに対する批判が矮小なけちつけ的批判(〃口先だけの非合法、本質と実態は合法主義者〃)に終始し、一二・一八ブントの意義を表層からのみ考察する代物である。

組織問題を政治問題から切断して「論」を形成することによって、「全国委結成大会は、全ての党内闘争の参加者を召集し、党の規約草案の提出、党員、党員候補の決定、中央委員と中央委候補の決定……それは共産同史にとって画期的なこと」として把え、あいつぐ中央委候補、党員の逃亡の根拠について、総括のしようのない事態を隠蔽している。規約草案が討論にもなりえなかったことは周知のことであり、むしろ全体的に問題を把えるならば、そのような事態が「まさに意識の程度や積極性の程度に差があるからこそ、党への近さの程度にも差をつけることが必要」(『一歩前進二歩後退』)であるにもかかわらず、当時の全国委が、意識、思想という意味では雑炊性を免れえず、この事態を一刻も早く上から組織し、克服しなければならなかったのである。

(5) 「わが同盟の組織的質と規約・規律建設の立場」について

「烽火」派は九月CCにおいて「新路線」を決定した。それは組織的には「基本組織単位を中央委員会と(工場)細胞」とするものであり、又、レーニンの一九〇三年ロシア社会民主党二回大会を継承し教訓化された結果の「新路線」とされているが、いかなるものか検討しよう。

ここでも、ロシアの闘いの歴史と歴史的状況を欠落させたレーニンの評価が、レーニンの一知半解をうみだしている。「大会におけるレーニンの組織原則と規律は、綱領の中心的内容のプロレタリア独裁を

をめぐる日和見主義者との闘争」としてあり、問題は、「組織内部に発生する組織的日和見主義を克服しようとする時……個別の戦線指導と党の任務を全く同一視する傾向……階級と党の混同」であると。彼らは「階級と党の混同」を、彼らのたち遅れを正当化するためにもちだし、現在の「烽火」派を党と規定しているのではなかろうか？

「烽火」派のそのような傾向はどのように形成されてきたのか。それは「急進主義を克服しようとする綱領上の枠組が最小限綱領＝臨時革命政府の政策綱領とすることによって、従って最小限綱領は、日本資本主義国家権力との闘争における、被抑圧諸階層の諸要求の統合内容であるとし、又、諸要求に結集する被抑圧諸階層の戦線結合そのものが統一戦線であるとする党派と闘いえなかった」ことから、「プロレタリア独裁が、臨時革命政府の統一戦線権力一般にまで格さげされる思想」がうみだされたということらしい。

「蜂起―プロ独―共産主義」として「烽火」派は、臨時革命政府を否定する態度をうちだしたが、我々は、臨革の問題については以下のことから撤回するものである。そもそも、臨革政府は、世界革命戦争の機関として、世界同時革命の精神の下に掲げられた。それは、世界＝一国同時革命、その内部にはらんでいた見解である時間的空間的同時という空想的把握にもとづく世界革命の展望に対して、統一制か連邦制か、として一二・一八ブントにおいて統一共和制へ向けた世界革命の戦争遂行機関として定式化したし、この意義を承認しなければならない。だが、この世界革命の精神は内容において承認されるものであり、そして今日、日本におけるプロレタリアートの任務は、国家権力打倒、プロ独に向けた階級闘争として求めなければならない。又、革命政府の階級的性格をプロレタリアートを軸とした支配権力とすることによって、社会排外主義者との闘いを国家に対する態度における分岐として明らかにすることが可能となり、又、国家権力の打倒のみならず、プロレタリアートを支配階級に高めることを、戦士としてもプロレタリアートの革命政府（プロ独）を維持し、組織する能力をも問題とすることができるのである。

「烽火」派は、臨時革命政府の問題について全国委分裂以前においても一定確認されていた「おろす」ということに対して安易に取り扱っているが、理論問題、政治問題、組織問題を常にそういう態度でとり扱って自らの定見のなさをいつまでも続けるつもりなのかネ。このことによって、綱領問題として現実の運動を把えんとしたことの意義をいささかも低めてはならない。又、最小限綱領が臨時革命政府の政策綱領として現われたことは、綱領上の枠組のみの問題ではない。又、被抑圧諸階級・階層を決起させ、プロ独に組織することを否定してはならず、統一戦線が諸々の要求や戦闘宣言等によって形成されることは否定することのできないものである。プロレタリア独裁と統一戦線の混乱がもちこまれる。この決議は、プロレタリア独裁を、プロレタリアートしか存在しない権力と思いこんでいる。

さて、いよいよ本題である彼らの「階級と党の断固たる区別を闘いとる」ことの意義についてみてみよう。その闘いは「二つの局面で」闘うこととされる。「一つは……全面的政治暴露―組織化に当っては、無数の戦線とプロレタリア本隊との関係、党との関係が問題……無数の戦線を指導し、これを自らの味方へとひきいれてゆくことを明確な任務としうる我々のシンパ労働者を形成すること……シンパ労働者本隊を、わが党の指揮下の全国同一の規準と質をもった党の陣型組織に

まで打ち鍛える」ことであり、「第二は、〃蜂起―プロ独―共産主義〃を党の独自の事業として……深化させ」ることが課題とされる。

まずレーニンがどのように「党と階級の区別」について述べているか見ておこう。レーニンは『一歩前進二歩後退』において「党は階級の先進部隊としてできるだけよく組織されたものでなければならない。党のせめて最小限度にでも組織に服する分子だけを加入させなければならない」という一貫した主張の下に、「真の社会民主主義者からなる我々の党組織が強固になればなるほど、又党内にぐらつきと浮動性とがなくなればなくなるほど、党をとりまいて、党に指導される労働者大衆の分子に対する党の影響はそれだけ一層広く、多面的に、豊かになり、又みのりの多いものとなるであろう」と述べている。このような立場から規約第一条の思想を「〃組織にはいれ〃という刺激にあり、現実の統制と指導とを確保すること」にあるとしている。「烽火」派の「二つの局面」の第一は、「無数の戦線を指導」する「シンパ労働者を形成」すること、そしてこの「シンパ労働者本隊」は「全国同一の規準と質をもった党の陣型にまで打ち鍛える」ことである。なんというレーニンの修正であろう。レーニンが闘ったマルトフや、かつてのアクセリロードの見解の復権ではないか！「党の陣型」は、党を支持するシンパ層や個々の戦線も含まれるという命題が明らかに忘れられている。次に第二については、「党の独自の事業」として革命の道程が語られているが、蜂起についても、プロ独についても、共産主義についても、労働者階級の事業として、そして党をその先進部隊として問題はたてねばならないのである。彼らの言う「党と階級の区別」とは何を明らかにしたのだろうか？　経済主義の沼地派を証明したのである。

「安保粉砕・日帝打倒は……正しい闘争目標である……しかし、この点の党活動からして、党の計画として組織戦術を立てるのは全く誤り……それは必ず臨時革命政府樹立として、我々の組織を解体させ、組織を解体させる……党の独自の事業は……権力打倒の一斉蜂起へと結合し指導」しなければならないと強調される。これは混乱としかいいようのない事態である。過去の自らの誤った主張に対して、それが現実の革命の過程として描きだし批判することが、どれほど現実にそぐわないかは共産同の歴史が証明したではないか。

更に彼らの混乱は持続する。「被抑圧諸階層と工場プロレタリアを一定のソビエト的活動家組織に組織しようとすることを否定するのではない。そうではなく、我々の蜂起―プロ独―共産主義を、ソビエトの事業としてたてるのか、それとも……党の事業であると」するのかを自問自答して悦に入っている。労働者人民を「ソビエト活動家組織」に組織することを「否定するのではない」とソビエト主義者を容認し、党とソビエトを対立させ「党の事業」だと結論づけるとは、ブントの歴史的成果を清算し、抽象的観念的に「党の事業」を語ることに他ならない。又レーニンが「党をソビエトから解放し、党を真のプロレタリアの組織された前衛部隊として規定」したなるレーニンの評価まで行きつけば、一九一七年二月革命から十月蜂起に至るボリシェビキとソビエトの関係についてもう一度学ぶ必要があるのではないだろうか。〃全ての権力をソビエトへ〃とだれが主張したのか！「労働者代表ソビエトは労働者の組織であり、労働者政府の萌芽であり、あらゆる貧困な住民大衆すなわち住民の十分の九の利益の代表者」と規定しているし、この「労働者の武装を援助せよ、少くともこの仕事を妨害するな」（『遠方からの手紙』）としてボリシェビキの任務を明らかに

している。党とソビエトを対立させることからは何も実践的指針はうみだされない。我々は、まず中央集権党の理論的領域におけるマルクス・レーニン主義の復権が今日の似而非マルクス主義者の批判を通してなされねばならないことをあえて主張する。そうすることによってボリシエビキの闘いを正しく学ぶことができるであろうし、真の中央集権党の条件がかちとられるであろう。

（6）「我々の党組織を中央集権非合法党へと飛躍させせよう」に関して

この項は、「一二・一八下の組織の雑物のうしろに、教訓とすべき党の質ー中央集権ーを見つけ」だすこと、そして「体系的非合法党の到達地平をふまえ、中央集権非合法党として」出発しようというものである。この「中央集権非合法党」によって「我々の最初の立場、蜂起ープロ独ー共産主義を深化させ、支え」ることが可能としている。

だが「烽火」派が一二・一八ブントー全国委にわたる組織的実践が到達した限界を分析し克服せんとするのではなく、彼らにとっては「七〇年六月高原会議」から一歩も前進せず、むしろこの「高原会議」に「中央集権」を接木することが「中央委員会の任務」なのである。確かに、「権力獲得のために闘うにあたって、プロレタリアートには組織の他にどんな武器もない」。だが「プロレタリアートは、マルクス主義の諸原則による彼らの思想的統合が、幾百万の勤労者を一つの労働者階級に融合させる組織の物質的統一でうちかためられることによってのみ、不敗の勢力となることができる」（『一歩前進二歩後退』）のである。「綱領ー戦術ー組織」を個々バラバラにとりだし、その相互連関をあいまいにしたままでの総括と、「中央集権党」「蜂起ープロ独ー共産主義」等々に見られるブントの歴史的闘いの清算から導きだされた彼らの合言葉は、ただ「烽火」派の小宇宙でしか通用しない代物であり、そのような合言葉では全国委が突き当った限界を克服するものではなく、どこからでてきたのかわけのわからないものに乗り移る政治的一貫性の欠落を物語るにすぎない。

「非合法党を形ではなく質で」把えるがよい。党というものは、形もあれば質もあり、だからこそ規律が問題となり、綱領論争も行われるのである。

（7）結語

三号決議は、分裂後の「烽火」派の中でほぼ勝利を占めた××グループが、「烽火」派の弱点を「組織日和見主義、政治的妥協主義」として真剣に克服するかのように提起した。しかし、今見てきたように、「全国委の組織的分散」ー「指導部が党建設の作業を遅らせてきた」＝「日和ってきた」＝「一二・一八路線の清算」ー「一二・一八ブントは戦闘団ー戦闘団規律」＝「高原会議の到達地平の敗北」ー「高原会議」のごとく、全国委に一二・一八ブントを、一二・一八ブントに「高原会議」を、として問題がたてられ、全て「高原会議」以降の歴史は、その「到達地平」が「雑物」によって〃疎外〃された歴史とみられるのである。

今回の分裂を通して「烽火」派が、このような内容でブントの「正統派」を固守し、正当化を叫び続けていることが階級闘争の発展にとって障害物たる経済主義の沼地派へと転落したことを知るであろう。その意味では、三号決議は確かに「烽火」派の現状を、歯に衣を着せずに語ってくれたことに感謝しなければならない。

「プロレタリア通信」は結集をよびかける

『プロ通』は、「烽火」派の活動家に向って、組織の現状を理解し、「中央集権非合法党」建設に結集をよびかける。しかし、三号決議がそうであったように、これも又「然り、然り。否、否」である。

まず階級情勢については、「一時的なものではない構造的な危機」であり、日帝も「未曽有の危機」を迎えているとされる。このような階級情勢の分析では、政治的経済的階級的にどのような危機なのか明らかでない。我々は、政治的経済的階級的視角からその危機の性格を明らかにし、それが階級闘争にどのように反映しているのかを指し示さねばならない。このように分析することによって、帝国主義の発展がもたらす現象として社会排外主義の物質的条件やその育成を暴露することが可能になるのであり、又社会排外主義との闘争への労働者人民に対するよびかけが紋切り型の一面的狭さを免れ、買収された労働者の階級的性格として暴露しうるのである。「烽火」派の分析は、かつての第二次ブントの「危機論型分析」への傾斜に他ならない。

「急速な情勢の展開の中にあって、わが同盟は低滞状態にあることを直視しなければならない」ほど革命的左翼は危機に瀕しているわけである。この革命的左翼の危機は何によってもたらされたのか検討しなければならない。レーニンの言う中央集権主義の規準から「中央の思想的実践的指導において分散があり、ーその端的現われとしての『烽火』発刊の低滞、『通信』の規定力の欠如ー又、党外に対する権威の低下として同盟の現状」を指摘する。このことは七三年八月のCCにおいて、全同盟員が感じていたことだし、ましてや党内闘争がそのような「同盟の現状」の中から必然的に生みだされざるをえなかったのではなかったのか。「烽火」派は、「同盟の現状」を二ー三年前に議論し闘われたことを隠蔽するためにもちだしてきたのではないだろうか。それは結局、四月CCを頂点として闘われた党内闘争を清算することになるのだが。

「烽火」派は、「この低滞、危機をもたらしている原因を」切開することに結集をよびかける。彼らの到達点はブントの歴史の叙述にとってかわられ（例の八木沢「流れ史観」）、赤軍派との分岐が強調されている。今回の分裂においてわがマルクス・レーニン主義派を赤軍派への屈伏として批判する彼らにとっては、赤軍派に対する批判をもって組織をまとめることが緊要の任務なのだろう。しかし、今日登場している赤軍派に対する批判にしてはおそまつである。

一二・一八路線は「赤軍派との党内・党派闘争の不徹底性からくる路線闘争を結成とほぼ同時にはらんだ。一二・一八路線下の党内闘争は、本質上、建軍ー革命戦争路線か、非合法党建設ー武装蜂起路線かとして」あったとし、このような党内・党派闘争から「蜂起ープロ独ー共産主義」が形成されたと主張される。これが彼らの「党内・党派闘争ーの一つの到達点である。しかしこの到達地平は、全国委員会に

よって「清算」されたことにより、第二段階的実践が根本的欠陥を露呈したのだと総括される。全国委は、「綱領問題を正面からうちだし」「党活動の全面的転換を主張した」にもかかわらず、「同盟の基本的党派性をおしだすものとしては徹底的に建軍－革命戦争路線（その綱領－組織－戦術）の批判として」路線的深化がかちとれず「同盟の党派性……をあいまいにし、路線の継承性を不鮮明にした原因が」あったと。しかし、「それは単に内容一般の問題ではなく、その路線提出のあり方、質にかかわる問題」として、作風（？）の問題へとすりかえられる。又、一月、四月ＣＣ議案の「根本的欠陥は……党内－党派闘争をを通じて形成された我々の路線的立場＝党派性」が、あいまいであったことから第二段階が位置づけられなくなった、そのような内容が問題とされる。〃内容は問題でもあり問題でもない〃、これが彼らの「よってたつ規準」である。

上記のような「弱点の克服は、第二段階の活動の中で、資本主義批判の深化としてなされた。同盟の現状を規定しているのは、その内容の誤りや、深化がたりないといったことなのではなく次の事である。第一に一二・一八資本主義批判－全国委によるその発展を武器として、建軍革命戦争路線……経済主義＝民主主義派の誤りを徹底的に暴き、最終的に結着をつけ……第二に社帝及び革マルの反革命性の暴露と、中国共産党への批判を、それを武器としたプロ独論の批判……第三に人民戦線派及び新左翼の先に述べた分岐への批判を媒介とし」て、三号決議の方針へと対象化させることとして、「ＰＢ－ＣＣの指導の問題」が提起されている。それは、問題は路線に体現する構造を組織的内容的に組織化されていなかったというこになり、一つは組織問題（組織建設上にあらわれた矛盾）として、同時に指導内容の検討として問題をたて、切開しなければならない、と。

「綱領における日和見主義は、当然に、戦術における日和見主義及び組織問題における日和見主義と結びついている」（『一歩前進、二歩後退』）、「綱領は戦術より重要であり、戦術は組織より重要である。イロハは語源学より重要であり、語源学は文章論より重要である。――だが、文章論の試験に落第して、いま原級にもう一年のこったことを、えらがったり、自慢している人たちのことを、どう言ったらいいのか？」（同）と、レーニンは言っている。一九〇三年のロシア社会民主党第二回大会を学ばねばならないと言った我が「烽火」派は、レーニンによって批判された新「イスクラ」派の日和見主義者の立場を擁護しているのである。

四月ＣＣにおける党内論争は、ＣＣの団結、その思想的統合としての資本主義批判の深化＝構造的脆弱性論の総括－と、綱領委員会の設置、第二段階の政治理論の検討－『反帝戦線』の主張をめぐる－として確立され、従って、ブント党内－党派闘争の規準を明らかにすることに向け闘われた。すべて路線を清算していたことが原因だと一方で規定し、他方では、否むしろ「ＰＢ－ＣＣ指導」のあり方であったと主張する「烽火」派は、自らの誤りを正当化しようと「蜂起－プロ独－共産主義」から全てを位置づけだした。そして彼らが唯一継承したという〃党精神〃、これは、三号決議で批判されたＲＧを頂点とする戦闘団の規律ではなかったのか！そして、「組織上の関係を精神的にしか承認しないインテリゲンツィア的個人主義」（同）と、一二・一八ブントによる中央集権主義をめざす闘いの中で生みだされた〃党精神〃を混同させてはならない。「自然発生性＝組合主義、手工業性を

温存させているのは、第二段階の綱領的立場の民主主義的傾斜によるだけではない。……組織原則及び規約・規律として〃組織に定型性を与える事〃この点に於いて自然発生性を温存させていた」のであり、このことを「課題」として出発するのが彼らの意志統一の結論である。

われわれはこのような「烽火」派の結論に対して、規律を可能にする条件が確立されたのか？その条件は何か？そして、「組合主義・サークル主義」との境界線は明確になったのか？と、質問しなければならない。

まとめ

第二次ブントの分裂という党内党派闘争の歴史は、戦術上（それと関連した組織問題）の分岐から、一二・一八ブント成立により科学的社会主義を綱領的立脚点にすえるという段階に至った。確かに、今回の分裂は、われわれにとっても、「烽火」派にとっても一つの試練である。第二段階の実践は、戦術、政治的暴露（宣伝、煽動）の狭さ、それが綱領上の狭さを基にしていたこと、それ故、理論闘争、党内闘争を不可避なものとして発展させたのである。

「烽火」派は、一二・一八ブント以降の歴史を清算し、俗流民主主義、経済主義の道をのろのろと歩み始めた。連合赤軍後の清算派がそうであったように、清算主義派の発生は自らの組織実践を清算することを共通のものとし、組織実践の総括を何か他のものへ求めたり、また転換がさけられない場合でも、それを具体的な諸実践を通して生みだされた中から発展的要因をくみとり、全体化することとして明らかにしようとせず、別な次元のものへ置きかえることに起因する。このことを、「烽火」派の二つの文章は証明している。

今日のブント圏での闘いは、綱領・戦術・組織総体にわたってマルクス・レーニン主義の理論で武装すること、このことをめぐって開始されているし、又、口先ではマルクス・レーニン主義を語りながら、それを狭め修正する徒輩、清算主義、復古主義がばっこしている現在、一刻も早く、ブント圏の闘いをマルクス・レーニン主義の復権＝勝利をかちとることに向け奮闘しなければならない。

共産主義的宣伝、煽動、組織を放棄し、トロツキズムに屈伏した観念サークル

共産同（全国委）ボルシェビキ派を再批判する

最近とみにマスコミをにぎわし、又、機関誌『マルクス主義』No.2を発刊して、何とかして自らの存在を保つことに憂き身をやつしているのが、現在の共産同（全国委）ボルシェビキ派（以下ボル派と略す）に他ならない。

この集団に対する我々の批判は、『マルクス・レーニン主義通信』No.7で既にその本質を暴いているが、彼らが今日なお、労働者階級に対して害毒を及ぼさんとしていることに関して黙っているわけにはいかない。けだし、「社会主義的イデオロギーのいかなる軽視、それからのいかなる離反も、とりもなおさず、ブルジョアイデオロギーを強めることを意味する」（『何をなすべきか』）。

もちろん我々は、彼らを批判することによって、我々の理論的発展が克ちとれるとも思っていないし、又、彼らの革命化を推進することもできないと思っている。だが、ボル派が、我が同盟の歴史をあともどりさせたり、清算することによって、社会主義と労働運動の結合の障碍となり、又、単一の党建設の事業を先に延ばそうとしていることに結果していることを暴きだすことはそれとして一つの任務である。

従って、彼らの批判という形式をとってはいても、我々の基本的な見解を述べること、そのことによってボル派のわずかな影響力をも断ち切ることに重点がおかれるであろう。

この集団は、綱領的には全く定見をもたず、一生懸命にマルクス・レーニン主義を学んでいる最中であり、戦術的には、「今秋の課題の第一は、云々、第二は、云々……」（『プロの旗』）というように、「五大課題」を掲げることに見られる如く、全国委の政治的狭さのみを継承し、完全なる俗流民主主義であり、組織的には、理の当然としてサークル主義である。このような体たらくであるからして、我々の批判も、綱領・戦術・組織各領域に於て全面的に行うという程、大げさにかまえる必要もなく、更に、『マルクス主義』にしても、生田論文に関しては、『通信』No.7の批判がそのまま有効であり、かつ、生田自身が我々の批判点を無総括で取り入れるという努力にもかかわらず、『マルクス主義』No.2の論文に至っては、我々が引用したマルクス、エンゲルス、レーニンの文献を忠実に追うことによって、全文章の何と50分の49が引用であるという驚くべき事態になっている。従って本号では、『マルクス主義』の本田某なる筆者のしたためた論文を中心に批判していくことにしたい。それは、この本田某が、ボル派の理論面を一身に背負っているようであり、No.2に至っては、本田論文集とでもいえるような状態だからである。

そもそもこの本田なる男は、分裂直後に常に顔をだす、その道のベテランであり、しかも、人間は空気がなければ生きられないというような誰でも知っているような当り前のことを、特有のレトリック（修辞学）でもってさも一大発見をしたかの如くさわぎたてる事大主義者に他ならない。

今度の「烽火」派の分裂に際しても又、雨をえた蛙の如くに生き生きとし始めたのである。だが、悲しいかなこの蛙、大海を知らなんだ。尤も、そうであればこそ、我々の批判に際しても、蛙の面に小便とばかり、平気の平左なのかもしれないが。

さて、読者諸氏には、しばらくたいくつな作業につきあってもらわねばならないことを予め断っておく。

第一章　共産同（全国委）と党綱領問題
―党綱領確立へむけて（序）―について

この論文は、冒頭で、「十月中央委員会」の評価を述べたあと、「三ケ年の綱領論争は、『綱領問題』を巡る思想的、理論的闘争であって、決して綱領の基本的な内容を巡っての論争ではなかった。それは、言わば『方法論』を巡る論争でしかなかった」（『マルクス主義』No.1・P68―以下この章のことわりのない引用は全て『マルクス主義』No.1）として自らの立場を定め、『八木沢メモ』『（上）（下）論文』『部落論文』『中央書記局通達No.8』『旧一号議案』を素材にして、その総括の項目を以下の五点に求める。

「これらの展開に於る誤りや限界の中で、第一に重要な点は、何よりもそれらの提起が、一二・一八路線に於る綱領問題の方法について、批判的総括を回避している点である」（P69）、「第二に重要な点は、『戦略』概念に対する全くの無総括がもたらしている所の混乱であり、基本的には、革命論の方法論を巡る混乱について、全く総括がなされていないことであり、第三には、トロッキーの過渡的綱領主義に対する批判の限界であり、第四には、アハーリン批判の歪曲、及び限界であり、第五に、臨時革命政府と最小限綱領を巡る誤り（致命的）である」（P70）というのがそれである。

この論文は、以下この項目にそって展開されているので、我々の批判もそれにそって行うことにしよう。

〈註〉『八木沢メモ』『（上）（下）論文』は、『鉄鎖を砕け』（72年、共産同全国委ー首都圏委員会発行）掲載
（以下の小見出しの諸点は先の引用の諸点）

（一）第一、第二の点に関して

この点に関する本田君の主張は、はなはだ貧困である。「我々は、全国委員会の革命論を深め、創りあげていく方法を『綱領・組織・戦術』あるいは『綱領・戦術・組織』として、体系的になす方法を措定している」（P70）という立場から、『戦略論レジュメ』（『烽火』再刊一号）の「革命論」＝「①共産主義論、②戦略論、③運動組織論」を、「革命論の中に一貫して権力問題を欠落させる方法であり、とりわけ『綱領』を全く死んだ抽象に……低くめてしまう日和見主義的方法」（P70）に他ならず、「綱領を戦略と分離することによって、それは不可避に、綱領……を共産主義論と同一視する」（同）と批判し、「綱領・戦術・組織」と「綱領・戦略・組織」の対立を措定し、「『戦略問題』とは、その八割まで『綱領問題』である」（P71）というのがそれであり、これが であり である。

まず、「方法論」「綱領問題の方法」「革命論」「革命論の方法論」なる観念論に批判の矛先が向けられねばならない。かって我が加納「委員長」は、「古今ヨーロッパの諸哲学に於て、その有する世界観の、合理的組織化カテゴリー体系は、まさにそれを体系づける方法と不可分であって、その意味で哲学は、その体系と方法を自らの生命とするのである。従って、『我々の方法』という場合、明らかに我々は、我々の哲学及至は、哲学に対する態度、更には世界観の領域にまで踏み入ることを要請されるのであり、かつそれが最も原則的な態度であるというべきである」（『共産主義』一四号）、更には「マルクスの理論は同時に、当時の共産主義批判、国民経済学批判の上に形成されたのでもあるということであり、しかも彼は、『序説』の『経済学の方法』を除いては、方法論をまとまった形で叙述している個所はなく、至る所断片的に示される唯物史観や弁証法の内容も、体系化されたものでは決してないということ、ましてや認識一般や方法一般として、方法論的に展開されてはいないということ……この点に留意すべきである。まさにここにマルクスの方法のすぐれた特質があり、弁証法の核心があると考える」（同）と述べたことがあった。

加納君は、このことを本田君に教えてはいなかったのかね？ もっとも、本田君の場合、革命論とは何々であり、方法論は何々であると概念規定をしていないのであり（このことは、マルクス・レーニン主義の修正という意味では、本田君は日向君よりも小者であること以上ではないのだが）、その観念的性格は鮮明ではないが、しかしながら、「『綱領問題』を巡る思想的、理論的闘争」を「綱領の基本的な内容を巡っての論争」と切断するなど、何らかの方法論を前提としていることは明らかではないか。

次に、『戦略論レジュメ』の批判だが、本田君の批判自体なりたたないものである。「革命論の中に……権力問題を欠落させる方法」だって!? 『戦略論レジュメ』の革命論は本田君も書いているように、①共産主義論②戦略論③運動組織論によって構成されているのであり、②は「帝国主義の分析、その中での諸国家の位置、国家権力の分析、

階級分析……云々」と語られている。そもそも「権力問題」なるあいまいな概念でなで切ること自体観念的なのであるが、それを百歩譲ったとしても、『戦略論レジュメ』の革命論では、②戦略論として「権力問題」という領域という限りでは展開されているのである。

だからして彼の結論は、戦略の八割ほどは綱領に入れなければならないという、『戦略論レジュメ』の構成項目を多少入れかえることに終ってしまったのである。

では、このような帰結をもたらしたものは何か？ 革命党の内実を決定する綱領、戦術、組織を、「革命論」なる論の世界に昇天化せしめたことである。否、もっとはっきり言えば、本田君は綱領、戦術、組織に関して何もわかっていないのである。

例えば本田君は、「『綱領、組織、戦術』あるいは『綱領、戦術、組織』」とかいうように、綱領、戦術、組織ということについて確信を持っていない。本田君の表現に従って述べれば、「綱領と戦略を分離すること」は、他ならぬ、かの悪名高き「組織＝理論と実践の媒介」論の上で、党＝共産主義者を、原理や未来を認識している者、として措定していたことであり、その結果として、本田君が言っているような「綱領＝共産主義論」なることに帰結したのである。これにのっとった党建設が徹底して自然発生的であることは言うまでもない。従って、綱領ー戦術という形での問題は出てくるはずもなく、戦術は、専ら、大衆運動の促進ということをでることができず、党の戦術（「政党の戦術というのは、その党の政治的態度、言い変えればその党の政治活動の性格、方向、方法のことである」（『二つの戦術』））ということからすれば、典型的な追随主義であったということである。

更に、組織上の問題は、党建設という意味では重要な一要素であるにもかかわらず、それは綱領ー戦術に規定されるものであり、その逆ではない。だからして、「綱領、組織、戦術」でも「綱領、戦術、組織」でも、どっちでもいいというような代物ではないことが確認されねばならない。

全国委が「綱領、組織、戦術」という言い方をしたのは決して偶然ではなく、一般共産主義者（もちろん人によってその把握は異っていたが）の同心円的拡大として党建設を考える傾向、一二・一八路線を立場一般として承認し、その内容を認識した部分の拡大を望む傾向が混在していたことを示すものである。

他ならぬ我々は、このことを批判的に総括することによって初めて、第二次ブント、一二・一八ブント、全国委を綱領、戦術、組織、すなわち組織実践総体にわたって総括する途を切り拓くことができたのである。

なお、「戦略」概念について後で再び見るが、一言だけ言及しておけば、これはスターリン、トロツキーが、いわゆる「革命の型」論の土俵上で造ったものであり、我々の実践とは無縁である。

これまでで、本田君＝ボル派の綱領ー戦術上の見解はすでに明らかになってしまった。本章では、以下の展開は、我々の見解を明らかにするということに主眼をおかざるをえない。以下の本田君の主張は評論に移るからである。

〈註〉

本論の完成段階において、本田君の「過渡期世界論総括」（『プロレタリアの旗』№6・7）を目にすることができた。それによると「過渡期世界論の基本的性格とは、現代革命の綱領、戦術、組織

的見解、すなわち現代革命論を組み立てる際の基本的な歴史認識、時代認識の基礎を為すものであり、又、その意味では、単なる情勢理論にとどまらず、現代革命の基本的性格、形態、方法の概括的把握であるといいうる。それは、今日の現代世界を一九世紀とも、又二〇世紀初頭の時代とも明確に区別しうる一つの歴史的時代であり、何よりもそれは、一九一七年ロシア革命の勝利という世界プロレタリアートの輝しい勝利によって開始せられた世界社会主義革命の時代、資本主義から、世界プロレタリア独裁への過渡の時代として把握する方法である。そしてこの世界史的過渡の時代の歴史的運動法則を探り、プロレタリアートの変革の為の指針ー現代革命論の創造へと適用するその方法と内容である」（No.6）らしい。何としても彼らは、「現代革命論」をものにするつもりらしく、過渡期世界論をその方法、対象認識の方法に変えてしまった。

「ロシア革命以降の世界史的一時代を、一つの過渡的時代として把握する方法は、ひとり共産同にとどまらず、全般的危機論ー体制間矛盾論に代表される如くに存在する」（同）と、スターリン主義の方法との同一性を自認しているのを見れば、「現代過渡期世界の第三期」などというのは、単なる愛敬ではなく、真剣であると考えざるをえない。

（二）第三の点について

本田論文は、「ボルシエビキ綱領の総括、継承は、何よりも、綱領改訂を巡る『レーニン・プハーリン論争』の総括を通して確立されなければならない事であり、トロツキー批判は、むしろその問題の深化を放棄させる役目を果している事である」（P七二）ということを大前提とした上で、『メモ』の「過渡的綱領主義批判」を批判する。

本田君は、「『過渡的綱領主義』批判が、その方法においても、内容においても誤っていること、だから結局のところ、トロツキー批判は、『レーニン主義の復権』にとって直接の、最大の環ではありえないこと、そして、又、それは決してトロツキーの政治理論を批判しえていないこと、これらの方法的誤まりが、我々の綱領問題の深化・発展を阻害した大きな要因の一つである事を論証すること」「とりわけ、トロツキーの『過渡的綱領』に対する正確な認識と批判を打ちたてる事」（P七四）を自らの課題に課す。

『メモ』は、本田君が引用しているように、「過渡的綱領」に対して「最大限！最小限のかけはしを、『死の苦悶』という客観情勢に求めるものであり、客観主義であり、プロレタリア人民をどのように鍛え、組織するものかという『主体的』に問題は提起されない」と批判している。これに対して本田君は言う、「『過渡的綱領』に対する批判は、三〇年代の国際共産主義運動に対する評価・批判として為されないならば、何の意味もないのである」（P七五）、と。これは半分は正しいが、今問題となっていることから言えば、すりかえである。『メモ』は、〃過渡的綱領主義〃を批判しているのであり、それは「政策阻止闘争に階級闘争をおしとどめるものであり、権力奪取の理論ではない」としているのである。だが、後に判明するように、本田君は〃過渡的綱領主義〃の存在に否定的なのである。本家本元の第四インターが、「過渡的綱領の思想」と言っているのであるから、それを

所与のものとして受けとってもよさそうなものだが。

本田君は続いて、「問題はなぜ、この『過渡的綱領と第四インター』が敗北せざるをえなかったのかという点でこそ、なさなければならない。だとするなら、まさに、この綱領の形式にその誤りや限界の根拠があるのでもなく、又、その内容にすら、その多くの根拠が見い出されるのではなく、それは、一九一七年以降のボリシエビキ内党内闘争におけるトロツキーの敗北にこそ、総括の核心が存在している事に気づかなければならないし、まさに、トロツキーの政治理論に我々が多く依拠して来たとするならば、それは、多分この『第四インターナショナルの綱領』よりも、ロシア革命を巡るトロツキーの理論であった事は、我々にとって、自明の事である」（P七六ー七七）と、トロツキーに救いの手をさしのべるのである。

本田君よ、これは問題のすりかえというものである。今問題となっているのは、「過渡的綱領」が何らかの思想を体現しているかどうか、そしてそれがマルクス・レーニン主義として把握しうるか否か、ということである。本田君は、「三〇年代のまさに動乱の革命期に対するプロレタリアートの革命的指針として、この綱領がどういう位置を占めたのかということこそ、最も重要な総括と批判の軸である」（P七六）とのたもうた。然り、その通りである。そして、「過渡的綱領」は、プロレタリアートの革命的指針たりえなかったのだ。トロツキズムがロシア革命を巡る過程で形成されてきたということはまぎれもない事実であるが、「過渡的綱領」がトロツキズムを体現していることも又、事実である。

従って問題はこうである。三〇年代のプロレタリアートの敗北においてトロツキズムがどういう役割を果したか、つまり、三〇年代の敗北の総括を前提として、それとの関連で「過渡的綱領」＝トロツキズムの評価を行うということであり、トロツキズムの評価をスターリンに対する敗北という視点から行うことこそ、反スタ・トロツキズムの立場に他ならない。

とまれ本田君は、このような前奏の後に、驚くべきトロツキー讃歌を唱い始めるのである。読者諸君、若干引用が長くなるが、腰をぬかさぬように傾聴されたし。

㊀「トロツキーは『綱領』を規定している、又その任務を定めるべき情勢の認識（一九三〇年代の）に関して、『プロレタリア革命の為の経済的前提条件は、一般的にはすでに、資本主義の下で、到達しうる最高の点まで成熟している。……今やプロレタリアートの番であり、それを主としてその革命的前衛の番である。人類の歴史的危機は、革命的指導部の危機に還元される』と述べている。そしてこの『革命的指導部の危機』に関して、『革命前的状態を革命的状態に転化させる途上に横たわる主要な障害は、プロレタリアート指導部の日和見主義的性格、つまり、大ブルジョアジーが死の苦悶にあえいでいる今でさえ、なおこれに対していただくそのブチ・ブル的憶病さ、大ブルジョアジーとの裏切り関係である』と述べ、更にコミンテルンを批判している。これらの情勢の認識は基本的に正当なものとされなければならない。当時の国際共産主義運動の中の日和見主義コミンテルンの『民主主義の危機・防衛』なる認識に対しては、唯一の革命的見地である」（P七七）

㊁「そしてこのような情勢の中では、プロレタリアートの綱領は、過渡的要求の綱領を含まなければならないとしている。『次の時期――煽動、宣伝、組織の革命的時期の戦略的任務は、客観的革命的条件の

成熟とプロレタリアートとその前衛の未成熟……との矛盾を克服することである。大衆が日常闘争の過程に於て、当面の要求と革命の社会主義的綱領の間の橋を発見するのを助けることが必要である。この橋は、今日の状況とプロレタリア階級の広範な層の今日の意識から生まれ、必然的に唯一の究極的結論――プロレタリアートによる権力の獲得に導くところの過渡的要求の綱領を含まねばならぬ』（三、最小限綱領と過渡的綱領）。これらの主張も又、一般的に正しいものであり、三〇年代の激動の渦中にあって、プロレタリアートには、プロレタリアートの権力奪取の思想だけが必要であった。だから『過渡的方策』を提起することは、疑いもなく正しい。その根拠を革命的情勢に求めることも正しい」（同）

㊂「『架け橋』を情勢ではなく、『客観的情勢とこの情勢から生じる歴史的任務』の提起のうちに見い出そうとしているのであって、『死の苦悶』一般に求めているわけではない」（P七八）

㊃「過渡的要求の方法は、『実現可能か、実現不可能かは、現在の場合には力関係の問題であって、これはただ、闘争によってのみ決定することができる。その直後の実際的成功はどうであろうと、この闘争によって労働者は、最も良く、資本主義奴隷制を清算してしまう必要を理解するようになるであろう』（第四テーゼ）という精神にそって出きる限り展開することを試みている」「従って、それは又、『プロレタリアートをどのように鍛え、組織するものか』ということについてこそ、『過渡的綱領』の最大の眼目であ」（同）る。

㊄「又、何よりも、コミンテルンが、ブルジョアジーに対し、プロレタリアートの武装解除を迫り、階級闘争を民主主義の防衛闘争に転換することを強制してゆくのに対し、何よりも、プロレタリアートの独自の武装が必要であることを、トロツキーは提起しており、これは、最も重要な方針であろう」（同）

㊅「『過渡的綱領』の基本的性格は何であるのか、この『綱領』をボルシエビキ綱領と対置して、その領域の狭さの批判や、綱領の形式の不備を批判するのは当らないであろう。なぜなら、この綱領は、『行動綱領』にすぎないものであり、トロツキー自身も主張しているように『完全な綱領』ではないからである」（P七九）として、トロツキーが考えていただろうと思われる内容を推理して、綱領の構成まで考え出してやるのである。

「①帝国主義段階に於ける現代資本主義とその危機の諸要因に関する理論的定式化、②革命前の情勢から、社会主義革命の始まりに至るまでの大衆的諸闘争を導くための過渡的戦略、③社会革命そのもの、④権力獲得の為の蜂起、⑤資本主義社会からプロレタリア独裁への移行――プロレタリア独裁について、⑥プロレタリア独裁から社会主義社会への転化について」（P八〇）

㊆「だが、にもかかわらず、この『過渡的綱領』が、四〇年八月、トロツキーがゲーペーウーの手に倒れてからこの『綱領』を普遍的戦術に高めあげる誤りに、彼の後継者と第四インターは陥ってしまったのである」（同）「トロツキー亡きあと、第四インターに問われたことは、『未完成の行動綱領』を『完成された綱領』へと高めあげることであったろう」（P八一）

やれやれ、ここまであきもせずに読み続けてきた読者は、非常に忍耐づよい人であることを保証する。

まずは㊀－㊆までの逐条的批判を簡単に述べておこう。

㊀「過渡的綱領」の第一章を、三〇年代の情勢として把握することは誤りである。本田君も引用しているように、トロツキーは「完全なる綱領は、帝国主義段階に於る近代資本主義社会の理論的説明がなければならない。危機の理由、失業者の増大などの理論的記述を含んでいなければならない。この草案の中では、このような分析は、第一章で簡単に概括されている……」（『過渡的綱領に関する討論（続）』）と述べている。

このことは、第一章が三〇年代の情勢を含んでいるとしても、表題も示す通り、帝国主義の特徴づけなのである。そうして見た場合、詳しくは後に述べるとして、第一章が単なる「資本主義的崩壊」の危機を述べ煽動している以上でないことの限界は自明のことである。第二章にしても、コミンテルンの裏切りを述べるだけで、それが国際共産主義運動上に占める位置という点からすれば、全くあいまいであり、第一七章においても、スターリン官僚の打倒をのみ述べるという消極的な態度に終っているのである。これらを「唯一の革命的見地」などとほめたたえるのは、本田君流に言えば、あの極右のスターリニズムに対してはどんな批判でも一見正しいように見えるのであって、本質を見失うものに他ならない。

㊁故意にか、偶然かは知らぬが、本田君は、テキストでは「煽動、宣伝、組織の革命前的時期」とあるのを、「……の革命的時期」と修正して引用している。かくして彼は混乱せざるをえないのである。

ともかくもトロツキーは、一般的時期における戦術を提起しているのである。はたして、「客観的革命的条件の成熟と、プロレタリアートとその前衛の未成熟との矛盾を克服すること」とは、「大衆が日常闘争の過程に於て、当面の要求と革命の社会主義的綱領の間の橋を発見するのを助けること」なのであろうか？

レーニンであるならば、言うまでもないことだが、全面的全人民的政治暴露の組織化と、それを担う組織の建設をこそ訴えるのである。又、客観的条件が成熟しており、主体的条件が未成熟の時期にも、「革命的情勢が存在することを大衆の前に明らかにし、それの広さと深さを説明し、プロレタリアートの革命的自覚と革命的決意をよびさまし、プロレタリアートを助けて革命的行動にうつらせ、この方向で活動するために革命的情勢に応じた組織をつくりだすという義務」（『第二インターの崩壊』）を共産主義者に課しているのである。ここには追随主義のかけらもない。

トロツキーの思想は次のセンテンスによって鮮明になる。「プロレタリアートによる権力の獲得」という「究極的結論」が「今日の状態と労働者階級の広範な層の今日の意識から生れ」てくるというのだ。「過渡的要求の綱領」というのはその触媒とされている。これこそ〃過程としての蜂起〃という見本に他ならない。

㊂略

㊃この一精神」こそトロツキー政治学を代表している。何で、賃金・時間のスライド制の要求を闘うことによって、「資本主義的奴隷制を清算してしまう必要」が理解されるのか!?　ここで再び〃過程としての戦術〃が顔を出した。

㊄略

㊅これが圧巻である。何で「行動綱領」であるならば、「蜂起による権力奪取」とか、プロレタリア独裁については語る必要がないのかね？このような考えの中にトロツキーの思想が表現されているのである。

本田君に尋ねるが、「過渡的戦略」とは一体何のことかね？　更に

何もいっていないが、この綱領の構成を正しいものとして作りあげたのか？どうもそうなのであろう。最早、本田君の頭の中には、マルクスとかレーニンとかは存在せず、宇宙はトロッキーを中心に回っているのである。

なお、つけ加えておくと、我々は、トロッキーがドイツを初めとするヨーロッパの労働者階級の敗北に手を貸し、その後に第四インターを創設したことの中にトロッキズムの本質を見るし、「過渡的綱領」はその過程に位置づけられねばならないと思っている。又、上記に補足して「過渡的綱領」の誤謬をあげておくと、第一に帝国主義戦争に際しての内乱（階級闘争の一定の発展段階としての）のスローガンがないこと、第二に、あいもかわらず民族自決権に関して言及していないこと、第三に、非合法組織の建設に関してあいまいであること、等々である。

㊥いよいよクライマックスである。トロッキーが誤っていたのではなく、継承者が誤ったのだとされる。

第四インターは、トロッキーの遺志をついで、「過渡的綱領」を「完全な綱領」へと高めるべきだったとされる。レーニン主義者トロッキーの神話は復活した。今や、塩見君の「スターリンは正しかった」論、片やトロッキー復活論、まさに天下大動乱の時代である。

さすがにまずいと思ったのだろう。「トロッキーは、その（第四インターの誤謬の）半分以上の責任を自己のうちに負っている」（P81）と述べ、本田君は次の二点だけあげている。すなわち、ひとつは「旧い最小限綱領は、プロレタリア革命の為の大衆を組織的に動員することを任務とする過渡的綱領にとってかわられ」ねばならないということは正しくないこと、もうひとつは「『没落資本主義の時代』にあっては、階級闘争は、全て不可避的に、社会主義的意識……を生み出さざるをえない、と述べることによって……『高次の自然発生性』に拝跪する」（P83）ということの二点である。だがこれは、本田君にしてみればささいな誤りでしかない。「もちろんトロッキーは、この試みを体系化しようとしているわけではない」（同）、と。

そして突然、「八木沢イズムは、過渡的綱領主義批判にもかかわらず、戦略主義（＝自然発生性の体系化・屈服）という点に於て、本質上、過渡的綱領主義である」（P84）と述べられるのだ。

だが読者諸君、誤解してはならない。これまでの推論からわかるように、トロッキーではなく第四インターが過渡的綱領主義に陥ったのであって、八木沢イズムはトロッキズムであるといっているのではないことを理解する必要があるのである。

読者諸君、何かわかったであろうか？　本田君の行ったことは、「過渡的綱領」を「つぶさに」検討して、大まか正しい、ただ二つほど欠陥があるという評価を下したことであり、又、その「過渡的綱領」を普遍的な戦術に高めあげると、戦略主義、過渡的綱領主義になり、八木沢イズムはその誤謬に陥ったということが明らかになった。

鳴り物入りで開始された本田君の論文が、たったこれだけのことを明らかにしただけなのである。「核心」たる「ボルシェビキ内党内闘争でのトロッキーの敗北」はどうなってしまったのだろうか？　それにしてもとんでもないことを言い出したものだ。

先にも述べたように、我々は過渡的綱領をトロッキズムが体現されたものとして把える必要があると思っている。これまで本田君の主張に一対一的に対応してきたが、最後に我々のトロッキズムに対する評

価を、必要な範囲に於て明らかにしておきたい（三〇年代の階級闘争の敗北の総括は別の機会に譲る）。

第一、綱領上に於て。

まずトロッキーの経済学説から見ることにしよう。その領域での数少い著作から、ここではオットー・リューレの『カール・マルクスの生ける思想』に付した「序説」をとりあげる（『トロッキー選集補巻3』）。

トロッキーは、「マルクスの方法」等、前書き的な部分を終え、本論の冒頭でこう述べている。「現代社会に於ては、人間の間の基本的な紐帯は交換である。労働の生産物は全て交換過程に入ると商品となる。マルクスは、彼の研究を商品をもって始め、資本主義社会のこの基本的細胞から、人間の意志から独立して、交換の上に客観的に形成された、社会的諸関係を演えきした」、と。だがこれは交換（過程）をアプリオリに自立化させ、商品の姿態変換という把握を放棄せしめる、「この形態変換の理解が全く不十分だということは、価値概念そのものに関する不明瞭さを度外視すれば、一つの商品の形態変換は常に二つの商品の……交換に於て成就されるという事情のせいである」（『資本論』）。従ってトロッキーは、交換過程を資本の生産過程の一契機たることを忘却し、まずは神秘化された現象のとりことなる。

そこからトロッキーは、「どうして生存に不可欠なさまざまな経済部門の相関的な均衡が創出されるであろうか？」という問題意識をひっさげ、「明らかなことであるが、資本主義経済の様々な側面……を支配している法則は数多くあり、かつ複雑である。だが、それらは結局のところ、マルクスが発見し、徹底的に考究した単一の法則、すなわち労働＝価値法則に帰着する。この法則こそが、資本主義経済を根本的に規定しているのである。社会は自由に処分できる一定量の生きた労働力の貯蔵をもっている。労働力は、自然に対して適用されると、人間の欲求を満足させるのに必要な生産物を産出する。独立した生産者の間の分業の結果として、生産物は商品たる形態を採る。商品は互いに一定の比率で、初めは直接に現物で、その後に於ては、金又は、貨幣を媒介にして交換される。商品を一定の関係に於て互いに均等にするところの商品の基本的属性はそれらの生産に消費された人間労働――抽象的労働、労働一般――である。これこそ価値の基礎であり、尺度である。……商品を受け入れたり、拒否したりしながら、交換の活舞台である市場は、諸商品が社会的必要労働を含んでいるか、否かを判断し、このようにして社会に必要な様々な種類の商品の量的比率を決定し、従って又様々な職種に応じた労働力の配分をも決定するのである」と述べる。

そもそも問題意識からして問題であり、「自由に処分できる」（誰が？）、「生きた労働力」（？　死んだ労働力とは何か）、金、貨幣を商品として把握していない、等々。多くの誤まりが目につくが、何よりもここでトロッキーは、マルクスの価値法則をリカード労働価値説の地平まで後退させている。従って、「市場」の主語化から、価値と価格の混同などはおくとしても、結局、「価値は需要と供給によって決定される」と、されてしまうのだ。だが、これが何も説明していないことは言うまでもなかろう。トロッキーは商品物神に目がくらんでしまった。初めのボタンをかけちがえれば、終りのボタンはかけることができないのだが、ともかく、トロッキーの後について、「そ

の入口には無用の者入るべからずと掲示されてある隠された生産の場所に入って行こう」。

「不平等と搾取」と題うって、トロツキーは語る、「だが、商品はそれに投下された労働量に応じて相互に交換されるとすると、ではどうして平等から不平等が生じうるのか？　マルクスはこの難問を、一切の他の商品の基礎に位置する一つの商品、すなわち労働力なる商品の、固有の性質をあばくことによって解決した。生産手段の所有者たる資本家は労働力を買う。他の全ての商品と同様、労働力はそれが包含する労働の量、つまり労働力の維持と再生産に不可欠の生活資料の生産に必要な労働の量に応じて評価を受ける。しかし、労働力なる商品の消費とは労働、つまり新たな価値の創造である。これらの価値量は、労働者が受けとり、生活維持の為に消費する量よりも大きい。資本家は搾取せんがために労働力を買うのである。不平等の源泉はこの搾取である」、と。

これで全てである。なるほど単純明解ではある。だがそれと、プロレタリアートの武器となりうるか否かということは別の事柄である。ここで言われていることは、「人間の労働とは自己の生存に必要以上の生産物を産出する」という観念からの説明であり、搾取を労働力の自然的属性の帰結にする試みに他ならず、不平等の源泉を搾取とするが、それは、不払労働にあることを言うのみである。

かくしてトロツキーは、「階級闘争とは剰余生産物をめぐる闘争以外の何物でもない」とするのである。先ほどの非科学的な内容から当然階級闘争の科学的把握は不可能である。「剰余生産物をめぐる闘争」とは、労働者の側からすれば、不払労働を減らす闘争、すなわち賃上げ闘争に他ならない。トロツキーは階級闘争を全てそれに解消してしまうのである。

以上がトロツキーの基本的な資本制的生産様式の把握であり、次に「競争こそは資本主義の主要な創造的バネであり、資本家の存在の歴史的正当化であった」という自由競争時代へのあこがれと、独占の現象的説明である「競争と独占」、アメリカの資料の説明である「富の集積と階級矛盾の成長」の項が続き、ゾムバルトの「カール・マルクスの予言は、第一、賃金労働者の窮乏化、第二、職人と農民の階級消滅による全般的『集積』、第三、資本主義の破局的崩壊、であった。だがこういったことは全く発生しなかった」という修正主義に対してのマルクスの命題の対置、工業と農業の格差を述べた「資本主義の腐朽」、ルーズベルト等との対話から、「生産の可能力と私的所有」という項で、資本主義的所有について一言もしなかったトロツキーが、突如として「資本主義的所有と生産の拡大を求める社会の必要との間の和解できない矛盾」を語るのである。

とにかくはっきりしたことは、トロツキーには、資本制的生産様式がある特殊な一段階であるという、特に、人類前史の最後の段階であるという認識が全くないということである。だからして、「革命は鉄の歴史的必然性の結果として、すなわち一方に於る、生産諸力の成長が高度な爛熟に至ったこと、他方に於る、価値法則に左右された下でこれらの生産諸力を、もはやそれ以上育くむことができなくなったこと、から問題になったのである」というような公式主義的なことを叫ぶだけであり、逆に言えば、この内容は、万年革命情勢論ということに他ならず、結局、「マルクスは、資本主義の発展が不可避的に陥らざるをえない経済的破局…からの抜け道は生産手段の社会化による以外にはありえないであろうと予言した」というふうに、プロレタリアートの歴史的位置を捨てさり自由主義的、民主主義的見地に陥るのである（「社会主義の不可避性」という項で語られている）。

そして最後の項で、トロツキーは言う、「資本主義は技術の水準を高め、そして世界の全ての部分を経済的なきずなで結んだという二つの歴史的功績をなし遂げた。かくして、資本主義は我々の地球上の全ての資源の系統的な利用の物質的必要条件を創造した。だが資本主義にはこの緊急の任務を果すことはできない。資本主義の基地は、国境でかこまれ、税関と軍隊をもつ民族国家から拡張しつづけるであろう。しかし生産諸力は、ずっと以前に民族国家の境界を越えてしまい、以前には歴史の進歩的要素（傍点－引用者）だった国家を耐えがたい抑制物にかえてしまった。帝国主義戦争は、あまりにも狭あいになりすぎた国家の境界に対する生産力の爆発的叛乱以外の何物でもない」、と。

ここでは、細かいことはふれず、生産力と国家の対立ということにだけ言及しておけば、これは、経済学的に誤りであるのみならず、国家が階級闘争の非和解性の産物であるという見地を放棄し、国家に対する日和見主義的、民主主義的見地に転落しているのである。

かくのごとく見てきたように、トロツキーの経済学は、資本主義的生産の神秘的性格に完全に埋没したものであり、それは階級闘争、及び国家に対する民主主義的見地を形づくっている。それらは、「永続革命論」という革命の発展法則の体系化として完成される。

次にそれを見てみよう。

トロツキーは「永続革命論」の序論の中で、「永続革命論のまわりに創り出されたカオスを消散させるためには、この理論の中に統合されている思想の三つの方向を区別する必要がある。

第一に、それは民主主義革命から社会主義革命への移行の問題を含んでいる。現実にはこれがこの理論の歴史的起源である…

『永続』論の第二の側面は、社会主義革命をも永続的なものとして特徴づける。無限の長期間にわたって、又不断の内部闘争に於て、全ての社会的諸関係は変革される。その過程は必然的に政治的性格を保持する。すなわち、変革期に於る社会の諸グループの衝突を通じて発展してゆく。内戦と対外戦争の勃発は、『平和的』改造の時期と交互に現われる。経済、技術、科学、家族関係、道徳及び慣習の革命は複雑な相互作用に於て発展してゆき、社会をして均衡状態に到達することを許さない。社会主義革命の永続的性格はここに存している。

永続革命論の第三の側面を成しているところの社会主義革命の国際性は、現在の経済状態と人類の社会的構造に基いている。国際主義は抽象的原理ではなくて、世界経済の性質、生産力の世界的発展、及び階級闘争の世界的規模の理論的並びに政治的反映である。社会主義革命は民族的基盤に於て始まる。しかしそれはこの基盤の上では完成されえない。民族的枠内に於るプロレタリアート革命の維持は、例えソ連邦の経験が示すように長く続くものであっても、それは一時的な状態にすぎない。孤立したプロレタリア独裁にあっては、内部的及び対外的諸矛盾は増大する成功とともに、不可避的に成長してゆくのである。これから抜け出す道はただ一つ、先進諸国のプロレタリアートの勝利のみである。この立場から見れば、国民的革命は自己完結的な全体ではない。それはただ国際的鎖の一環たるにすぎない。あらゆる一時的な起伏にもかかわらず、国際革命は永続的過程を表わすのである」と、自らの思想のガイストを説明している。

ここで第一の点に関しては、戦術のところで見ることにする。又、

第二の点は、トロツキーがプロレタリア革命の目的、すなわち被搾者階級の経済的解放ということを理解しえず、いわば「人類社会」的に革命の内容を説明し、〝永久革命〟ともいうべきことを述べているにすぎない。従ってここでの課題は第三の点を検討することである。

まずトロツキーの言葉に従って整理しよう。トロツキーは、「永続革命の理論には二つの根本的命題がある。第一は、ロシアの歴史的後進性にもかかわらず、先進諸国のプロレタリアートが権力を握りうる前に、ロシアのプロレタリアートは、革命によってそれを手中に握ることができる、ということである。

第二は、資本主義的敵の世界によって包囲された後進国に於るプロレタリア独裁に生ずる諸矛盾からぬけでる道は、世界革命の領域に見出しうる、ということである。

第一の命題は、不均等発展の法則の正しい理解に基いており、第二の命題は、資本主義諸国間に於る経済的及び政治的紐帯の不可分性の正しい理解に依存している」(『レーニン死後の第三インター』)と言っている。

ここで我々は、「マルクス主義は諸国民経済の総計としてではなく、一つの強大な独立した現実としての世界経済―それは国際的分業と世界市場によって創出され、今日に於ては国内市場を支配している―から出発する」(『永続革命論』アメリカ版への序文)というように、トロツキーは世界経済を「国際的分業と世界市場」、すなわち、先に見た流通主義とでもいうべき観点からのみ把えていることを念頭におく必要がある。

さて、初めに前者、すなわちトロツキーの「不均等発展の法則」の説明を聞こう。トロツキーは、アハーリン、スターリンのそれに反対して、まず第一に、人類の歴史全体が不均等発展の法則によって支配されているといった方が、もっと正しかったであろう。資本主義は、それぞれ深刻な矛盾を内包した、異った発展段階にある人離の種種の部分を見出す。到達した水準の極度の多様性と種々の時期に於る人類の諸部分の発展度の非常な不均等が資本主義の出発点となる。資本主義はそれ自身の手段や方法を用いて、受け継いだ不均等性を打破し改変して徐々にこれを克服していく。資本主義は、その先行の経済体制とは著しく違って、先天的にそして常に、経済的拡大、新領域への侵透、経済的差異の克服、それに自給自足的な地方的及び国民的経済の金融的相互体制への転化を目指している。このようにして資本主義は、相互親交をもたらし、最も進んだ国と最も後れた国の経済的及び文化的水準を均等化する。……

諸国を経済的に、より密接に結びつけ、その発展段階を水平化しながら、資本主義は、その反面、それ独自の方法、すなわち、常に自己の仕事を切り崩し、国々を互いに対立させ、世界経済のある部分を発展させながら、一方では他の部分の発展を投げ戻し、阻害して、産業の各分野を互いに対立せしめるという、無政府的方法をもって作用するのである。この二つの根本的傾向は共に資本主義の性格から生ずるものであるが、この相互関係によってのみ、我々は歴史過程の生ける構造を説明することができる。

帝国主義は、それがもつ普遍性、浸透性、機動性、それに帝国主義の推進力としての金融資本編成の非常なスピードとのおかげで、これら二つの傾向に活力を与えている。帝国主義は、個々の民族的、大陸的単位を、最も緊密にして、活力にみちた相互依存関係に持ち込み、

それぞれの経済的方法・社会形態・発展水準をより同一化して、これら個々の単位を比類もなく急速かつ強力に単一の全体に結びあわせる。同時に、帝国主義は、自己が達成した世界経済の統一と水平化を先行のいかなる時代にも見られなかったほど乱暴に激しく覆してしまうような、敵対的方法、虎の跳躍、後進国や諸地域への侵入によって、この『目的』に達するのである」(『レーニン死後の第三インター』)、と、それを説明する。

だが第一に、これはマルクスの分業の把握と無縁である。トロツキーは、「資本主義は水平化をもたらす」という。しかし、「なるほど、種々の生産部面はたえず均衡を保とうとしている、……だが、均衡を保とうとする種々ある生産部面のこの絶えざる傾向は、この均衡の絶えざる止揚に抗する反動としてのみ作用する」(『資本論』)。このトロツキーの「水平化」という概念自体、先験的な観念であり、空想である。

第二に、トロツキーの「水平化」と「無政府的方法」との二側面の関係によって歴史過程を説明しうるというのは、史的唯物論の修正である。マルクスやレーニンは、不均等発展という場合、生産力と資本蓄積をその内容としていた。しかるにトロツキーは、一切の相違を「不均等発展」で説明せんとし、しかも「人類の歴史全体」にあてはめようとする。そもそもトロツキーの「不均等発展」の概念は、「水平化」の対概念以上でなく、観念的なそれでしかない。従って、トロツキーの把握は、「資本制生産様式の社会では社会的分業の無政府性とマニュファクチュア的分業の専制状態とが相互に制約しあっているとすれば、従来の社会諸形態……はこれに反し、一方では、計画的で権威的な社会的労働組織の姿を示し、他方では、作業場内分業を全く排除するか、さもなければ、それをただ小規模でのみ、又は散在的かつ偶然的にのみ、発展させるのである」(『資本論』)という把握とは似ても似つかぬものである。

だがトロツキーは、更にこの「不均等発展」論を「発展」させる。トロツキーは、「資本主義は人類発展の普遍性と恒久性とを準備し、ある意味ではそれを実現する。これによって、諸民族が発展上の諸形態を反覆するということはなくなるのである。後進国は先進諸国の跡を追わざるをえないが、しかし事物を同一順序に従ってうけとりはじめない。歴史的立ちおくれの特権は……一連の中間的段階全体を飛びこえ、すでに用意されているものは全て特定の日付に先んじて採用することを許し、それどころか、むしろそうすることを余儀なくさせる。……歴史的後進諸民族の発展は、必然的に歴史的過程の諸段階の特殊な結合へと導く。それらの発展は、全体としては無計画的な、錯雑した、複合的性格を帯びる」(『ロシア革命史』)と述べたあと、「歴史的法則は、ペダンチックな図式主義とは完全に違っている。歴史的過程の最も普遍的法則である不均等発展は、後進国の運命の中に最も先鋭に、かつ最も複雑な形態となって現われる。後進諸国の未開文化は、外部的必要の鞭の下に、飛躍することを余儀なくされる。こうして不均等性という普遍的法則から、いま一つの法則が生まれるのである。我々は他に適切な名称がない故、それを複合的発展の法則とよんでよかろう。つまり、発展の諸段階の集合、個々の段階の結合、古い形態とより現代的な形態とのアマルガムのことである」(同)と云うのである。

そして、「複合的発展の法則は、ロシア工業の歴史と性格のうちに、最も明白に表現されている」(同)として、「農民の土地耕作は、革

命に至るまで、依然として一七世紀の水準にとどまっていたと同時に、ロシア工業の技術と資本的機構は、先進国の水準にあり、ある点では、これらの先進諸国を追いぬいてさえいたのである」（同）ということを「論証」し、後進国ロシアのプロレタリアートが最初に権力を握りえた理由にするのだ。

まず、「複合的発展の法則」なるものが（社会現象一般の「法則」らしいが、ここでは経済の領域に於て見る）、経済過程の唯物論的、科学的分析から導き出されたものではなく、皮相な現象から造られた、「概念のスコラ学」に他ならないのである。実際トロツキーにあっては、何でもこれで説明されてしまうのである。

従ってレーニンが、帝国主義、従属国、植民地などの関係を、独占、寄生性等々ということに於て明らかにしたのとは全く異なって、極めて平板にかつ観念的に把握されていることである（ここから民族自決権についての誤り等が生まれる）。

だが、何よりも決定的な誤りは、この「複合的発展の法則」を革命の発展法則としたことである。例えばレーニンは、トロツキーの云う「複合的性格」をは、『ロシアに於る資本主義の発展』に於て、そのウクラードごとに分析し、つまり、「ロシアの社会的経済構造と、従って又階級構成」とを分析して、樹立すべき権力と戦術を定めた。だがトロツキーの方法は、これとは全く無縁である。一切が頭の中で作成されるのである（これは後に再度見る）。

さて、次に諸君、すなわち「資本主義諸国間に於る経済的及び政治的紐帯の不可分性」を検討するのだが、実のところこれは先の「水平化」と同様に、トロツキーのドグマにすぎないのである。結局のところ、「国際分業」の存在故、一国社会主義は不可能であるということ以上ではない。だが、「社会主義の任務は、世界的分業から出発して財貨と業務との国際的交換を最高度に発展させることである」（同）という把握からして、その　社会主義」の貧困なことは推して測れるのであるが。

もう一つトロツキーには、「生産力と国家の矛盾」論からする一国社会主義不可能論があるのだが、それは後に見る。とまれ、先に見たようなトロツキーの経済学の誤りは、極限まで拡大され、観念的、主観主義的革命論を形成しているのである。否トロツキーは、経済学に於て無知であるが故に壮大な体系を創りあげることができたと云うべきなのかもしれないが。

とまれ、このようなトロツキーの理論からしては、『スタ・ブハ綱領』のアンチ・テーゼ以上ではないことは理解しうるだろう。事実、『レーニン死後の第三インター』（これは、コミンテルン六回大会の綱領草案批判である）では、その綱領の原則的部分に於る批判は、一国社会主義に対する「国際革命」の公式主義的対置だけである。すなわち、階級支配の内実に於ても、「生産力と国家の衝突」に於ても、革命の発展法則に於ても、承認した上での、「不均等発展の法則」から誤った結論を導き出したというこの一点だけなのである（なお、米帝の評価に関しても述べているが、これは後述）。だからして、以下で見る戦術上、組織上の思想に於ても我々は、トロツキーが完全にスターリンと同一地平であり、ただその反対派にすぎないことを見ることになる。

第二、戦術について

まずトロツキーの戦術観を見よう。彼は、「戦術という概念によって、ある一つの当面の任務あるいは階級闘争の一部門に役立つ手段の体系が理解される。これと反対に、革命的戦略は、それらの結合、首尾一貫性及び成長とによってプロレタリアートを権力の獲得へと導かねばならない諸行動の結合した体系を包括している」（『レーニン死後の第三インター』）としている。つまり、先に見たような革命の発展法則から、固定的に「戦略」なる一つの図式をひねり出し、戦術は個々の戦闘の力関係から定められる。事実トロツキー本人が、「永続革命論」を「世界革命の発展に関するシェーマ」と言っている。だからしてトロツキーにとってみれば、資本主義的生産様式の分析は、何ら科学的である必要もなく、だれでも大まかには気づいていることを整理するのみでこと足りるのである。ともかく、このトロツキーの戦術観は、スターリンのそれと全く同一の地平に他ならない（『レーニン主義の基礎』及び『マルクス・レーニン主義通信』十号参照）。

ここから観念的な「戦略論争」なるものが空中戦に終らざるをえず、戦術は政治力学の地平から主観主義を生み出さざるをえないのである。実際、『スタ・ブハ綱領』の有名な資本主義の発展からする三グループの機械的分類からする「革命の型」＝戦略に対しては、その諸国の具体的な階級関係の分析から戦術を定めていないことを批判するのではなく、観念的な発展法則を規準にした機械的分類を承認した上で、「綱領草案は、現在の生産力と国民的境界の矛盾という根本的テーゼ、すなわち、逆の理由でではあるが、一国に於る社会主義の建設にとって高度の生産力は低生産力より小さい障害だということは決してないということ、すなわち、後者は基礎となるには不十分であり、一方前者にとっては基礎の方が不十分になるだろう、ということを忘れている。まさに最も必要で最も大切なところで不均等発展の法則を忘れているのである」（同）と、その生産力主義はおくとしても、一国社会主義は不可能であるというところに論点をすべらしているのである。又、中国革命の総括にしても、ロシア革命の過程を法則化してそれでなで切っているにすぎない。

次に、綱領の所で除いた「永続革命論」の第一の側面、最早、伝統化したレーニンとトロツキーの対立を含む「民主主義革命から社会主義革命への移行」を扱おう。

トロツキーは、「永続革命の概念は、一九世紀半ばの偉大な共産主義者、マルクスとその支持者が、民主主義イデオロギーに反対して、うちたてたものである」（『永続革命論』）とマルクスの継承を謳っているが、マルクスの永続革命は、「しかし、彼ら（労働者）自身は、彼らの階級的利益を自ら明らかに知り、できるだけはやく彼らの独自的な党派的立場をとり、民主主義的小ブルジョアの偽善的言辞にまよわされて一瞬たりともプロレタリアートの党の独立の組織をわすれないことによって、彼らの最後的勝利のために、全力をあげなければならない。彼らのときの声は、〃永続革命〃ということでなければならない」（『中央委員会への回状』）という一言からも分かるように、自らの歴史的任務を自覚したプロレタリアートと党が革命を永続させるべき任務を明らかにしたものであった。この観点はレーニンにこそ継承されている（『二つの戦術』を見よ！）。

しかるにトロツキーのそれは、「一般的な過程の記述」であって、それ以上ではない。トロツキーは、一九〇五年革命時のボリシエビキとメンシエビキの対立についてこう語っている、「メンシエビキが『我々の革命はブルジョア革命である』という抽象論から出発して、プ

ロレタリアートの全戦術を自由主義的ブルジョアジーの行動―彼らによる国家権力の獲得を含めて―に適合させるという考え方にたどりつくとすれば、ボルシエビキは『社会主義的ではなく民主主義的な独裁』という同様に粉飾のない抽象論から出発して、国家権力を掌握せるプロレタリアートのブルジョア民主主義への自己限定という考え方にたどりつく。

この問題についての両者の相異は確かに重要である。メンシエビズムの反革命的な面は今日すでに完全に現われているが、ボリシエビズムの反革命的特徴は革命が勝利した時に於てのみ大いなる危険となる恐れがあるということである」（一九〇九年、第二期トロツキー選集3）、「著者は、ボルシエビキとメンシエビキの両者とも、ブルジョア革命の見地から出発しているのであるから、彼らの間に横たわる相異は、分裂を正当化しうるほど深刻なものではない、と考えていた。同時に著者は、諸事件の一層の進展が、一方では、ロシアのブルジョア民主主義の弱さと無意味さを明らかに証明するであろうし、他方では、プロレタリアートを民主主義的綱領に限定しておくのは客観的に不可能であることを立証するであろうと希望していた。そして、私は、このことが両派の相異の基盤をとり除いてしまうであろうと考えたのであった」（『結果と展望』モスクワ版序文、一九一九年）、「私の調停主義は一種の社会革命的遠命論からきていたのである。私は階級闘争の必然的な力は両分派をして同じ革命路線をとることを余儀なくするものだと信じていた」（『永続革命論』）、等々。

トロツキーの調停主義については後で見るとして、ここではトロツキーが考えていたボリシエビキとメンシエビキが到達する路線とは、「革命は、その最初の任務についてはブルジョア革命として始ったとしても、やがてまもなく強力な階級闘争を呼びおこし、被抑圧大衆の先頭に立つことのできる唯一の階級、すなわちプロレタリアートの手に権力が移行する場合にのみ、最終的な勝利を得ることができる」（『結果と展望』モスクワ版序文）という「永続革命論」であったことを確認しておく必要がある。

さてその内容に入る。「我々の革命の客観的な目的はブルジョア的なものであり、従ってその不可避の結果もブルジョア的だと主張することによって、革命の全ての問題の範囲を限定してしまうことは可能であるが、そうすれば、このブルジョア革命に於る主演俳優はプロレタリアートであり、彼らは革命の全過程によって権力の把握へと向って突き進まざるをえなくなる、という事実に対して眼をつぶることになる」（『結果と展望』）、「ブルジョア革命という一般社会学的な用語によっては、所与のブルジョア革命のメカニズムが提起する種々の政治的、戦術的諸問題や諸矛盾、困難等々を解決することは決してできない」（同）、「その直接的な客観的な任務はやはりブルジョア的なものである二〇世紀初めの革命に於ては、プロレタリアートの政治的支配が、不可避の、あるいは少なくともがい然的な、至近の展望として立ち現われている」（同）、「もちろん、このような政府をプロレタリアートと農民の独裁とか、プロレタリアートと農民とインテリゲンツイアの独裁とか、あるいは更に、労働者階級と小ブルジョアの連立政権、等々と呼ぶことはできようが、しかし、依然として次の問題は残る。すなわち、だれが政府そのものの内部でヘゲモニーを掌握し、それを通して国のヘゲモニーを握っているのか？ そして、我我が労働者政府について語る場合には、ヘゲモニーは労働者階級に属

すべきだと答えるのである」（同）、「上述したところから、我々が『プロレタリアと農民の独裁』という考えをどのようなものとみなしているかは明らかであろう。それが、原則的に容認しうるものであるのか否か、あるいは、そのような政治的協同形態を『望むのか望まないのか』等々といったことは、実際上問題にならない。我我は、それを、ただ非現実的なものだと考えているのである――少なくとも直接的な、そのままの意味では」（同）。

これがその概略である。読者諸氏は、これらのテーゼが「複合的発展の法則」（この用語自体は使われていないが）から導かれていることを念頭におかれたし。

つまりトロツキーは、ロシアの当面の革命が民主主義革命であることを承認しつつも、それはプロレタリアートの独裁によってのみ勝利しうるとしたのである。これは『永続革命論』ではよりはっきりと、「民主主義革命の勝利が、農民との同盟に基礎をおき、民主主義革命の諸問題を初めて解決するところのプロレタリア独裁を通じてのみ考えうる」と述べられている。これこそ、民主主義的変革と社会主義的変革、民主主義的独裁と社会主義的独裁の混同以外の何ものでもない。更にトロツキーは、マルクス、及びレーニンの永続革命の見地、すなわち、プロレタリアートの革命党の独自的な組織化と、民主主義革命の中においてプロレタリアートの階級的利害を貫徹することによって革命の永続化を目ざすスローガンこそが「労働者と農民の革命的民主主義的独裁」であったことが全く理解しえなかった。これは、レーニンのように、ツアーリ専制に対する諸階級の関係を分析することから、スローガン、戦術を定めたのとは全く違って、観念的な図式から革命を説明しようとしたことの不可避的な帰結である。

かくして、かのトロツキー賛美主義者対馬忠行ですら、「トロツキーの予想（！）に反し、ツアーリズムの打倒だけは、プロレタリア独裁を待つことなく遂行された。トロツキーはこの事実には余りふれたがらないように思われる」と述べざるをえないのである。

トロツキーのこのような考えからは、当然農民に対する戦術においても誤った結論が出ざるをえない。「実際、そのような連合（労働者と農民の独裁）は、現存するブルジョア政党のひとつが農民に対して影響力をもっているか、あるいは、農民が自らの強力な独自の政党をつくり出しているか、そのどちらかを前提としている。しかし、このどちらも不可能であるということを我々は示してきたのである」（『結果と展望』）、とトロツキーは語る。

レーニンはこれに対して、「……諸階級の『連合』は、あれこれの強力な政党の存在をも、又一般に党派性をも、前提とするものでは決してない。そういうことは、階級の問題と政党の問題とを混同するものである。〃前述した諸階級の『連合』は、現存のブルジョア政党の一つが農民を把握することも、農民が強力な独自の政党を創設することも、決して前提としてはいない！ このことは理論的には、第一に、農民は特に党に組織されにくいということ、第二に、農民政党の創設は、ブルジョア革命では特に困難で、長期間にわたる過程であるため、『強力な独自の』政党が現われることのできるのは漸く革命の終り頃になってからだということ、からして明らかである。ロシア革命の経験からしてみても、農民の『どのような強力な独自の政党』がなくても、プロレタリアートと農民の『連合』が様々な形態で、数十回も数百回も実現されたことは明らかである」（『わが革命におけるプロレ

タリアートの闘争目標』）と批判した。

又、レーニンは、『革命の二つの方向について』で、プレハノフを「マルクス主義を俗流観念論とすりかえ、問題を諸階級の相互関係にではなく〃戦略概念〃に帰着させたと批判し（これはトロツキーにも完全にあてはまる）、「ロシアで民主主義革命が勝利する完全な可能性の客観的基礎」を述べ、「きたるべき革命における諸階級の相互関係を鮮明にすることは、革命党の主要な任務である」ことを明らかにした後で、「トロツキーは、……この任務をまちがった仕方で解決している。……トロツキーの独創的な理論は、ボリシエビキからは、プロレタリアートの断乎たる革命的闘争への呼びかけと、プロレタリアートによる政治権力の獲得への呼びかけとをとり、メンシエビキからは、農民の役割の『否定』をとってきている。〃彼がいうには、農民は階層的にわかれ、分化した。農民の革命的役割の可能性は、ますます減退した。ロシアでは『国民』革命はありえない。『我々は、帝国主義の時代に生きている』。ところが、『帝国主義は、ブルジョア的国民を旧制度に対置しないで、プロレタリアートをブルジョア的国民に対置させる』と。これこそ、帝国主義という『言葉をもてあそぶ』こっけいな一例である！　ロシアですでにプロレタリアートが『ブルジョア的国民』に対立しているとすれば、ロシアは直接に社会主義革命に当面していることになる!!……トロツキーの混乱が、どういう限度に達しているかは、彼の次の文句からわかる。プロレタリアートは、『非プロレタリア（！）人民大衆』をも断乎としてひきつける!!と。トロツキーは、プロレタリアートが地主の土地を没収し、君主制を打倒するために、農村の非プロレタリア大衆をひきつけるなら、これこそ、ロシアにおける『国民的ブルジョア革命』の完成であり、これこそ、プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁であるということを考えなかったのだ！」と鋭く批判している（トロツキーは、これについて「レーニンは論争の矛先をただ私に向けたように見せかけているだけである」って、実はブハーリン等を批判しているのだと語っている。楽天主義というか、図々しいというか）。

実際、トロツキーにあっては「帝国主義」のみならず、プロレタリアート自体が、抽象的な観念として把えられているのみであって、レーニンが具体的にプロレタリアートの状態を把握していたのとは大きく異るのである。そこから主観主義的戦術は不可避である。

これまでトロツキーの理論を見てきた読者諸氏は、かの「過渡的綱領」が本田君のように一般的に正しい戦術を表わしたものではなく、「永続革命論」と密接に結びついていることが知れるであろう。トロツキーの言葉でいえば、「それ（プロレタリアート）は永続革命の戦略を採用しなければならない。すなわちそれは、社会民主党の最大限綱領と最小限綱領との間の境界を打破し」（『結果と展望』モスクワ版序文）なければならないということである。そして先に見たように民主主義的変革と社会主義的変革を混同し、前者の延長上に後者をおくトロツキーは、「その直接の実際的成功はどうであろうと、この闘争によって、労働者は最も良く資本主義的奴隷制を清算してしまう必要を理解するようになる」（『過渡的綱領』）というように、簡単にいえば、「過渡的要求」を掲げてとことんやれば階級闘争は前進するということを無規準に語る急進民主主義であり、不断に「左翼」冒険主義を生み出すのである。これを〃過渡的綱領主義〃というのだ。

又、先に見たように、「階級闘争＝剰余生産物を巡る闘争」としたトロツキーは、「二つの基本的な不幸、つまり失業と高物価は、一般化された闘争のスローガンと手段を要求する」（『過渡的綱領』）として、「賃金と時間のスライデイングスケール」を基本スローガンにする。あげくのはては、「実際にはそれは社会主義社会に於る労働の体制である」（『過渡的綱領についての討論』）とまで云うのだ。何たる混乱！　一切が誤りである。経済主義であり、空想的社会主義、これがその見本である。

更に、先に見たように、「複合的発展の法則」をもって世界経済をのっぺらぼうに把えたトロツキーは、民族自決権に対して、又しても「帝国主義」をもてあそび否定し、更に、国家についての民主主義的見地と結びついて、「帝国主義戦争に於る自国政府の敗北」というスローガンに対して、「勝利でもなく、敗北でもない」というスローガンを掲げたのである。レーニンはこれに対して、「ロシアの敗北を希望することは、彼にとっては、ドイツの勝利を希望することを意味するように見える」（『帝国主義戦争に於る自国政府の敗北について』）として、「政府及びブルジョアジーの戦争の見地に立っていること」（同）を指摘し、「『勝利でもなく、敗北でもない』というスローガンを認める者が、階級闘争に味方し、『国内平和の破棄』に味方するのは、偽善でしかありえない。そういう人は、実際には、自主的なプロレタリア的政策を拒否し、全ての交戦国のプロレタリアートを完全にブルジョア的な任務に、すなわち、当該の帝国主義政府を敗北から守るという任務に、従属させているのである。云葉の上でなしに、本当に『国内平和』を破棄し、階級闘争を承認する唯一の政策は、自国政府と自国のブルジョアジーとを打倒するために、プロレタリアートが政府とブルジョアジーの困難を利用する政策である。ところが、自国政府の敗北を望まないでは、このような敗北を促進しないでは、このことを達成することはできないし、このことを志向することはできないのである」（同）と批判している。トロツキーの「敗北」と「内乱」のスローガン反対の立場は、『過渡的綱領』にも貫かれているのだ。

最後に、三〇年代に於るトロツキーの戦術を簡単に見ておこう。

知っての通り、トロツキーは、コミンテルンの「社会ファシズム」論に対しては、「社共統一戦線」、「人民戦線」に対しては「革命的統一戦線」を対置した。だがコミンテルンの「社会ファシズム」論は、第十回執行委員会（二九年七月）に於て、ブハーリンを「右翼的偏向」として排除していくのと同時に、資本主義の「相対的安定期」が終り、「安定の要素より崩壊の要素が優っているという戦後資本主義の第三期」が到来したという「第三期」論を基礎として出された。

それは、「第三期の特徴の一つは、資本主義の矛盾の増大ということに関連して改良主義の地盤が極度にまで狭められた点にある」とし「大衆が左翼化しつつある」ということから、「統一戦線の古い戦術は終りになった」として、「資本主義の支柱をなす社会民主主義」を打倒すれば資本主義は崩壊するという内容である。

これは二九年アメリカから広がる恐慌勃発直前の世界的危機の深まりと、資本の攻勢の激化に対する労働者の世界的な反撃ということを背景としてだされた路線である。それは、世界恐慌がアメリカから、まさに全ヨーロッパをおおおうとしていた時に開かれた一一回執行委員会（三一年三－四月）に於ても、「諸共産党が、労働者にとって恐慌の瞬間に於て特に切実となるその日常要求に基いて大衆を動員しえなかったことに」を問題にしつつも、それを各国共産党の欠陥にしただ

けで、この路線を踏襲するのである。

単に危機が到来したことを述べ、大衆が、「攻勢」化しているということから導きだされた一元的戦術は、トロッキー等が、恐慌の到来をもって「守勢」としたことの反作用として、一層「攻勢」を強調し、いよいよ主観主義的情勢分析をもって単純化していったのであった。しかしながらそれは、「ファシズム」の全面勝利によって総破産をとげ、三五年七回大会をもって、民主主義防衛の「人民戦線」戦術へと転換し、更に、「反ヒットラー連合」の提唱から「ソ連邦防衛」を第一義に掲げ、プロレタリアートの階級的利益を放棄し、四三年コミンテルンは解散されたのである。

まさしく問われていたのは、「革命的情勢が存在することを大衆の前に明らかにし、それの広さと深さを説明し、プロレタリアートの革命的自覚と革命的決意をよびさまし、プロレタリアートを援けて革命的行動に移らせ、この方向で活動するために革命的情勢に応じた組織を創り出すという義務」(『第二インターの崩壊』)であった。

だがトロッキーは、このどれをも成しえなかったのである。とりわけ重要であった、革命的情勢の広さと深さの説明に於て、世界恐慌が文字通り、それまでの国際的な機構、体制を瓦壊せしめたことによって不可避となる新たな体制確立の志向を具体的に暴露すること、そこから戦術を定めることをトロッキーは、放棄した。

例えば、コミンテルン第一一回執行委員会に於ては、「我々の革命的政策は早くよりドイツで破廉恥なベルサイユ平和に対する闘争の問題に於て、真に帝国主義に対し国民的解放のために闘った唯一の政策、唯一の力であった」というテールマンの報告からも、ドイツに於る打倒の目標をベルサイユ体制支持勢力に定めていた。ナチスは当時、ベルサイユ体制に反対していたが故に、米、英、仏帝の下で復活していた独金融資本家によって政府を握ることを承認されえなかった。そのような中にあって、「社会ファシズム」論は、社会民主党が組閣し、ベルサイユ体制の支柱となっていたこと、及びプロレタリアートへの弾圧を行うということに対する闘争として侵透していったのである。

だが、世界恐慌はベルサイユ体制の基礎そのものを崩壊せしめた。これは不可避に支配層の流動化を引きおこす。これらのことを具体的に暴露し、煽動することが決定的に必要だったのである。これらのことは所謂「ファシズム」に関しても云えることである。その形成過程及び政治的性格を具体的に分析することから戦術を明らかにしなければならなかった。だがこれらのことについて、トロッキーは、単に危機を叫び(人類の危機だ!)、革命の条件の形成を一般的に唱えるだけだったのであり、それはほとんどコミンテルンの枠をでていず、戦術の単純化という点に於ても同一であった。

更に「革命的情勢に応じた組織」の創出、「古い党の頭をとびこえることによって、それを破壊することによって」それをなしとげることをトロッキーは放棄した。トロッキーは、ファシズムが勝利した後で、やっと三八年、第四インターを結成するのである。

ついでにつけ加えておけば、コミンテルンの統一戦線の「戦略論」化と同時に、トロッキーも又、それを遂行していく。「統一戦線の最高の形態」=ソビエトから、ソビエトによる「二重権力」を通じてのプルジョアジーとプロレタリアートの決戦という図式を描き出すのである(『過渡的綱領』)。

第三、組織について。

この点において、トロッキーは自らも認めている通り「調停主義」であり、徹底した日和見主義である。トロッキーは、観念的な「プロレタリアートの決起行動の一致団結、階級闘争の一致団結」を「原則」とし、自らの規準としている(第二期トロッキー選集3)。そこから、「思想闘争を党の政治行動の一致団結に従属させる」といって、分派闘争に個人として対応し、両者の妥協を叫ぶのである。ロシア社会民主党第二回大会での「規約一条」をめぐる論争に関するレーニンのトロッキー批判は卓抜である、「マルトフの定式を基礎づけようと試みる場合に必ず姿を現わす日和見主義的な議論の一つは、特に同志トロツキーの次のような文句である。//『日和見主義は、規約のあれこれの条項よりも、もっと複雑な原因によってつくりだされる(あるいは、もっと深い原因によって規定される)。――それは、ブルジョア民主主義とプロレタリアートとの相対的な発展水準によってひきおこされる。』――かんじんなことは、規約のいろいろの条項が日和見主義をつくりだすかもしれない、という点にあるのではなく、それらの条項の助けをかりて、日和見主義に対応する多少とも鋭い武器を鍛えあげる点にある。日和見主義の原因が深ければ深いほど、この武器は、一層鋭くなければならない。だから、日和見主義に門戸を開いている定式を、日和見主義には『深い原因』があるということで正当化することは、きっすいの追随主義である」(『一歩前進二歩後退』)。

トロツキーのインテリゲンチャ的個人主義は、左翼反対派が敗北して以降も変わらなかった。それは中央集権主義の思想と真正面から対立するものである。『過渡的綱領』においても、官僚主義に対して民主主義を対置するという反対派的態度が貫かれており、スターリンの組織上の思想に対する批判としてはなされていず、「指導部の裏切り」と「歴史の法則は、官僚機構よりも強力である」という「社会革命的運命論」=「階級闘争の必然的な力」が再度もちだされているにとどまる。

最後に、ソ連の国内経済政策について一言だけ述べておく。トロツキーは、レーニンが「我々は貧乏人なのだ。飢えかかっている極貧者なのだ。我々にとっては総括的な計画は『官僚的ユートピア』だよ」(レーニン全集35)と語り、現実的な計画として、「社会主義=ソビエト+電化」を説いていた時期においても、「社会主義的原始蓄積」という「創造的」理論から、又しても革命の発展法則へと昇天し、そこから政策をひねりだそうとしていたのである。ここではこれだけにとどめておこう。

さて以上、トロツキズムの概略を見てきた。本田君がもちあげた「過渡的綱領」には、この一切が凝縮されて収まっている。だからして我々は、「過渡的綱領」を本田君の言うごとくには正当化しえないのである。もっとも、トロツキーはマルクス主義を「方法」や「法則」に解消し去り、戦術を主観主義的に定めるが故に、本田君は共感を覚えるのだろうが。

(三)第四の点について

本田君はまず一二・一八路線の総括から筆を進めている。だが、一

二・一八の総括については次章で詳しく見ることにしよう。ただここでは、次のことだけは知っていなければ先に進むことができない。

「一二・一八路線に於る『綱領問題』の措定の方法は、ボルシエビキ綱領の改訂論争に於る『ブハーリン主義』的誤りとして、はっきり把握され、レーニン主義へと清算、揚棄されねばならなかった」（P86）ということがそれである。そして本田君は、「ここでは、一二・一八路線から全国委の今日まで、綱領問題に於るレーニンの見地を措定する時、主要には、ボルシエビキ綱領の改訂を巡るブハーリンに対する批判、及びトロッキーの過渡的綱領主義……批判の二つの批判を、その基礎にすえているわけであるが、残る課題としてのブハーリン批判の見地を簡単に再総括することにする」（P86－87）として、トロッキーの評価を終えた今、今度はブハーリンに向うのである。ただ、ここではブハーリン主義というのが、先に引用したように「綱領問題の方法」に於て言われていることを読者諸氏は念頭においておかねばならない。

まず本田君は、「この『改訂論争』はこのような歴史的背景の中で全面的に研究、総括されなければならないのであるが、それは別の機会に委ね、ここでは簡単に、ブハーリン批判の要点についてのみ整理することに留めておくことにする」（P88）としたが、これは賢明であった。何となれば、このことによって、レーニンの引用のみでことが足りる土俵ができたからである。続いて本田君はテーマを設定する、すなわち、レーニンのブハーリン批判を「①最小限綱領の削除と過渡的方策の提出について、②綱領の古い理論的部分を削除することについて、③ブハーリンの修正案『展開された社会主義社会の特徴づけ』の提出について、④党綱領の改正とインターナショナルの為の単一の綱領の問題について、⑤民族問題について」（P90）と定める。これにそって見ていこう。

①の点、略

②の点、略

③の点、略

④の点、ここではちょっと話が変わる。少々本田君の主張が見うけられるからである。まず、レーニンが、世界党の綱領をボルシエビキの綱領に対置させるのに反対したことに言及して、「ボルシエビキ綱領の改訂問題と、第三インターナショナルの綱領作成の問題との関係」（P97）を問題にしながら、「ボルシエビキの綱領改訂の事業を、第三インターナショナルの綱領の中に溶し込むことに対して反対して」（同）いると述べているだけである。本田君も引用している「第三インターナショナル共通の、単一の綱領を作成したいという願いを表明し、その為の若干の措置をとるということ」というレーニンの内容を一言も述べていないのである。そのようなことは本田君の眼中にないのだ。それは次の段になって一層鮮明になる。「『世界プロ独－統一共和制』を世界党建設の分岐点にしてゆくなどという、全くもってアプリオリな方法も、現下の国際階級闘争の現実の成熟度合、その発展の方向性、その困難性の把握を全くもって消し去ってしまう独善的な方法でしかないであろう」（P98）、「スタ・ブハ綱領に一般的に別の『世界綱領』を対置しようとする一二・一八路線の方法は、全く三文の値うちもない」（P99）と言い切るのである。なるほど、「方法論主義」というのは便利なものである。この方法はダメということで全てを否定することができるのだから。だが、方法は内容と無関係ではない。「世界プロ独－統一共和制」というのは、国際共産主義運動

の一定の総括から導き出された内容であった。この点について一言も述べていないのは致命的である。中ソ論争等の総括などは、全く不要だと本田君はおっしゃるのか？

しかしながら、最大の注目すべき点は、「四月テーゼ以降、永続革命論的見地が強化された」（P九六）という件りである。ここでの「永続革命」がマルクスのそれであるなどという言いわけは通用しない。けだし、マルクスの永続革命の見地は、レーニンに継承されているというのがマルクス・レーニン主義者の常識だからである。本田君は、トロツキストと同じように、レーニンは以前「二段階戦略」であったが、四月テーゼ以降トロツキーの立場に接近したということを述べているのである。かくして、レーニン主義者トロツキーのみならず、トロツキー主義者レーニンができあがるのである。

⑤の点。略

以上、要するに、この点においても本田君の主張は評論に終ってしまった。

（4）第五の点について

これはしたり！「致命的誤謬」などというので、当然本田君は第五の点について述べるのかと思い、見出しを書いてしまったが、そうではないのである。ここで本田君からとびだすのは「八木沢イズム」を初めとする「北原イズム」等の悪口に他ならない。曰く、「八木沢イズムは、根本的には、自然発生性への拝跪の体系であり、山川イズムに酷似した社民＝労農派的イデオロギー」（P一〇二）、「伝統的な関西ブントの社民的体質、大衆運動主義そのもの」（P一〇三）等々。

しかも、彼特有の第三者的立場から、一二・一八ブントの二つの「方向」なるものを語る。「第一の方向は、創出するべき党を国際非合法党として措定し、共産同をその端初的組織と規定して、『階級対立の非和解性、内戦の根拠』論をもって、遊撃戦＝世界革命戦争を開始せんとする立場であり、徹底した召還主義、経済主義の立場であった。第二の方向は……『火花3号』で典型的に主張されているように……『現実の階級闘争』とどのように指導的に結合するのかという事を直接のバネにしながらコスモポリタニズムを排し、『日本革命の戦略問題』として明らかにしてゆこうとする立場であった。従って……不可避の分裂であった」（P八六）として、「八木沢イズム」を全国委の母胎としている。だが他方、「決して、全国委＝八木沢イズムではない。……だがまさに、『烽火』創刊号に見られる限界こそが、八木沢イズムの流入を許したのである」（P一〇五）と、全国委の誤りは「八木沢イズム」というインベーダーのせいにされる。何たる混乱！

そもそもありもしない幽霊のごときものをもち出すからこのようになるのだ。だがともかくも、このような内容から、全国委の止揚と「八木沢イズムの克服」が等置されるのである。

第二章「総括への序説」について

（1）「一二・一八路線の意義と全国委員会」

まず本田君は、「意義と限界」論文をとりあげて、「『一二・一八路線の思想的核心』を取り出すのではなく、一般的な『一二・一八路

線の概説』を語」（P一一五、本章も『マルクス主義』No.1）っていると斥ける。続いて、何と『仲台論文』をとりあげるのである。そして、「『一二・一八路線』として、対象化され、又反スタマルクス主義といい、宇野批判、黒寛批判として問われてきた問題は、何よりも『革命党の世界観』を巡る問題として存在したのだということを人々の忘れかけた記憶の中に鮮明に喚起したという点に於て唯一の意義（極めて大きな）を持っている」（P一一六）とおっしゃるのである。驚き、桃の木というものだ。七四年八・三の我々との分裂直後の『烽火』において、『仲台論文』を悪しざまに言ったことをもう忘れてしまったと見える。

とまれ本田君は、前座を終え核心にはいる。「一二・一八路線に於る最も基礎的かつ核心的な思想の一つは、マルクス主義と党を巡る問題に於て『マルクス主義の最も完成された姿は、綱領に体現された革命理論としての共産主義であり、その意味に於て、革命党の世界観というならば、マルクス主義の最も完成され、最も生命力のあるところの綱領に体現された共産主義である』……と宣言したことに体現されている思想である」（P一一七）と大上段にふりかぶった。そして、「哲学の党」から「綱領の党」への転換を克ち取ったことにその意義を求める。

更に、「戦後主体性論争総括」論文を復権し、フォイエルバッハ・テーゼの俗物的な解釈を披露する（次章参照）。

最後に「部落（上）論文」をとりあげ、それの「我々の主体性哲学批判は、諸々の小ブル哲学批判として、唯物弁証法を復権させた。……と同時に……唯一の正しい唯物論的な理論方法を復権させたのである」という件りにつっかかり、主体性哲学批判は、小ブル哲学を批判したのではなく哲学全てを批判したのだとか、「唯物弁証法」「理論の方法」を復権せしめたことが重大なのではないと結論づけるのである。

これらの中に見られる本田君の総括らしきものは、一二・一八ブントとは組織的に何の関係もなく、共産主義』等でのみその内容を覚えた者にして初めて書けるような評論である。「綱領の党」だと!?確か高原君が似たようなことを言っていたと記憶しているが、彼は理の当然として、ブントより中核派が正しかったとか、日共がどうとか述べていたように思う。日共は「綱領の党」ではないのかね？　大体において、綱領が成文化されているかどうかは別として、綱領的内容が全くない政治党派など凡そ存在しないのだ。重要なことは、それを総括することではないか！

（2）「『一二・一八路線の限界』と全国委員会」

ここは全く検討に値しない。冗漫な文章の羅列である。この男、「夜が長い」ことを言うのに「足引きの山鳥の尾のしだり尾の……」とやらないと気がすまないらしい。この部分がくだらないのは、一二・一八路線の総括をするのでもなく、全国委の総括をするのでもなく、ただダラダラと『烽火』創刊号の字面を追っているだけだからである。本田君は、総括というものは組織実践総体を対象にするものだということを知らないらしい。出された文章の字面を追いかけるだけだから、これは間違っていたなどと言って乗り移りを行う客観主義、清算主義になるのである。

（3）「『資本主義批判の深化』と全国委」

まず本田君は、「意義と限界」論文を俎上にのせる。そして、①「『一二・一八路線の限界、誤り』を政治・組織路線として指摘しながらも結果として主張していることは、『一二・一八に於る反スタ・マルクス主義のイデオロギー的基礎の解体』の不十分性、一面性の誤りとしていることの矛盾」（P一三五）、②「資本主義批判の一面性」を克服を主張していること、の二点を指摘し、かつ、「資本主義批判の四つの構成要素」＝「国家論を付加すべきである」ということの提起は重要であり云々（P一三六）と述べているのである。そして次に、「部落（上）論文」に移り、やはり「ブルジョア国家批判とプロレタリア独裁の問題、即ち国家論の問題」（P一三七を強調している。

だがそれらは、我々との分裂直前の中央委でのプラン論争など（『鉄鎖を砕け』創刊号参照）の総括ではなく、更に重大なことは、正しい「資本主義批判」があれば党は建設できるという誤った思想について無自覚であり、「資本主義批判」に「国家論」の要素を付け加えればよいというような代物に他ならない。

そして、再び我々は「八木沢イズム」の批判を聞かされるのである。それは「理論と実践の弁証法」（P一四二）の領域に於てなされ、「実践」概念の把握から認識論上の批判として行われている。本田君も又、当世流行の「認識論」主義へと足を突っこんでしまった（これらのことは後に又見る機会がある）。「八木沢イズム」とは、その哲学が誤っていたからだめだとされるのである。だが百歩譲って、仮に「八木沢イズム」なるものが存在していたとしても、それは哲学上の誤りに根本を有しているのだろうか？　かつて反スタ・マルクス主義者共は、スターリン主義の根源を「弁証法的唯物論と史的唯物論」に求め、その批判を通じて、「マルクス主義の形成の論理」等、マルクス主義を把握せんとした。だが、そもそもそのような一つの領域から、しかも〇〇イズムを批判することから、マルクス主義を把握するという思考自体が観念的なのである。かくして本田君は、「綱領・戦術・組織」などを口にしても、何ら核心を理解しておらず、お題目にすぎないことが明らかとなった。

とまれ本田君はそこから、「マルクスに於る『資本主義批判』の核心は何か」（P一四三）と、大きくかまえるのである。曰く、「『階級対立の非和解性』を自己の枠内で解決することができないことを宣言すること、ただその『解決のための物質的諸条件』をつくり出すことができるだけであること、その解決はプロレタリア階級の手によって、賃労働制度の廃止……としてのみ達成されることを『資本主義社会』に突きつける事こそ、首尾一貫した『資本主義批判』なのである」（P一四四）、「マルクスは、そのような資本主義的生産様式が、決して『絶対的で、最後のもの』ではなく、『社会的生産の歴史的にすぎ去る発展段階』にすぎないこと、従って賃労働制度は、過去の労働諸制度と同じく、一時的な劣った形式にすぎず、廃止され、新しい労働制度＝協同労働によって置き換えることができる事をその『資本主義批判』の『核心』としたのである」（P一四五）、「又同時に、マルクスは、この賃労働制度の廃止と協同労働制度の発展は、唯一、政治的にのみなされる事、即ち、『政治権力を獲得しない限り不可能である事』を一方の『核心』として主張したのである」（P一四六）、

等々と。

このようにまくしたてられると、我々のような気の弱い者は、つい批判するのに気がひけるのであるが、勇気を奮ってペンをとろう。それは、史的唯物論から経済学から階級闘争の理論から、あげくのはては戦術まで、一切合切が「資本主義批判」という風呂敷に包まれてしまうことである。なるほど、綱領－戦術などいらないのも道理である。本田君は、この魔法の風呂敷をかかえて旅に立つ。

曰く、「我々が『資本主義の深化・発展』という場合は、このマルクスが『典型的な資本主義として抽象した産業資本主義の批判』を現実に適用することである。即ち我々は、『資本主義の最高の発展段階としての帝国主義』の段階に存在しているわけでもなく（傍点引用者）、それはすぐれて『現代過渡期世界』という世界史的発展段階に対する批判として発展させられねばならないということなのである」（同）、と。

遂に本田君は、宇野三段階論をも跳びこえて、鈴木鴻一郎ばりの「原理論－現状分析」二段階論へと行きついてしまった。レーニン『帝国主義論』などは、既に古くなったと本田君はおっしゃるのである。だが、凡そ現代資本主義を帝国主義の次の段階とするのは、ブルジョア・エコノミストを除けば、修正主義者、構改派ぐらいである。大変なことになってしまったものだ。

おまけに本田君は、「『部落論文』……は、『一二・一八資本主義批判の限界』を、『資本の生産過程に於る階級支配、資本の専制の労働者に及ぼす結果に対する軽視』として抽出しているわけであるが、これは、……『一二・一八資本主義批判の右翼的深化』として結果しており、他ならぬ『第二段階』に解体された結果ではないかと考えるべきであろう」（同）と、全国委が有した最大の意義とでもいうべき、戦術上の転換の土台をすて去り、一二・一八以前へと歴史を逆もどりさせるのである。これらのことは、明らかに、資本主義の解明をうむことなく続けるという「何人も認める科学」を確立することにつながるのである。その中で「権力問題」をいかに叫ぼうが、徒労というものである。

第三章　「資本主義批判と唯物史観について」について

これまで、『マルクス主義』創刊号での本田君を見てきたが、それらが当時ほとんど批判されなかった（実は、批判するに値しないこと以上ではなかったのだが）ことに自信を深め、ドン・キホーテ（本田君）は、ロシナンテ（『マルクス主義』）にまたがり、サンチョ・パンサ（ボル派か？）を従えて、冒険への旅に出る。ここでも本田君の道筋に従うことにしよう。

①まず本田君は、「部落（上）」論文に立ち向う。そして、「この論文を指して『第二段階論の理論的支柱』であるとかの評価は排されねばならない」（本章全て『マルクス主義』№2。P五三）とする。それは、「感性的な把握にすぎない」（P五四）のだそうだ。だとすれば、当時永井が「これは部落問題に関するのみならず、一二・一八路線の一定の総括をなしたものだ」としたことや、それを指針にした当時の所謂「第二段階」的実践は、全て幻想であったということになるのだろうか？　答は二つに一つしかない、すなわち、当時の実践が存

在しなかったのか、それとも、本田君の観念が誤っているのか、のどちらかである。とまれ本田君は、それら「細かいこと」は無視して、「だが客観的な評価としては、この論文は『資本主義批判の真の一面性』について正確な認識に到達しているわけではない。従って『資本主義批判の深化』の提起も又、正確な方向性を示しているわけではない」（P五五）と結論づけるのである。それは、「その『批判の一面性』は、何よりもその批判が『プロレタリア大衆の現実の生活の矛盾を把ええないという資本主義批判の一面性』として認識、把握されているという事」（同）らしい。かくして、「基本的問題は何よりも『序説』（註＝前章で見たもの）で述べたように『唯物弁証法』の問題であり、『唯物史観』の問題であり、権力問題そのものであったのである」（P五六）と言われるのである。

確かに我々は、読者諸氏とともに『序説』を見てきた。だがそれは、本田君が自慢するそんな代物ではなく、「唯物弁証法」も「唯物史観」も「権力問題」もありはするが、一切がずだ袋につめこまれ、マルクス主義を、行動の指針から死んだ抽象へと落しこめるものであった。だからして、「この（スターリン主義、宇野経済学への）批判は、これらの方法によっては真に『共産主義を科学たらしめない』ところの科学主義として批判したのであり、唯物史観の革命的復権として把握しなければならなかった」（同）などということも、「プロレタリア大衆の現実の生活の矛盾」の暴露や、「現実の帝国主義の運動の解明」を否定した上では、それこそ屁のつっぱりにもならないのである。

②「一二・一八資本主義批判が、その根本的内容に於て唯物史観を拒否した」（同）ということが今頃になって分かった本田君は、榎原論文（『共産主義』14・15）に向う。だが、本田君の理論に対する個人主義的態度はここでも公開されるのである。先に「八木沢イズム」という風車に突撃した彼は、今度は「榎原イズム」という羊の群に突っかかるのである。

本田君によれば、榎原「宇野批判」の限界は、「彼が歴史的に……組合主義の克服ということを問題意識としてもっており、しかるに彼の体系が組合主義に対して『戦術論の体系化』でしかない事を常に自覚してきた事と無関係ではない」（P五七）らしく、「榎原理論は、組合主義の克服というすぐれた視点を持ちながらも、その事の解明をいわば『イデオロギー領域』に於て考察する事を一二・一八を迎えるまでなす事がなく、『実践上の指針の問題』に限定し、『実践的－機能的－戦術的有効性』の側面に於てのみ考察してきたところに一面性があり、結局戦術論の体系化によって政治を表現することになったのである」という、六九年の榎原執筆『階級的労働運動』パンフに対する評価を引用してき、「だが榎原は、自己の永年の問題意識の余り、宇野批判に於る極めて重要な側面を欠落させてしまった」（P五七－五八）とされてしまうのである。

要するに本田君は、「八木沢イズム」にしろ、「榎原イズム」にしろ、当人が昔有していた問題意識が、現在の理論にどのように関係しているかを推理する名人なのである。だが、しからば本田君に問う、貴君は、一二・一八ブントとして組織実践を遂行していたのかどうか？更に又、榎原「宇野批判」を一二・一八ブントの理論的支柱の一つとして認めるのか否か？　少くとも、これらの質問に答える義務がある。古今東西、他党派による批判にしても、このような「批判」は存在しなかったし、何故に本田君がかくのごときまでに対岸の火事視できる

のかを明らかにすることが貴君の歴史的正当性を証す唯一の途だからである。

さて、その「宇野批判に於る極めて重要な側面」とやらに移ろう。本田君は、「宇野は何よりも『資本論』に対する、又マルクス経済学に対する換骨脱胎を通して何を実現したのかと問うならば、何よりもその『唯物史観』を一切排除したのであるといわねばならない」（P五八）と述べている。このセンテンスは一つのトートロジー（同義反復）である。「マルクス経済学に対する換骨脱胎」とは、「唯物史観の排除」以外に何を指しえようか。だとするならば、「：：を通して何を実現したのか」という問いには、宇野経済学が占めている階級的意義をもって答える以外にないはずである。しかるに本田君は、「根本的犯罪性、小ブル性」「マルクス主義に対する全面敵対」「マルクス主義に於る資本主義批判をまさに清算し、国民経済学以下的な水準にまで堕落せしめる」等々以上のことは語っていないのである。のみならず、宇野経済学に「唯物史観」を付加すればこと足りるのかどうかさえも定かでない（誤解のないようにことわっておくが、我々は唯物史観とそうでない部分というように『資本論』の内容が切断しうるとは考えてない。本田君が「唯物史観を排除した」というように、その部分だけを排除しうるように考えているらしいので、このようなことを述べたまでのことである）。結局、本田君の「資本主義批判」とはこのようなことを問題にしている以上ではないのだ。

「我々にとって、批判の武器は弁証法である」（P五九）ですと？逆は必ずしも真ならずである。弁証法は批判の武器であるが、それのみが批判の武器ではない。実際この章は、弁証法の解説にほとんどを費しているのであるが、本田君は、「マルクスの唯物弁証法！唯物史観」及び「その見地からする資本主義批判」ということをどのように理解しているのか知りたいものだ。きっと、次節で明らかにしてくれることだろう。

本田君は、しきりに「反動的イデオロギーが、まさにあの三〇年代のヨーロッパをおおいしくしたように、まん延せんとしている」（P六二）とか、「まさに、三〇年代のヨーロッパの労働者が本当に自分たちの進むべき道は、ブルジョアジーと連合した『反ファッショ統一戦線』なのか、と問うたように、今、日本のプロレタリアートに問うているのである」（P六三）とか、三〇年代を強調しているが、それは前に見たトロッキズムの評価と関連があるのだろう。

〈註〉三〇年代を叫びだしたなと思っていたら、最近ボル派は「侵略を内戦へ」というスローガンを掲げている。どこかで聞いたことがあるではないか！（批判後述）。

③いよいよクライマックスである。何しろ「マルクス主義と唯物史観について」というのが本章の表題なのであるから。だが、この期待は即座にけしとんでしまった。おおよそ三頁半にわたるこの章はその半分がマルクス、エンゲルスの引用であり、あとは、前章をうけついでの模原理論に対する唯物史観を排除したという批判なのである。このような批判は既に七四年初頭に於る『仲代論文』の赤報派批判でなされていた。にもかかわらず本田君は、「以上が、現局面に於る我々の出発点としてふまえられなければならない」（P六七）というのである。一体、本田君は七四年の党内闘争に於て何を考えていたのだろうか？　既に歴史はその段階をすぎ去っているというのに、本田君はこれから出発しようというのだ。一二・一八路線の誤謬の一つが史的唯物論に対する態度にあったというのは、塩見君らも気づき始めているし、最早常識なのである。唯物史観は、階級闘争の理論に結びつけられねば何の役にも立たないのだ。史的唯物論とマルクス主義経済学を基礎に綱領－戦術を定めることが問われているときに、「唯物史観から学ぼう」などと叫ぶのは、前衛の資格がないといわれても仕方のないことである。

だが、本田君の最後の言葉こそ是非とも聞いておかなくてはならない。「だが、更に重要な今一つのことがある（傾聴、傾聴！）。それは、現実の階級闘争の発展は、あるいは、その歴史過程は、決して『最終的な』『完成された』『余すところなくつくした』ところの、マルクス主義的研究（！）の成果を待ってはいないということである（オーッ）。確かに、『理論は非常に有効である。しかし、ペダンチックな理論の物神崇拝は何もならない』のである（その通り！）。第三インターナショナルは、その最良の期間、完成された綱領なしに存在していた。又、共産主義者同盟は、マルクス、エンゲルスによって、彼らが『党宣言』を提革（起か？）する前に創立されたのである」（P六七）。

さすが本田君は先見の眼があった。彼らの「研究」が間にあわないだろうことを知っているのである。だが凡そこれまでの歴史で、自らの理論作業が間にあわないかもしれないなどという危ぐ一般（実は、革命党などはなくてもよいという思想）をはっきりと述べた党派が存在しただろうか!?　このような形で、第三インターや、共産主義者同盟をもち出すのならば、そこでのローザの見解、ブハーリンの綱領草案（三回大会）等に対する評価、義人者同盟内の論争に対する態度を明らかにしてほしいものだ。

〈註〉「ローザの見解」とは、第三インター結成時期尚早論のこと（コミンテルン第一回大会）。「義人者同盟」は共産主義者同盟の前身。

④補足の章については、略。

最後に、精一杯努力した本田君及びボル派の諸君に、マルクスがワイトリングとの論争で言ったという次の言葉を贈呈する、

「無知は何人を助けたこともなく何人の利益となったこともない」。

第四章
「組織論確立の為に」について

（一）我々はそもそも「組織論」などという論をものにせんとすることと自体、観念的であると考えているのであるが、まあボル派の主張を聞いてみることにしよう。

①それはまず、「共産主義者同盟がもったその根本的弱点は、共産主義と党に対する基本的な考に於る誤りであり、大衆運動主義、一き主義を共に生みだすところの経済主義であった。それらは第一に、マルクス・レーニン主義をその団結の基礎におかずに、情勢分析と、闘争戦術を団結の基礎にするプラグマチズムであった。第二に、中央集権主義を軽視し、サークル主義を信奉した。第三に機関紙活動による集中した宣伝、煽動を軽視し大衆運動で代置する。第四に党を大衆に溶解させる事も、大衆組織に党を代行させる事も平気でやり党組織論を全く確立しえなかった。第五に思想闘争、従って党派闘争を軽視した。第六に運動方針を猫の目のように変え、スローガンを少しの情勢の変化にも対応させてすぐ変更した」（P七八）、「更に共産主義者同盟

が負ったその歴史的ともいえる弱点は、思想的、政治的、組織的立場に於る中間主義、折衷主義であった。基本的には、第一にスターリン主義に対して、第二にトロツキー主義に対して、第三に毛沢東主義に対して、第四に社会民主主義に対して、第五に、反スタマルクス主義に対して、第六にサンディカリズム、ブランキズム、無政府主義に対して中間主義であり、常に日和見主義であった」（同）とぶちあげる。あげくのはては、「関西地方委は一貫してこのメンシェビズムの政治的、風土的温床であった」（P七九）とまでいうのである。

だが想い出してもみよ！　七四年の党内闘争において、関四地方委に支配的な経済主義的傾向に対して戦闘を開始したのは他ならぬ旧首都圏委であった。それを中央書記局（関西にあった！）に属していたメンバーがこのように言うとは！　何とも悲惨な話である。おまけに本田君は厚顔にも、「この時北原の様に、『どんなに思想的に相違しようとも分裂だけは絶対にいたしません』という誓約書さえ義務づければ不幸はまぬがれるのではないかという淡い希望などは全く関係がない」（P七九）などと口にするのである。だが、この文章が執筆されたとされている七五年六月一二日の丁度一年前、このような「誓約書」を我々に要求することに汲々としていたのは本田君ではなかったのか!?

②前においてもそうであったが、依然として「八木沢イズム」「北原イズム」「永井」等に対する非難のみがつらねられ、核心的問題は事実経過を述べることで回避し、レーニン等の引用をちりばめ、決意主義的言辞を弄し、心意気一般が綿々と述べられている。唯一の結論らしきものは、「我々の『歴史的事業』の遂行の遅れをもたらした当のものは、何よりも同盟（全国委）の思想上の経済主義的偏向であり、反スタ・マルクス主義への反動的回帰の傾向であった。その特徴の第一は、マルクス・レーニン主義の軽視であり、その卑俗化であった」（P一〇二）ということであり、ボル派はそこからマルクス・レーニン主義の「学習」のみを導き出したのである。

しかしながらボル派はふと最後にもらした、「……総括案は、そのようなより深化されより具体化され、より能動化された総括、方針を生み出す確固とした『方法論』をなすものであり、又その『ガイスト』になるであろう」（P一一五）、と。何と！　ボル派は今、「組織論」の「方法論」を明らかにせんとしているのだ。組織を建設することではなく、「組織論」を建設することが重要だと考えたボル派は、その「方法論」に頭を悩ましている。これが砂上の楼閣、観念上の党建設でなくて何であろうか!?　そういうことであるならば、あちこちで言われている「結成された直後の我が胎内からでさえ、小ブル的動揺と日和見主義が発生した」（P八五）などということは、これからも不断に生ぜざるをえない、否、その空中分解すら不可避である。

③さて最後に、「諸悪の根源」ともいうべき「八木沢イズム」が、その「実践論」から批判される。だがここではその批判の内容はさほど問題ではない（ルカーチの引用など微笑ましいではないか）。問題なのは、全国委の総括が「八木沢イズム」批判にすり変えられていることである。読者諸氏の中に、それらを最後まで読み通すだけ忍耐強い人がいるとはおもえなかったので詳細な引用は行わなかったが、大よそ五〇頁ほどもある彼らの論文の中で、最初に広げたようなことをつぶさに総括している部分は皆無なのである。

ボル派は『マルクス主義』№1で、「種々の反動的傾向が、全国委

内部に公然と、あるいは陰然と発生したのである。その一つは、いわゆる『党—革命勢力論』であり、『全国政治闘争』をもって、党の前進を図らんとする政治過程主義、戦闘団主義であり、伊集院一派として外化した傾向である。その二つは、『生きた資本主義批判』云々を語ることによって、綱領に接近しえないところの市民主義的傾向、社民的傾向（註、「八木沢イズム」）であり、その三つは、綱領と切断して、組織の団結と規律を創りうるという組合主義、技術主義、とどのつまりは、日向派流の革マル主義、人間主義、総じて労働者反対派的傾向（註、「北原イズム」）である」（P七四）と述べている。

本田君がそれらの傾向に対していかなる立場をとったかはもちろん述べられていない。そういう把握から今、「八木沢イズム」に対する批判が展開されるのである。これらのことは何を意味するのか？　つまるところ、全国委は全面的に誤っていたとざんげするのか、全国委内で責任ある活動を遂行しなかったか二つに一つである。「八木沢イズム」という造語は、全国委の組織実践（組織実践とは綱領であり、戦術であり、組織である、為念）を唯物論的に総括するのを回避し、観念的に自己の位置を合理化せんとすることの指標に他ならず、党内闘争を私闘としてしか把ええない政治力学主義、本田君流にいえば「フォイエルバッハ的把握」なのである。そのような観念的「総括」は、不可避に理論一般、思想一般をのみあびてもないこうでもないとひねくりまわし、又、「これらの日和見主義は……第二インターナショナルの伝統を脈々と受けついでいる」（P一二二）とかいって、とめどもなく歴史を逆上り、とどのつまりは、マルクス・レーニン主義を学ぼうという一般的な結論に帰結する。以前にも言ったが、これを「今様の清算主義」という。行うべきことは、「八木沢イズム」と第二インターが関係あるかどうかを推理することではなく、同盟（全国委）—分裂の唯物論的総括である。

ボル派のこのような把握は、その小ブルインテリ的個人主義と一体である。『通信』№7で明らかにしたように、ボル派の女性解放闘争の視点からする全国委「総括」は、ざんげと〃自覚〃以上ではなく、「自己否定」の論理と全く同一の個人主義的思想を表現しているし、マルクス、レーニンの理論を認識した者が共産主義者であるという小ブル的階級闘争観、又、組織実践を個人の思想に直結させる把え方や、個人署名入りでしか文章を公表しえないことにもそれは見ることができる。「中央集権主義」を口にするなどはとんだお笑いなのである。

レーニンは「解党派」を規定して、「自由主義的な退廃を労働者の間にもちこむ為にブルジョアジーから派遣された小ブルインテリ」と言っている。日和見主義は解党主義に発展する。ボル派の諸君、確かに「我々の真の敵は、当面我々自身である」（P一二三）というのは当っている。重々気をつけたまえ。

（二）

①次に全国政治新聞に関するボル派の主張を見てみよう。まず、「全国政治新聞を巡る同盟活動の総括」から検討する。だがこの表題から何かすばらしいことを期待する読者は、再々度裏切られる。それは、「手工業性の真の根源」についていう。「何よりも一般的な大衆運動主義や、又組織軽視等ではなく、全国委の歴史的位置と任務に対する軽視—解党主義こそ、その真の根源であった」（P一三一）と。つまり、すぐつづけて出てくるように、「理論に対する軽視、云々」（同）

のことである「ナルホド」。そして又、「従来の方法とは、『不充分な文書を提出するよりは、完全な文書を提出することの方が、より重要である』という類の考え方であり、それを排した新しい方法とは、『完全な文書を提出しないことよりも、不充分な文書でも提出する方がより重要である』という考え方であ」（P一三七）って、「旧い方法こそ、組織を不断に、手工業性の沼地に追いこんだ犯人でもあった」（P一三八）、と「フムフム、作風も必要であった」。更に、「いつも、『中央集権的組織』と『中央集権的指導』の重要性を認識しているのは、我が同盟にあっては前線の同志であったし、その認識が実のところ最も不足してきたのは、他ならぬ『我指導部』であったのである。だから今、我々は、『指導部』内部の『地方主義』を克服しなければ一歩の前進もありえないのである」（P一四五―六）、と「ホーッ、指導部が悪かったのか」。以上が総括らしきもののほぼ全部である。後は例によって『何をなすべきか』などの引用を擁しての、一般的な、余りに一般的な原則の確認と、事実を羅列しての寸評だけである。

あとの二つの内容は検討するに値しないという我々の判断は、読者諸氏にも支持してもらえるであろう。従って最初の内容についてだけコメントしておく（もっとも、ボル派の言う全国政治新聞の重要性とは、「昨今の、社会党、自民党の『機関紙活動の重視』のかけ声は、何よりも思想的・組織的分散性の基礎の上の試みであることによって、決して成功するものではない」（P一三三）などと社会党、自民党との区別を強調しなければならないような代物らしいが）。確かに、「理論の軽視」ということがあったことは我々も承認するし、又、現在の課題からして、「党派闘争の武器」「組織建設の武器」「党内論争、思想的統合の武器」として確立するという面から言えばそれは致命的であった。だが、それは一面であって全てではない。全国政治新聞は又、何よりも全面的、全人民的政治暴露という点からして決定的なのであり、だからして全国的新聞でなければならず、政治的新聞でなければならないのである。とりわけ全国委の総括からすれば、この点こそ核心である。全国委当時の煽動、暴露は、様々の領域に「分け入った」にもかかわらず、民主主義的視点からのそれであり、更に、その主流は我々の集会―デモへ向けてのそれであった。ここに、戦術、政治活動の狭さ、そして組織活動の狭さが如実に表われているのである。

②次に、「政治暴露と全国政治新聞」を検討する。それはまず、これまでの政治闘争の把握の狭さを主要に赤報派批判から明らかにし、続いて、全面的政治暴露の重要性を述べている。それらの六―七割はレーニンからの引用なので、ボル派の主張の注目すべき部分のみ拾うことにする。

「新左翼を含む日本の全ての左翼が、レーニンの政治的煽動と政治的暴露の役割と、共産主義者の恒常的な基本的な任務を徹底して低めた」（P一七八）「然り」、「旧来、我同盟で行われてきたいわゆる『情勢分析』は、情勢の特徴を主観的に抽出し、それを主観的に構成するという全く主観的な、又せいぜいのところ素朴反映論的な分析でしかなかった」（P一八一）「これも又然り」、「又我々は、日々、生起する政治問題や政治的事件について『組織的任務を提起しないのなら、又それが行えないならば、問題を提起すべきでない』、又『我我の現在の力量からいってそのような任務を行うことはできないから、すべきでない』、『そのようなことを言うのは大衆運動主義である』

等々の批判をもって、全面的な政治的暴露を行うことを押しとどめてきた」（同）「ソウダ！」、「我々も又このこと（全国的新聞による生きた政治的煽動）から始めなければならない」（P一八四）等々。

それらのことを深くえぐり出さない評論とはいえ、もっともらしいことを言うものだ。だが先にこの筆者は、「百の認識、百の確認が実践と結合しない時」（P一三二）それは敵対であると述べていた。実際その通りだ。ボル派の新聞に目を向ければ、そこには旧態依然たる狭い「煽動」しかないのだ。曰く、「海洋博、日韓、インドシナ、天皇を軸に七五年階級闘争の飛躍を」、と。はたして、このように煽動の枠を固定してしまうことが「全面的政治暴露」なのだろうか？　これらの諸課題を闘うこと＝階級闘争の飛躍などというのは、主観主義ではないのだろうか？　これらは多分本田君が言う「過渡的戦略」の産物なのであろう。詳しく見ることはしないが、筆者が引用している「住民の全ての階級、層、集団の活動と生活の全ての側面の唯物論的分析と唯物論的評価」が『プロレタリアの旗』にあるなどとは、御世辞にも言えないのである。従って、ボル派がもっともらしく口にしていることは、単なる思いつきか、我々からの盗用であると言われても仕方のないことである。

ついでに我々に対する不当ないいがかりに答えておこう。ボル派は、「闘内一派は……第二次ブント流の戦略戦術主義的な厳格な中央集権的な革命党の建設抜き」（P一七六）、「闘内一派流の俗流の『一般的な』宣伝、煽動を考える見解（戦略戦術の党）」（P一七九）等とおっしゃる。これは口はばったいというものだ。確かに、我々は、諸君らのように観念的な「組織論」を打ち立てようと努力してはいないし、又、諸君らのように主観主義的な宣伝、煽動ではなく「一般的な」宣伝、煽動を遂行している。このことは読者諸氏が一番知っていることだ。だが、ともかくも我々を批判するのなら、筋道をたててほしいものだ。我々はそれに受けて立つのにやぶさかでない。聞くところによると、ボル派は我々に対して、「理論的には正しいと思うが、党としての自己批判がない」という風に評価しているそうな。理論的に正しいと思っているのならば、なるほど批判しえないのも道理である。だがこの一言の中に、はしなくもボル派の理論に対する誤った態度が露呈しているではないか！

〈註〉『プロレタリアの旗』No.6によれば、ボル派は「今号より編集方針を一新して、可能な限り政治全般の暴露を取り扱い『労働者階級の政治教育に、その政治的意識を発達させる』ために、全力を傾注する決意を新たにしている」そうだ。結講な心意気ではある。だが、それならば「侵略を内戦へ」とか、「戦略的総路線」とかの空語をならべず、早いとこその成果を見せてほしいものだ。正直いって、諸君らの空手形にはもうウンザリである。

ついでに「侵略を内戦へ」のスローガンにコメントしておく。多分レーニンの「帝国主義戦争を内乱へ」のアナロジーだと思うが、レーニンの場合、①帝国主義戦争への動員に対し、又、祖国防衛主義がそれへの屈伏であるのに対して、プロレタリアートの任務は銃口を国内のブルジョアジーに向けることであることを明らかにするとともに、②帝国主義戦争が危機を激化させ、革命情勢の条件を形成しつつあることを基き、それを利用するという実践的方針であった。しかるに今日の状況は、帝国主義戦争か国内戦かという択一を迫るものとしてはなく、かつ、現代の情勢を侵

略による危機に短絡させることもできない。そのような中で、「侵略を内戦へ」を「戦略的総路線」などと定めることは、今日の危機の性格を暴き武装蜂起を準備する任務に対する日和見主義に陥る。

とまれ、本田君の「過渡期世界論総括」を楽しみにしよう。

（三）略

（四）略

終章

以上からわかるように、ボル派とは、小ブルインテリ的個人主義者のサークルであり、理論的には、トロッキーから我々の主張まで無総括でとりこむちゃんこ鍋的集団である。だが、これらの矛盾は単なる観念の矛盾ではなく、存在そのものの矛盾である。すなわち、七四年の党内闘争に於て、専ら自己保身のためだけに我々に対して北原等と連合し、その尖兵としての位置を有していたが、我々との分裂に至るや全くそのレーゾン・デートル（存在理由）を失い、「指導部打倒」を合言葉にフラクを結成し、かつての「仲間」を批判し始め、分裂したというそのことこそが、現在のボル派を規定しているのである。これらのことを真剣に反省しない限り、ボル派の矛盾は一層拡大し、又、一層観念化していくのは不可避であり、あたかもマル青同の如く、いずこより来たりていずこへ行かんとするのか全く不明な、共産主義運動の阻害物に転化するのである。

そういえばこの間、マル青同は「共産主義化」を推し進めてきた。ボル派の運動も一棟の「共産主義化」であろう。それが連合赤軍のようにシビアにならないのは、ボル派が根っからの日和見主義だからに他ならない。

又、ボル派は、「沖縄プロレタリア人民に腐敗を持ち」こんだとされ、全て反動的であったとされた旧「烽火」派の情勢分析を、何のことわりもなく再録するということを行っている。この無責任ぶりを見よ！

だが、それにしても、インテリ的個人主義的な「思想」など全く無力である。分派闘争に於て行いえた極めて破廉恥な行為はその証左である。これでボル派の諸君には、日共、革マルの「権力の革命的利用」論＝反革命的「告訴」路線に対する態度を明らかにする義務が生じた。

冒頭で述べたように、綱領的には、「資本主義批判」の永久化をもって題目とし、マルクスの名をもってマルクスを冒とくし、戦術的には、「過渡的戦略」なるものを導入し、「最小限綱領＝戦術」という民主主義派として現われ、組織的には、観念的「思想」サークルと労働者、学生の大衆組織というズブズブのサークル主義を体現するこの集団共には、最早、一片の正当性もありえない。我々に残されているのは、その死に水をとってやることだけである。

第二部

12・18——全国委の革命的継承・発展の事業から逃亡し、非マルクス・レーニン主義、召還主義に転落した赤報派を批判する

今や我々は、新たな一歩をふみだすべき時に到った。我々は、一二・一八ブント全国委員会を真に発展させることを自らに課してき、「烽火」派批判を経る中で、全国委員会の継承の内容を一定整理しえた地平に立っている。そして更に、一二・一八路線の継承・発展を考えるとき、不可避なものとして、赤報派に対する我々の態度を明らかにしなければならない。いうまでもなく、およそ我々と赤報派は一二・一八路線という共通の地平を有している限り、外在的な批判は許されるべくもない。それは赤報派が、一二・一八路線の弱点と誤謬を省ず、その意味では最も一二・一八路線を代表しているが故にこそ、なおさらそうである。

一二・一八路線は、綱領上は宇野経済学批判から資本論の復権をめさし、それを組織実践の土台にすえんとし、戦術上は、共産主義＝革命的実践ということを合言葉に、スターリン戦略・戦術論の打破を試み、組織上は、党形成・階級形成二元論の総括から我々を共産主義的実践の主体と把握せんとしたのである。だが、そのとりわけ綱領上の科学的社会主義に基づいた転換の巨歩を印したという画期的意義と同時に、それがそのまま、綱領上の転換にのみとらわれ、第二次ブントの組織実践総体、すなわち綱領、戦術、組織総体の転換をかちとることを阻み、不断に第二次ブント的戦術、組織の内実がはびこり、再び戦術をめぐっての分裂に至ったのであった。

Ⅰ 綱領上の問題について

①赤報派が綱領を問題にするときは、常に「原則的部分」に限られている。その把握の仕方、形式に対する批判も明らかにしなければならないが、それだけでは彼らも承服しないだろうから、まずその「原則的部分」に対する批判を行った上で、それに進みたい。

さて赤報派は、「綱領の原則的部分に、階級闘争に対するマルクス主義の原則を復権することが必要である」（『序章』一二号）ということを党派性としている。その内容は、第一インター規約の前書きと、後に追加された第七条a項に他ならず、「この簡潔な言葉で示された正しい資本主義批判に裏づけられたマルクス主義の階級闘争に対する原則こそ、プロレタリアートの革命党の綱領の原則的部分でなければならなかった」（同）とされる。かくして彼らは、「正しい資本主義批判」の解明こそが第一義的な課題と把握していくのである。従って、この「正しい資本主義批判」なるものが彼らの評価を行う際の最大のポイントに他ならない。「資本主義批判」という厳密性を欠く用語の意味するところは、『資本論』や、レーニンであるならば『ロシアにおける資本主義の発展』のようなものらしいので、そのように了解し論を進める。この「正しい資本主義批判」という内容は、「資本主義社会に於る階級の経済的基礎を明確に把握し、階級支配の実体を、プロレタリアートの支配階級への経済的隷従として解明すること」「階級支配の実体についての正しい思想」（同）ということであり、マルクスとレーニンを除く全ての輩は、これを理解できず、搾取とは「資本制的生産様式の諸結果のひとつである」にもかかわらず「資本主義が搾取制度であることを告発することにとどまっている」（同）と批判される。そしてその帰結が「所有と労働とが分離することを資本制的生産様式の法則として説明」（同）することに求められるのである。これらの内容が検討されねばならない。

まず、マルクスやレーニンは（もっとも「レーニンは、その綱領作成過程に於て、不十分である」（同）とされているが）、「階級支配の実体についての正しい思想」「所有と労働の分離の法則」を明らかにするために経済学的著作をしたためたのか？　否である。『資本論』は、価値－剰余価値から、いわゆる「搾取構造」を明らかにしたのみならず、剰余価値の実現から、更にその発現形態たる「利潤、利子、地代」等々を解明し、「三位一体」から階級闘争へと展開しているのである。つまり、その中で資本主義の崩壊の不可避性を明らかにし、それを労働者階級の所有者階級に対する勝利、共同所有への転化が人類前史の終えんたることを宣言したのである。それ故にこそ第二部の発刊を一八七三－のイギリス恐慌の結果を見るまで延期するというようなこともあったのである。このことひとつを見てみただけでも、「資本主義批判の核心は云々」などと容易にすませることができないことは明らかである。確かに、諸君らが言うように、「一二・一八……は資本－賃労働関係から必然的に結果する所有と労働との分離の法則＝資本制的取得法則を明らかに」（『共産主義』一六号）せんとしたのであるが、我々は、このような把握が逆に我々の理論上、綱領上の発展を阻み、戦術、組織の転換を阻んだ最大の要因の一つと考えている。

次に、搾取は「所有と労働の分離＝資本制的取得の結果」であると

いうスタティックな把握に関して述べるならば、「所有と労働の分離」は又搾取の結果として再生産されているのである。そもそも「資本制的生産様式の本質的原因」（『序章』一二号）などということを一言で語れるであろうか。もし言うとするならば本源的蓄積の内容を述べることになると思うが、それは又、不断に資本主義的生産によってくり返されることでもあるのである。そのことの帰結をもって、それが唯一の資本主義的生産様式の運動法則であるとすることは決してできない。『資本論』において何故本源的蓄積が二四章にあるのか考えてみる必要があるのではないか。

〈註〉　ついでに述べておくが、赤報派を批判するときに、認識論＝弁証法がないとするのがひとつの傾向となっているようであるが、このような見解に我々は反対する。赤報派が認識論の体系を公開した時ならいざしらず、そうでない場合には、認識論論争が綱領論争であるかのような非生産的な論争に陥る陥せいをひめているからであり、それは論争を後退させ昇天化させることに他ならないからである。確かに、赤報派の「資本主義批判」が非弁証法的性格を有していることは批判しなければならないが、それは現実的な組織実践に対する批判に従属するものである。

更に「階級闘争に対するマルクス主義の原則」を明らかにする際に、史的唯物論は全く不用なのか？　赤報派は、今なお「人間労働の歴史的解明＝唯物史観」「人間労働の経済学的解明＝経済学批判」（『共産主義』一五号）という理論を堅持しているようである。『査証』№6にも全く同様の定式化がなされていることから見てもそう判断せざるをえない。これは、スターリン主義が「党の世界観＝哲学」としたのに対して、世界を変革するというマルクス主義の立場を復権させ、革命的実践をその軸とし、又、労働概念との関係でいうならば、単に流動的な「生きた」労働のみならず、対象的な活動として、対象化された労働も含む形で把えることによって主体性哲学を批判する内容を有していたという意義をもってはいたが、「人間労働を唯物論の基礎にお」（『共産主義』一六号）くという表現に顕著なように、スターリン主義や主体性哲学に足下をすくわれており、「物質を人間労働として把握」（同）すれば、哲学から唯物史観、経済学批判の途が開かれるかのように哲学の延長線上に唯物史観が把えられてしまっているのである。これは、一二・一八路線においては、「唯物史観（イデオロギー）と経済学（科学）との関係を、経済学による唯物史観の基礎づけと一方、唯物史観による経済学批判という思惟の円環構造によって、真実の解明にいたる」（『共産主義』一四号）というような把握に基礎を有している。物質を対象化された労働とのみ把えることや、イデオロギーと区別された科学を考えること、あるいは、それら両者を「思惟の円環構造」（？）で結合するというような誤謬は言うまでもないとして、重要なことは、これから、「生産を〃労働〃と〃所有〃から解明することによって、初めて我々は〃階級〃概念を正しく把握しうるのであり、人間の歴史を解明する糸口をつかみうる」（『共産主義』一五号）とされ、「スターリンは生産から出発したために階級概念を明確にしえず、それ故、全てを生産力と生産関係から説明するところの機械的な歴史の見方になってしまっている」（同）というスターリン批判から、「生産力と生産関係の矛盾による社会発展の法則その他……史的唯物論」（『共産主義』一四号）を否定していることである。だがマルクスは、「生産力、社会状態及び意識は、相互に矛盾に陥りうるし、又、陥らずにはいない、ということ」

（『ドイツ・イデオロギー』）を明らかにし、その解明からレーニンが言うごとく「歴史を、はなはだしく多方面的で矛盾にみちた中にも合法則的な、単一の過程として、科学的に研究する道をさし示した」（『カール・マルクス』）のであり、『経済学批判・序言』として定式化されたのであった。それはまさしく社会科学＝歴史科学である。このような史的唯物論によってのみ、マルクスの「この一見迷宮や混沌と思えるものの中に合法則性を見い出せるようにする手引きの糸」（同）たる「階級闘争の理論」を確立しえたのである。だとするならば、「階級闘争に対するマルクス主義の原則」を明らかにするのに、史的唯物論は不用などころか、その核心をなしていることが明らかであろう。

これらからの帰結の第一は、資本制的生産様式の本源的条件と、その経済的運動法則とを混同することから、「資本主義批判」を前者に解消し、「所有と労働の分離の法則」に狭めることによって「歴史的に特定のある社会の生産関係を、その発生、発展、衰退に於て研究すること」（『カール・マルクス』）たるマルクス・レーニン主義の核心を葬り去ってしまっていることである。すなわち、「マルクスは、資本主義社会が社会主義社会へ転化することは避けられないという結論を、全く専ら近代社会の経済的運動法則から導き出している」（同）ということを否定することにつながるのである。これすなわち科学的社会主義を否定することに他ならない。

第二は、「所有と労働の分離」や、政治的支配を直接的生産過程における搾取、支配と分断されて把えられているが故に資本主義的生産様式の諸特徴、それが労働者階級にもたらす影響などを明らかにする途を自ら閉ざし、更に、理論的には、生産力、生産関係というような把握を拒否するが故に、帝国主義の諸特徴の科学的、唯物論的暴露が欠落し、「国際反革命軍事体系」（『共産主義』一六号）なる極めて主観的な規定に終始するということである。「綱領の原則的部分」がかくのようなものであるからして、この綱領なるものは、「綱領の主要な目的の一つ――ロシア（日本と読め！）の資本主義の一切の多様な現われについての党の日常の宣伝と煽動のための指針を党に与えること――を達成していない」（『プレハーノフの第二次草案についての批評』）ことになるのである。

第三は、このような把握が、理論と実践の切断を一層深めることになっていることであるが、これはおいおい明らかになるであろう。

②本来ならこれから始めるべきなのであるが、次に赤報派の「資本主義批判」に対する把握を検討する。赤報派は、今なお、「『理論と実践の統一ということは、僕としては理論が実践活動の基準として役立つことだと考えています。それは理論の完成ということに重点があるのではなく、実践に役立つということに重点があると考えています』（資本論と社会主義）宇野はこのように、一般的には正しく問題を立てている。だからここでの問題は、宇野の理論がはたして実践活動の基準として役立つかどうかということに他ならない」（『共産主義』一五号）ということ、「唯物史観（イデオロギー）と経済学（科学）」という立場に立っていると思われる。これは明らかに宇野実践論への屈伏に他ならない。一二・一八路線においては、資本主義批判は武装闘争に耐えうる思想として語られていたように、六九年以降の共産主義論争が第二次ブントの理論にかわる頼りうる理論の形成として考えられていたことの弱点の克服がなしきれていず、その意味では日向派の絶対ブレない路線を確立するという志向――いわゆる「科学主義」

に足をすくわれるような方法になっていたことから、前記のような理論と実践の把握があることを確認しなければならない。

確かに、革命的理論なくして革命的実践なしと言われる。だが革命的理論とは、かのフォイエルバッハにかんするテーゼの一一項に関するレーニンの「彼ら(〃古い〃唯物論)は〃人間の本質〃を抽象的に理解して、これを(具体的＝歴史的に特定の)〃社会的諸関係の総体〃と理解せず、従って世界を〃変える〃ことが肝心であるのに、世界を〃解釈〃するだけであった。すなわち、〃革命的実践的活動〃の意義を理解しなかった」(『カール・マルクス』)という言葉からも判断しうるように、特定の社会的諸関係の分析を通じて明らかになること、すなわち、「資本主義から社会主義への移行の問題とは、他ならぬプロレタリア世界革命のことであって、それはプロレタリアートと党が、政治的に正しく問題を解決できるかどうかにかかっているわけであって理論的に解明すべき事柄ではない」(『共産主義』一五号)ということとは全く反対に、史的唯物論を基礎に、特定の社会構成体が不可避的に没落するということをその内容としているのである。だからしてプロレタリアートの歴史的任務が科学的に明らかにしえ、それを援助することが可能となるのである。赤報派のごとく把握した上で、「共産主義＝革命的実践とし、この実践の基準を資本主義批判に求めたところに革命的マルクス・レーニン主義の復権の最大の眼目がある」(『共産主義』一六号)とした場合、「対象の完全な認識から、対象の変革へという具合に問題をたてる……認識論に於けるカント主義」(『序章』一二号)とかいうものに不断に屈伏する。この土俵の上では、赤報派が強調する「階級闘争の原則」はマルクスがすでに明らかにしたことを認識(覚えたり)した以上は、悪無限的に「宇野の理論が……役立つかどうか」ということを確める作業に終始する以外にない。そもそも、レーニンが「三つの源泉と三つの構成部分」としたマルクス主義を、何か一つの点から把握しようとすること、宇野理論の批判からスターリン主義批判、そしてマルクス主義の獲得を目指すこと自体が観念的である。そのことが、自ら理論作業の枠を狭め、更に主観的な政治理論をひねり出すことに帰結するのである。

とまれ、ここでは赤報派のような理解の仕方では絶対に「革命的実践活動の諸条件を理解できず、又このような活動の意義を評価できない」(『カール・マルクス』)ということを確認しておけばよい。

③本章の終りに、彼らの綱領上の思想を党建設との関連で検討することによってまとめておこう。まず赤報派の組織実践の総括の仕方に関して検討すれば、彼らは今なお、「第一次ブントは……宇野理論に依拠していた。……第二次ブントは……宇野理論に対し、継承はしなかったが、根底的批判もせず、その結果宇野理論に依拠しようとする部分との統一ブント構想等々を進めてきたし、又宇野理論に依拠する部分に対して、イデオロギー闘争を組織し得なかった」(『共産主義』一四号)ということから、「宇野イズムこそは……日本の反スターリン主義運動のイデオロギー的背骨となってきた」(同)とし、「階級闘争を政治闘争、経済闘争、イデオロギー闘争の三つの側面に分解し、その一つの側面としてイデオロギー闘争を把えることは、現局面では不充分である。我々が六〇年ー七〇年代階級闘争を過渡期世界に於る階級闘争の転換点として把握していることはとりも直さず、従来の政治闘争、経済闘争の延長上に我々の組織活動を措定しえないということを意味しているのであり、どのような経済闘

争を闘うのか、そのためにはどのような組織を建設するのか、として、まさしくイデオロギーの内実そのものが全戦線にわたって問われている」(同)ということを継承しているようだ。それは、「宇野経済学批判は第一次ブント以来ブント系諸派に伝統的な〃戦略＝綱領〃主義を克服することを実践的課題としていた」(『序章』№一四号)とか、「宇野批判を、非合法党建設と革命戦争派再建の党派闘争に結びつけ」(同)という表現から判断しうる。これらの主張のように、綱領、戦術、組織総体を総括せず、イデオロギー一般にその総括対象を狭めること、まして、例えブントが宇野理論に対してあいまいであり、反スタ諸派がそれに依拠しているとしても、宇野批判から党建設を考えるということは誤りである。一二・一八路線の意義の一つは、それが宇野批判を通してではあったが、『資本論』を復権することによって第二次ブントの綱領上の誤りを克服する一歩を築いたことにあるのであって、宇野を批判したそのことにあるのではない。宇野批判の作業は、様々の意味付与をするまでもなく、ブルジョア経済学、「哲学」批判として継承、発展させられるべきものである。赤報派のような総括の無責任性は、理論上の一つのプラグマティズムに陥る。一二・一八下では、それは「資本主義批判」を武装闘争に耐えうる思想として主張するというように現われたし、現在の赤報派にあっては、後に見るような、先験的な戦術「原則」を正当化するために「資本主義批判」が語られるというようになっているのだ。それ故、「無数の隙間を自分のつくりごとでうずめ」(エンゲルス)、「非合理的な想像を、イデオロギー的な仕方を」(同)行い、「国際反革命軍事体系」の如く、観念的な体系を創り出してしまうのである。そして、一二・一八路線の場合、日向派との党派闘争が大きな契機となっていたことから、「何人も認める科学」を批判しつつも、前述した観念性に規定されて、足をすくわれており、大きくいうならば、宇野批判からマルクス主義を認識するということが、反スタ潮流のスタ批判からマルクス主義を認識するというのと同様の陥せいにはまってしまったのである。一二・一八路線は、第二次ブントの主観主義、急進主義を克服する基礎を獲得しようとしたにもかかわらず、不徹底であったが故に今なお、主観性を帯びていたし、その根拠は、第二次ブントの総括の部分性、一面性に存したのである。

更に、赤報派のような主張が不断に、理論闘争主義、党派闘争主義に陥ることを明らかにしなければならない。第一に、「宇野イズムこそは……反スターリン主義運動のイデオロギー的背景となってきた」という規定からそれは不可避である。けだし、反スターリン主義諸派が宇野理論に依拠していることを暴き、それを批判することに他党派批判が狭められるからである。第二に、宇野批判＝「資本主義批判」が「マルクス主義の階級闘争に対する原則」の解明に固定化される結果、それ自体は既にマルクスが明らかにしたものであることによって、それを認識しているかどうか、どちらがより深く理解しているかというところに規準がひかれることによって不可避である。又それが、赤報派の召還主義と一体であることは、後に明らかとなるであろう。これらの狭い視点から、「結合の前の分離」(『共産主義』一六号)を立場とすれば、それが党派闘争主義として現われることは自明である。けだし、「マルクス主義の階級闘争に対する原則」の認識を結集軸とし、それでもって他党派の解体から自らの組織の同心円的拡大を望むしかありえないからである。これは後により具体的に批判する。とま

れ、これら赤報派の態度は、マルクス・レーニン主義を死んだ教条へと落しこめるものである。彼らはさかんに赤軍派や日共（革左）派と論争を展開しているが、一口に言えば、その内容はどちらが『資本論』を正しく理解しているかということに他ならない。だが敢えて断言すれば、共産主義者同盟系の左翼的部分においては、マルクス・レーニン主義に立脚して過去の急進主義を克服しなければならないという確認はすでに常識となっている。その学習に懸命になっている組織も一つや二つではない。今問われているのは、マルクス・レーニン主義の適用である。科学的社会主義に貫れた綱領、戦術、組織を確立することである。党の戦術をめぐる論争に、より精力をさかねばならない。「帝国主義の全面的な科学的研究は、それはそれとして一つのものである。……その本質からして、科学一般が無限であるように無限なものである。だが……資本主義的帝国主義に対する社会主義的戦術の基礎は、それとは別物である。社会主義政党は討論クラブではなく、闘うプロレタリアートの組織である。……資本主義は、その略奪のあらゆるあらわれとその歴史的発展と民族的特質のあらゆる枝葉末節にわたって、あますところなく研究しつくされることはけっしてないであろう。学者たちは、部分的なものについて、論争することを決してやめないだろう。〃これを根拠として〃、資本主義に対する社会主義的闘争を放棄し、この闘争を裏切ったものに反対することを放棄することは、わらうべきことである」（『第二インターの崩壊』）という態度を片時も忘れまい。

最後に、世界党の問題に関連して述べておこう。我々は、世界党の必要性、それをめざす国際党派闘争の重要性を確認する。だがそれを理由に、綱領は初めから世界党の綱領として形成されねばならないという傾向には反対する。そのことによって、日本帝国主義打倒の任務を延期することはできないからである。レーニンは、一七年の綱領改正論争において、「わが党綱領の改正の問題は、プロレタリアートの国際的政党のための単一の綱領を作成する問題と結びつけられなければならない」というブハーリンの論文に対して、「もしこれを、筆者が新しい綱領を採用しないよう、単一の国際綱領、第三インターナショナルの綱領が作られるまで、この問題を延ばすよう、我々に勧めているのだと解するなら、そういう意見に対しては断固として反対しなければならないであろう」（『党綱領の改正によせて』）と断言している。そして、第三インターの創立に関しては、具体的にその条件が不足しているとして、「その（条件がそなわった）時までは、現在、他の諸党に比べてより有利な地位にあり、第一歩を踏み出すことのできるような諸党のイニシアテイブによって――もちろん、この第一歩を最終の一歩とみなすわけでは決してなく、又自党の綱領をぜひとも他の〃左翼的〃諸綱領に対置するものでも決してなく、まさに共通の綱領の作成に向って進むことによって――、この仕事を前進させなければならない」（同）と語っており、更にその措置として「左派の会議を促進したり、数ヵ国語で論文集を発行したり、他の国々で新しい綱領への道を『さぐる』ためになされたことについての資料をまとめる小委員会をつくったりすること」（同）をあげている。我々はこのレーニンの態度から学ばねばならない。問題は具体的にたてなければならない。「単一の綱領を作成したいという願いを表明」（同）することは無条件に必要である。そして、中ソ論争に対する評価、態度を明らかにすること、国際的な革命的＝国際主義的勢力の結集をめざすことは重要

Ⅱ 戦術上の問題について

①初めに赤報派の戦術そのものを検討し、それに体現されている彼らの戦術観－階級闘争観を批判することにしよう。赤報派は、「この段階（『赤報』一－二号）で……組織問題と戦術問題に於ては、今日に於ても基本的に変ることのない立場を定めた」（『共産主義』一六号）とし、「遊撃戦を戦術として決定している」（同）。それは、「一二・一八路線に於る資本主義批判」（同）－－すなわち「資本－賃労働関係から必然的に結果する所有と労働との分離の法則＝資本制的取得法則を明らかにし、……資本制的蓄積の敵対的性格それ自身が労働者階級の階級闘争の根拠であることを明らかにすること」（同）――「を忠実に継承しつつ、賃労働制廃止のための労働者階級の闘争は、今日の階級闘争の段階では革命戦争として闘われなくてはならないこと」（同）を根拠にしている。

一二・一八路線でもそうであったが、ブルジョアジーとプロレタリアートの非和解的対立、あるいは赤報派の言う「マルクス主義の階級闘争に対する原則」と、革命戦争ということの間には極端な論理的飛躍がある。しかも一二・一八路線においては「階級闘争の最高表現としての武装闘争」（『共産主義』一五号）という観念が基底にあったとはいえ、「一〇・八型の終局に革命的左翼が問われていたのは、戦術の面からいえば、明らかに蜂起であり、政治方針の面からいえば政府問題であった」（同）と、武装蜂起、プロレタリア独裁を労働者階級の運動の指導の内実として公然と掲げる方向も有していたのであり、いわゆる「革命戦争路線」に完全に純化していたわけではない。我々は、「恒常的武装闘争」からそれを継承した一二・一八路線の意義は、日和見主義の基盤たる合法主義を脱却しようとしたところにあるのであって、その闘争戦術そのものにあるのではないと考えている。

さて赤報派が、この論理的飛躍をうめるためにもちだす内容は、「武装闘争＝革命戦争の再開を街頭戦における機動隊の計画的せん滅として貫徹することによって機動隊の直接的な政治目的である階級闘争の治安問題化＝反政府闘争への押し込めという意図を粉砕しなければならない」（『共産主義』一六号）という表現に最もよく示されている。

すなわち、小ブル特有の危機感、焦燥感であり、「合法的な闘争手段は日和見主義的である、なぜなら、ブルジョアジーはとくにしばしばこの合法舞台で労働者をだまし、愚弄したからである。非合法的な闘争手段こそ革命的である」（『共産主義における「左翼小児病」』）と主張するかの「左翼」共産主義者の思想に他ならない。赤報派はいう、「この間の日本階級闘争の特徴は、革命戦争か、侵略反革命戦争かをめぐって両階級の攻防の非和解的煮つまりが形成されかかっていることであり、武装闘争へと様々な先進的労働者・学生・農民・グループ・個人が立ちあがっていること、立ちあがらずにはいないことであるが、しかしこれらの人々が訓練されておらである。だがそれを実現するためには、明確に世界党建設を語っている部分が国際的に数少い以上、何よりも我々がイニシアテイブをとる力量を蓄積しなければならない。このことを抜きにした世界党建設は空論であり、またそれを語ったからといって国際主義的であるということでもないことを肝に銘ずる必要がある。

ず、いまだスターリン主義や反スタマルクス主義の残りかすに影響されて武装闘争を確固として押し進めていく思想的政治的立場を定めきれていないばかりか成員を厳選し、秘密の技能を集中する原則的な非合法活動を作りあげることができないことによって、政治警察による一斉逮捕、組織破壊、フレーム・アップ、スパイ工作を許していることである」（『共産主義』一六号）。

まず冒頭の「革命戦争か侵略反革命戦争か……」に関していえば、彼らは明らかに「自分の願望、自分の観念的＝政治的態度を客観的現実ととりちがえた」（『共産主義における「左翼小児病」』）、「これは革命家にとって最も危険なまちがい」（同）である。

第一、原則的な態度であれば、自国の侵略反革命を容認するのか、それとも自国の打倒を目指すのかとして存在するのであって、革命戦争という闘争形態をもってすりかえるのは、誤りであること。

第二、直接に前述する対立が目の前に存在する、すなわち、日本帝国主義を打倒する武装蜂起が日程にのぼっているのだとすれば、それは階級闘争の一定の発展段階としての内乱の時代であること、「かかっている」という表現がミソであるが、我々共産主義者に問われているのは、いかにすみやかに、そのような発展段階を切り拓くかということであること。

それに続く部分に関しては、「日本階級闘争の特徴」が、武装闘争の問題だけに狭められていることが確認されなければならない。「侵略反革命戦争か、革命戦争か」と問題をたてた彼らは、武装闘争だけが重要な闘いであるという結論を引き出してしまった。確かに彼らがいうような事態は存在しているし、又それは疑いもなく現在の階級闘争の特徴の一つである。それは階級対立の非和解性の激化の表現であり、それがブルジョアジーに対する闘争である限りにおいて我々は道徳的非難を拒否し、断乎として支持する。だが重要なことは、「これらの行動を、掌握することのできない党の弱さ」（『パルチザン戦争』）である。そしてそれを「掌握する」ということは、武装闘争を先頭で担うことを意味するのではない。それはマルクス・レーニン主義では、自然発生性への拝跪という。武装闘争を実行するグループが生まれてくるのは、階級闘争においては避けられないことである、が、それと政治党派がそれを最高の闘争手段とみなすこととは全く別のことであり、後者は誤謬であるのみならず、犯罪的である。確認しなければならないのは、「プロレタリアートの党は、決してパルチザン戦争を唯一の闘争手段、または主要な闘争手段とさえみなすことはできないということ、この闘争手段は他の闘争手段に従属させられなければならず、主要な闘争手段に調和させられなければならず、社会主義の啓もう的な、また組織化する影響によってじゅん化されなければならないということ」（同）に他ならない。

赤報派がなぜ武装闘争を最高の闘争手段として定めるに至ったかは、「旧神奈川『左派』は、……二派と同様に急進主義的要求の延長上に革命戦争を考えていた」（『赤報』一八号）という表現から類推しうる。「革命戦争」ということは、歴史的に見ても六九年以降の「恒常的武装闘争」を継承するものとして語られてきた。すなわち、六九年に煮つまった階級対立が一定の軍事的対立として現われたことをベースとしている。神奈川「左派」はそこに革命の縮図を見て理論を構築していったし、一二・一八路線もそれと無縁ではなかった。階級対立の激化は不可避に軍事的対立をも引きおこす。だがそこから武装闘争が唯一の闘争手段であるという結論を導き出すのは、マルクス・レーニン主義者ではない。赤報派はそこから「革命戦争」路線を導き出し、それを正当化するためにブルジョアジーとプロレタリアートの非和解的対立を理論化し、また「国際反革命軍事体系」論をものにした。「八木君は、彼の『資本主義批判』を赤軍派の根本思想である『攻撃型階級闘争』の『正しい直感』を証明するための武器に使用してしまい、結果として攻撃型階級闘争と資本主義批判を折衷してしまっている」（『共産主義』一六号）という批判はそのまま赤報派に向けられなければならない。赤報派の諸君は、「資本主義批判は、……生きた生活の矛盾、資本主義と労働運動の生きた歴史の矛盾を把握することができる。しかしいうまでもないことだが、大衆は書物からではなくて生活から学ぶのであって、そのため、個々の人物または集団が資本主義的発展の、ときにはこの特色、ときにはあの特色を、資本主義的発展の、ときにはこの『教訓』、ときにはあの『教訓』を、絶えず論証し、一面的な理論に、一面的な戦術体系にまつりあげるということになる」（『ヨーロッパ労働運動の意見の相違』）というレーニンの言葉をかみしめる必要があろう。

赤報派は、「恒常的武装闘争」の敗北を教訓化した。その教訓から武装闘争に勝利しうる思想、組織の形成という一面的な結論を導き出し、一面的な戦術体系をまつりあげてしまった。こうして見れば、先に引用した文章は、内在的には第二次ブントの戦術は正しかったが目標が誤っていたという総括を意味し、赤報派の戦術は、結局、第二次ブントの戦術の延長上にあることを意味している。

だが、「政党の戦術というのは、その党の政治的態度、いいかえれば、その党の政治的活動の方向、方法のことである」（『二つの戦術』）。武装蜂起は、確かに最高の戦術といいうる。だが、それは武装闘争そのものの延長上に組織されるのではない。武装蜂起へ向けて、現在いかなる戦術を遂行するのかというところに党の戦術の核心はある。マルクス・レーニン主義は教条ではないが故に、社会的、政治的情勢の変化――行動の条件の変化――に従って、直接的な行動の任務の変化を要求する。「あらゆる国のあらゆる共産主義者が、戦術には最大限度の弾力性をもたす必要があるということを、いたるところでそれを徹底的に考えぬいて、自覚すること」（『共産主義における「左翼」小児病』）が大切であり、問題は厳として次のようにたてられている。すなわち、労働者階級の教育と組織化の重点を、全面的な宣伝、煽動、暴露におくのか、武装闘争におくのか、と。両方とも必要だ、などという輩は、現在の階級闘争の環がどこにあるのかを理解していない、浮動分子に他ならない。

②次に、例の「直接的生産過程では、所有の問題はでてこない」論からする召還主義を見ておこう。

赤報派はいう。「資本の生産過程の一契機たる直接的生産過程における資本の労働者に対する支配の質は、次のようなものである。(1)資本の労働に対する指揮　(2)強制労働　(3)生産手段への労働者の従属。このような内実は、確かに、階級闘争の一つの表現であり、また階級闘争の根拠の一つを形成しているが、しかし、こうした支配の質から形成される労働者の闘争は、所有をめぐる階級闘争を含むものではない」（『序章』一二号）。そして、「私有財産の廃止、共産主義の意識は、まさにレーニンのいう如く、『雇主との関係の外』から労働者の意識の内に持ち込まれねばならない」（同）とし、「所有をめぐる階級闘争＝資本主義の根拠が存在しない所に、階級闘争全体の根拠を求める」（同）と宇野、黒田を批判するのである。

まず、レーニンの当該箇所を見てみよう。そこではこういわれている。「階級的・政治的意識は、ただ外部からだけ、つまり経済闘争の外部から、労働者の雇主に対する関係の圏外からだけ、労働者にもたらすことができるのである。この知識をくみとってくることのできる唯一の領域は、全ての階級と層の国家及び政府に対する関係の領域、全ての階級の相互関係の領域である。……労働者に政治的知識をもたらすためには、社会民主主義者は、住民の全ての階級の中に入ってゆかなければならない。自分の軍隊の諸部隊を全ゆる方面に派遣しなければならない」（『なにをなすべきか』）。周知のように、ここでは、①政治闘争と経済闘争の結合＝単一の階級闘争という観点から、経済主義批判を通して、労働者階級の意識を発展させるためには、経済闘争の枠は狭いこと　②それは、「全ての階級の相互関係の領域」からくみとられるのであり、「全人民的な暴露を組織する党だけが、革命勢力の前衛となることができよう」（同）という結論が導き出されること　③これらは、「労働者階級が、政治的知識と政治的教育を最も必要としているということ」（同）のみならず、労働者階級の歴史的、社会的位置からして、「民主主義の為の前進闘士」ということを明らかにし、「プロレタリアートが最も緊切に必要としている事柄と、一般民主主義的運動が必要としている事柄との……結びつき」（同）を明らかにしていること、を確認しなければならない。

然るに赤報派は、①に関しては、ブルジョアジーとプロレタリアートの非和解的対立をアポリアとし、ブルジョアジーの支配と個々の資本家の支配を切断するという理論的誤謬から、生産点での闘争＝経済闘争、生産点外での闘争＝「所有をめぐる階級闘争」というシェーマを描き出すことによって、両者を切り離し、経済闘争によって労働者階級の団結を促進するという任務を放棄するのみならず、街頭「武装」闘争を美化するという自然発生性への拝跪を体現している。②に関しては、彼らは、「津久井論文は『プロレタリア党の三つの任務』の第一に、『過渡的要求綱領』の『全人民的』宣伝、煽動をあげているが、これが急進主義なのである」と語る。さしあたって、中核派が急進民主主義であるかどうかは問題ではない。重要なことは、赤報派が、全人民的宣伝、煽動を党の任務として掲げていることを急進民主主義として否定する立場をとっていることである。

レーニンはいう、「『共産主義者は凡ゆる革命的運動を支持する』ものであり、従って我々には、全人民の前で一般民主主義的任務を説き、強調する任務がある――しかも自分の社会主義信念をただの一瞬もつつみかくすことなしに――ことを行為の上で忘れるものは社会民主主義者ではない。……凡ゆる一般民主主義的問題を提起し、激化し、解決する点で誰よりも先んじなければならない自分の任務を忘れるものは社会民主主義者ではない」（『なにをなすべきか』）。

これがロシアの当時の情勢、即ち、ブルジョア民主主義革命に規定された任務であるとのたまう悪質な、「ロシア革命＝後進国革命」論者がいるかもしれない。では次のレーニンの言葉をあげよう、「階級を、ついでは大衆を教育し、訓練すること」（『共産主義における「左翼」小児病』）、「全階級が、つまり広汎な大衆が、あるいは前衛を直接支持する立場をとるか、あるいは少くとも前衛に対し好意ある中立を守って敵を支持することが完全にできないようになるかしないうちに、ただ前衛だけを決定的な闘いに投じることは単にたわけているばかりでなく、それは罪悪でもある」（同）、「国際的労働運動に

たずさわる階級意識ある前衛……の当面の任務は、広い大衆……をこの新しい状況に導いていくことであり、……自分の党だけでなくてこれらの大衆を指導してこの新しい立場に接近させ移行させることである」（同）、「革命に際して前衛の勝利を保証することのできる新しい立場に大衆を導くという任務は、左翼的な空論主義を一掃して、そのまちがいを完全に克服し、それから開放されないなら、これをはたすことはできない」（同）、等々。最後の言葉は、赤報派に対する直接の批判でもある。

更に、この②と密接に関連する③に関してはどうか？　赤報派は言う。「革命戦争の組織化の上で労働者階級がどのようにして民主主義闘争を利用すべきなのかを明らかにする」（『共産主義』一六号）と。又、「国際共産主義運動の経験に於て、『最小限綱領』は、政治的には民主共和制を要求するもの（経済的には資本主義的生産様式の根本的転覆に手をつけないままで実現可能な要求）としてあった」（同）と。

まず後の引用の方から片づけよう。赤報派は、民主共和制を要求するということを、前資本主義権力の打倒という意味に用いているようである。だとすれば、それはレーニンの曲解である。レーニンは、「我々がまだブルジョア制度の枠内で生活している間は、我々はまだこの枠を破壊しておらず、社会主義への移行の基本的な条件を実現しておらず、敵（＝ブルジョアジー）を粉砕しておらず、又、例え粉砕しても、絶滅していない間は、最小限綱領は必要である」（『党綱領の改正によせて』）という赤報派も知っている立場から、「ロシアに於けるブルジョア民主主義革命は終了した」と宣言した一七年四月に、最小限綱領の修正を党の任務とし、〇三年綱領のいわゆるロシアの特殊性を述べた部分を削除し、「ブルジョア議会主義的な民主共和制にとどめ」ず、「プロレタリア的＝農民的共和制」を目標とすることを掲げ、「ロシア民主共和国の憲法」による保証として最小限綱領を書きかえることを提案している。これから、赤報派の様に機械的に考えるのは誤りであることがわかる。要するに、赤報派の例の引用は、前の引用を補完するものでしかない。彼らは、「労働者は、民主主義闘争を利用することによって、そこでつちかった戦闘能力を党と革命軍の建設のために集中し、彼らの経済的解放の為に革命戦争を遂行し、プロレタリア独裁を樹立し、共産主義社会を実現しなければならない」（『共産主義』一六号）とは言うが、一度たりとも民主主義的要求を提出したこともなく、又、民主主義闘争を科学的社会主義の見地から指導したこともない。これが重要な点である。彼らは、「プロレタリアートは民主主義のための闘争によって社会主義の準備しなければ、この革命を遂行することはできない」（『マルクス主義の戯画と帝国主義的経済主義』）ということを知ってはいるが、決してこれを理解はしなかった。

まず、党の任務の一つは、「労働者の最も緊切な必要の充足の為の闘争に於て労働者を助力することによって、労働者の階級的自覚を発達させること」（『党綱領草案と解説』）である。すなわち、労働者は、「緊切な必要の充足の為の闘争」によって階級的自覚の出発点を形成するのである。のみならず、労働者階級は、他の被抑圧階級、階層の闘いを指導しうる地位にある。逆にいえば、その闘いを指導し、勝利することによって、凡ゆる抑圧を廃絶する能力を獲得するのである。しかも労働者は、書物からではなく、生活と実践によってそれを学んでいくのである。まさしく、「党の任務は、何かの当世流行の労

働者援助の手段を頭の中からあみだすことではなくて、労働者の運動に加わり、その運動の中に光明をもちこみ、労働者がすでにやり始めているこの闘争において、彼らを援助すること」（同）なのである。だが赤報派の考えは、経済闘争や民主主義闘争は、労働者にまかせ、自らは、「所有をめぐる階級闘争」を担うということに帰結している。これも又、自然発生性への拝跪の一種である。革命戦争を遂行し、権力を打倒すれば、経済闘争や民主主義闘争と結合しうる、あるいは、統合しうるというような頭の中での「結合」論こそ、彼らの小ブル・インテリ的性格をよく表現しているのだ。

だが、どんなに「共産主義運動と民主主義闘争の関係を明らかにし」（『共産主義』一六号）、それを一般的に叫んでみたとしても、そんなものは画にかいた餅であり、ひ肉の嘆をかこつことになりかねない。要するに赤報派は、経済主義や俗流民主主義を恐れるあまり、それを放り出すことで問題を「解決」せんとしたのだ。かくして赤報派は、マルクスによって、「彼はその煽動の実在的基礎を階級運動の現実的要素のうちに求めず、かえって、階級闘争に一定の教条的な処方に従ってそのなりゆきを命令しようと欲したプルードン流の誤謬に陥った」（『シュワイヤーの計画した労働組合について』）と批判されるのである。

③本章の最後に、赤報派が依拠している戦術観を検討しよう。

赤報派の戦術の最大の特徴は、「所有と労働の分離の法則」から直接に戦術を導き出すことである。すなわち、階級関係を固定的に把握することから、「一元的」な戦術を導き出すことである。このような戦術観の先駆者こそ、だれあろうスターリンその人に他ならない。スターリンは、「戦略は革命の一定の発展段階に基づくプロレタリアートの主要打撃の方向を決定することであり、それに応じてプロレタリア諸勢力の……配置計画をつくりあげることであり、革命の一定の段階の全期間を通じてこの計画を遂行するために闘うことである」（『レーニン主義の基礎』）、「戦術は、プロレタリアートの闘争形態と組織形態を、その交替、その組合せをとりあつかう」（同）というように、レーニンが、「ある社会の、例外なく全ての階級の相互関係の総体を客観的に考慮すること、従って、この社会の客観的発展段階をも、この社会と他の諸社会との相互関係をも考慮することだけが、先進的階級の正しい戦術の土台となりうる。この場合、全ての階級と全ての他の国が、静態においてではなく動態において、すなわち静止の状態においてではなく運動……において考察される。この運動そのものは、過去の観点からだけではなく、又、未来の観点からも考察され、しかもゆるやかな変化しか見ない進化論者の卑俗な考え方によってではなく、弁証法的に考察される」（『カール・マルクス』）と述べた観点を歪曲し、戦術を極めて機械的、力学主義的なものに解消した。赤報派の戦術観はスターリン戦術論への屈伏である。階級闘争は、ネットをへだててテニスをするようなものでは決してない。レーニンは、戦術を明らかにする際には、階級の相互関係の極めて客観的かつ具体的な評価を土台にした。そして又、すでに確認したように、「政党の戦術というのはその党の政治的態度、言いかえれば、その党の政治活動の性格、方向、方法のこと」であり、プロレタリアートの戦術一般に解消してしまうことは自らの前衛としての任務を放棄するに等しい。一般的な社会主義学説の宣伝や階級闘争の一般的な発展行程をプロレタリアートに示すのみならず、煽動が、プロレタリアートの政治的意識と革命的積極性を培養する全面的な政治的暴露が必要な

のである。

これらのことが理解できない赤報派は、「今日の具体的な階級相互関係の中に革命戦争の条件の新たな成熟を『発見』する努力を行ない、戦術を決定していかなくてはならない」（『赤報』一八号）と「革命戦争」を金科玉条とした上で、戦術を云々するという硬直した主観主義に陥いっている。

又、彼らはこうもいう。「政治路線の確立は、階級闘争の歴史的な教訓の中から学ばねばならない」（『共産主義』一六号）と。だが、戦術は階級闘争の歴史的教訓からのみ導き出されるものではないというのみならず、彼らの教訓が、「階級闘争に対するマルクス主義の原則」なる先験的真理から過去の思想家の思想を評価したものであることによって、彼らの主観主義を補完するものにすぎないのである。

赤報派の諸君は、「このような指導的な中央部は、どんな場合でも、闘争の戦術的原則を千篇一律化し、機械的に画一にし、同一視によってつくることはできないということ」（『共産主義における「左翼」小児病』）を知らねばならない。今日の情勢は、「その当時には、客観的な事態によって現実に前面に押し出されていたのは、宣伝と煽動、煽動と宣伝であった。その当時には蜂起の準備活動の試金石としてもちだすことのできたのは、週刊が理想であると思われていた全国政治新聞のための活動であった。その当時には、直接的な武装闘争のスローガンではなくて大衆的煽動というスローガンが、又一き主義のスローガンではなくて蜂起の社会的＝心理的な諸条件の準備というスローガンが、革命的社会民主主義者達の唯一のスローガンであった」（『二つの戦術』）という、まさにそのような時期であると我々は判断している。ここにこそ一切の核心が存在している。

III 組織上の問題について

まず、「経営細胞を基礎にした党組織とは結局のところ、労働組合多数派の形成、その議会代表部の形成を目的とせざるをえないのであり、武装闘争を組織できないばかりか職業革命家を軸としないことによって、マルクス主義の目的＝共産主義革命自体を、組合主義的、議会主義的、改良主義的に引き下げるものでしかない」（『共産主義』一六号）という赤報派のテーゼから検討しよう。我々も、「党の基礎組織＝経営細胞」というスターリン特有の機械的な思想には反対する。

だが、赤報派のいうようにそこから、「PB＝YB、RG＝政治軍隊」という結論を出すことはできない。ここでも、武装闘争ということが先験的に与えられていることを初めに明らかにしておく。

さて、賢明な諸君は、赤報派の「PB＝YB、RG＝政治軍隊」という結論が、その召還主義と密接に結びついていることを容易に理解しうるであろう。彼らにあっては、労働者の組織とは組合運動を行うだけのものであり、彼らの「外部注入」とは、文字通り外から革命戦争への参加を呼びかけるだけであり、労働運動と社会主義の結合ではなく、それを切断し、党は革命戦争をのみ担いうる組織であるだけなのである。

具体的に見てみよう。今我々の間で、革命家の組織を作ることから始めること、「非合法的基盤、非合法組織、非合法の社会民主主義的

活動を創造することによって、合法主義を補う必要がある」（『第二インターの崩壊』）ということについては一致がかちとられている。問題となっていることは、「政治闘争を陰謀にまでせしめる」（『なにをなすべきか』）のかどうか、「形態上」ではなく、「内容上」でも、陰謀的組織に落しこめるのかどうかということに他ならない。「ナヂェジヂン（赤報派と読め！）が混乱に陥いっているのは、この整然たる組織を与えられる軍隊が、何か民衆から自分自身を切り離すような仕事に従うように彼が想像しているためである。ところが、事実は、この軍隊はひたすら、全面的、包括的な政治的煽動に、すなわち、まさに民衆の自然的な破壊力と革命家の組織の意識的な破壊力とをあい近づけ、一体に融合させる仕事に従うのである」（同）。

赤報派が、「革命戦争」路線を採用している限り、ナヂェジヂンと同じような考えをもっているのであり、（ナヂェジヂンは、「正規軍」を否定し、赤報派はそれを肯定しているのだが）かつ、「突撃」を呼びかけていることを意味する。これらの考えは、「権力との関係で非合法下におかれている党活動は、レーニン時代のような『文書配布』ではなく、軍事活動であること、従って、非合法活動の内実は実践的に明らかである」（『共産主義』一六号）という思想に裏うちされている。

だが、「その綱領といわず戦術といわず、組織活動といわず、一切のものの重点を全人民的な政治的煽動におくものこそ、革命を見落す危険を犯すことが最も少ないのである」（『なにをなすべきか』）我々は、武装闘争による煽動を否定はしないが、それはあまりにも、宣伝、煽動、暴露の巾をせばめる。しかも、それを組織活動の中心にすることは、先に見た様な労働運動の切りすてともあいまって、不可避に、「一本づり」による組織化に帰着する、赤報派の諸君も御存知な様に、「強固な革命家の組織をしっかりとうちたてることから始めるなら、運動全体に確固さを保証し、社会民主主義的な目的をも、本来の組合主義的な目的をも、両方とも実現することができる」（同）ということ、「労働組合は……今や、労働者階級の中心組織たることを意識して、労働者階級の完全解放という大利益に於て行動することを学ばなければならぬ」（『第一インター決議』）ということを忘れてはならない。

しからずんば、労働運動と社会主義の結合など空語である。赤報派には、全ての領域に於て段階的な思想が見られる。何かが重要であるというとそれのみに自らの任務を狭めてしまうのである。ここでは、革命家の組織建設ということが、労働運動の指導、宣伝、煽動、暴露の任務を放棄せしめる結果をもたらした。これはある種の組織上の段階論である。

我々は、「あらゆる方面からいますぐ蜂起を準備すると同時に、自分の緊切な日常活動をただの一瞬間も忘れない、最も実践的な計画」（『なにをなすべきか』）として、全国的政治新聞を軸とすることは、今日、一層重要になっていると考えている。そして、労働者出身の革命家を輩出すること、これに全力を注がねばならない。その理由は、最早いうまでもないであろう。その為には、「労働者の中に」入っていかねばならない。

② 赤報派のもう一つの党派性は中央集権主義の思想である。結論からいうならば、赤報派がこれまで見てきたような路線を堅持するかぎり、彼らは、いうところの「平等共産主義秘密結社」にならざるをえ

にすることは、先に見た様な労働運動の切りすてともあいまって、不可避に、「一本づり」による組織化に帰着する、赤報派の諸君も御存知な様に、「強固な革命家の組織をしっかりとうちたてることから始めるなら、運動全体に確固さを保証し、社会民主主義的な目的をも、本来の組合主義的な目的をも、両方とも実現することができる」（同）ということ、「労働組合は……今や、労働者階級の中心組織たることを意識して、労働者階級の完全解放という大利益に於て行動することを学ばなければならぬ」（『第一インター決議』）ということを忘れてはならない。

しからずんば、労働運動と社会主義の結合など空語である。赤報派には、全ての領域に於て段階的な思想が見られる。何かが重要であるというとそれのみに自らの任務を狭めてしまうのである。ここでは、革命家の組織建設ということが、労働運動の指導、宣伝、煽動、暴露の任務を放棄せしめる結果をもたらした。これはある種の組織上の段階論である。

我々は、「あらゆる方面からいますぐ蜂起を準備すると同時に、自分の緊切な日常活動をただの一瞬間も忘れない、最も実践的な計画」（『なにをなすべきか』）として、全国的政治新聞を軸とすることは、今日、一層重要になっていると考えている。そして、労働者出身の革命家を輩出すること、これに全力を注がねばならない。その理由は、最早いうまでもないであろう。その為には、「労働者の中に」入っていかねばならない。

② 赤報派のもう一つの党派性は中央集権主義の思想である。結論からいうならば、赤報派がこれまで見てきたような路線を堅持するかぎり、彼らは、いうところの「平等共産主義秘密結社」にならざるをえないことである。それは、「秘密の集中と運動の機能の分散」ということを何度いっても、彼らが、「PB＝YB、RG＝政治軍隊」として事実上、これを党組織としている限ぎり、上記のことは不可避である。「運動の機能の分散」は、所詮、武装闘争を行う際の機能の分散にすぎず、そのことによって党の権力からの攻撃による崩壊からの防衛以上にでることはありえない。そして、その規律は、一二・一八路線下でもそうであったように（詳しいことはさけるが）武装闘争を基準にした各メンバーの「団結」を保持することが目的とされてしまうのである。レーニンは、プロレタリアートの革命党の規律を実現する条件とし、①「プロレタリア前衛の意識、革命に対する献身、その忍耐、自己犠牲、英雄主義」 ②「広範な勤労者大衆と結びつき、接近し、とけあう能力」 ③「これらの前衛が行う政治指導の正しさ……政治的戦略と戦術の正しさ」（『共産主義における「左翼」小児病』）としている。かくのごとく、規律は戦術にも規定される。

遊撃戦を戦術とする赤報派は、不可避にそれに見合った規律、戦闘団主義的規律を必要とする。もはや多言は要しないであろう。

ただ、「党組織の欠陥からは……権力問題に於ける日和見主義が不断に生まれてこざるをえない」（『共産主義』一六号）ということにふれておこう。確かにこれは、二派の批判として提出されてはいるが、その内実は普遍的な思想を表現している。これは循還論法の一つである。先に我々は、「正しい資本主義批判に基づく、階級闘争に対するマルクス主義の原則」が、党の立脚点であると聞かされた。ここでは、正しい党組織が、正しい権力問題の把握をもたらすと聞かされる。周知のように、権力問題とは革命の根本問題であるからして、階級闘争に対するマルクス主義の原則の中心をなすものである。

だとすればこうなる。正しい原則が正しい党をもたらし、また、正しい党が正しい原則をもたらすと。何も我々はこのことによって矮小な批判をするつもりはない。ただこの一例からも赤報派の理論は、党派闘争・理論闘争のためだけに整合的につくりあげられたものに他ならず、更にそれを、自らのみが先験的に正しいと確信しているような党派闘争主義をかいまみることができることだけを述べておく。

③最後に、「革命戦争派の統一」のことについて簡単にふれておこう。

第一に、このような観念的基準で潮流わけすることに反対である。レーニンが潮流を問題にする時は、「革命的＝国際主義的潮流」として、綱領、戦術、組織総体を含めて政治的態度の問題として述べている。

しかし「革命戦争派」というのは、戦術上の態度以上をでるものではない。あらかじめこのような枠をもうけて、その上で、綱領上、組織上の論争ー止揚という方向は、自らの政治的態度を狭めるものであると我々は考える。確かに戦術の統一は重要なことである。また「今日の革命戦争派の再編の事業は、何よりも組織問題における党派闘争によってのみ前進させうる」（同前）という赤報派の主張も、「程度の差こそあれ、この種の見解にくみする人々（経済主義者）が党組織に参加することは、――彼らが党大会と党規約を承認して、党規律に完全に服することを必要条件として、――許される」（『二つの戦術』）ということを学び、サークル根性を克服するという意味において重要である。だが、統合の際には、綱領上、戦術上、組織上の統一が必要なのである。このことに関して我々は徹底して厳密でなければならな

い。

第二に、一二・一八路線の「二派止揚八派解体」についてである。赤報派は今でもこの立場を堅持しているようである。これは（当時の我々を含めて）三派が党で、八派は大衆である、というような考えに裏うちされていた。そのことによって、我々の位置が相対化されてしまい、具体的な労働者大衆の運動と切断されたところで統合が語られるような傾向に陥ったのである。従って党派闘争主義を色こくしたのである。

第三に、赤報派は「結合の前の分離」という立場をとっているようである。我々も現在、基本的にはそのような立場に立つ。だがそのことを理由に、理論作業にのみ活動をしぼることに関しては反対である。いうまでもないことであるが、自分で自分のことを前衛と名のってみたところで、それで前衛になりうるものではない。個々の政治的、経済的、社会的問題に対して、マルクス・レーニン主義的暴露を行い、労働者階級の諸運動の指針を与えることによって、初めて前衛たる条件を有するのである。これらのことに関して、「八派的意味での『情勢分析』や『戦術の提起』」（『序章』一四号）などといわずに、真剣に考えるべきである。

おわりに

以上みてきたように、赤報派が示す小ブル的革命性は、「労働運動の日和見主義的な罪悪に対する一種の罰」（『共産主義における「左翼小児病」』）である。一時期彼らと肩を並べていたことのある我々は、彼らの政治主張が、それまでの日共、革マル等々の社会排外主義、総体としての合法主義に対する批判と克服を元にしていることを知っている。だが今やそれをも克服しなければならない時期にきている。我々は、七一年十月三日の分裂に際して、我々が有していた弱点を明らかにするのにやぶさかでない。「公然と誤りを認め、その原因を暴き、その誤りを生んだ情勢を分析し、誤りを改める手段を注意深く討議すること――これこそ、まじめな政党の目印であり、これこそその党が自分の義務を遂行することであり、これこそ、――階級を、ついでは大衆をも教育して訓練することである」（同）からである。そして我々は、赤報派の諸君にも「烽火派」が逃亡した、とか、神奈川左派が脱走した、とかですますのではなく、一二・一八路線が、そのようなことを生み出す根拠をはらんでいたことに関して、真剣に総括することを勧める。

最後に次のレーニンの言葉を引用しておこう。「私はドイツの『左翼』社会主義者の新聞と、一般社会主義者の新聞を見ることができたが、私の知りえた限りでは、前者の方が、後者よりも大衆の中でよりよく煽動することができるという長所をもっている。……これは一部分は、次のような事情、つまり革命のときや、革命のなまなましい思い出が残っている時には、彼らのように否定『一本やりの』戦術が大衆にうけやすいという事情によるのである。しかしだからといってこのことは、右の戦術が正しいという根拠にはならない、いずれにしても、共産党が実際に、革命的な階級、プロレタリアートの前衛となり、先頭部隊になろうとのぞむなら、また、プロレタリア的な大衆だけではなく、非プロレタリア的な、勤労被搾取者大衆をひろく指導したいとのぞむなら、都市の工場『街』にとっても、農村にとっても、最も近づき易い、最もわかり易い、又極めてはっきりした、いきいきしたやり方で、宣伝、組織、煽動ができなければならない」（同前）。

革命戦争路線の枠内で資本主義の解釈論争に終始する 赤軍プロ革派、ML派を批判する

「赤軍」（プロ革派）再刊準備一号「政治・組織報告」批判

〈我々の綱領と組織の基本的性格について〉

－弁証法的唯物論・史的唯物論－　略

－資本主義と科学的共産主義－

資本制生産の最大の特質を、階級的、実体的に賃金奴隷制として規定しようとしている。我々は、この規定について、剰余価値の搾取という資本家の生産における人格化された資本としての規定的要求を即自的に表現したものであり、従って最大の特質という意味では、価値論－剰余価値論として統一的に把握されねばならないと考える。

以上の点を前提としてみるとき、前述した問題は、次の叙述となって露呈している。「資本制は、生産における社会化、国際プロレタリアートを生みだすことによって」「資本主義のもとで、社会主義を組織、逆転する能力が与えられる」「又、各国プロレタリアートは、資本に対する共通の地位からして、又、資本の無限的利潤追求戦に対して犠牲になり、根本的に対立している関係にあるが故にプロレタリアートは祖国をもたず、生来から国際的性格をもっていること」、これは、資本主義の本質を依然として実現条件との関係でのべることによって、資本主義は、国民経済、民族国家の形成によって総括されてはじめてその世界史的登場が可能になったという資本主義成立に関する基本的事実すらも洗い流すことになっていること、あるいは、かつて叛旗派が夢想した共同体史観によって資本主義下においても、部分的に社会革命が達成できるかのごとき、資本主義批判における小ブル的な反発をも想起せしめる〃逆転論〃であり、かつ又、史的唯物論とマルクス主義経済学の混同であるといわねばならない。

科学的共産主義の項に関しては、綱領的主張として資本主義の開明

的側面としての社会主義の物質的条件を可能としたことを必ず示すべきである。

さて、資本主義から社会主義・共産主義への移行には過渡期が存在すること、かつ、社会主義・共産主義には本来より世界社会主義・世界共産主義として、従って、過渡期＝世界過渡期＝世界プロ独期として規定しているが、こうした主張とは裏腹に、一国、数ヵ国プロ独・社会主義を、「根拠地国家と継続革命を条件」としても肯定することはできない。スターリン主義下での「一国社会主義」とは、社会主義下階級闘争の肯定、資本主義復活の危険性と自覚的に闘争している点で、例えば中国は区別されねばならないが、それを「社会主義」として綱領に肯定することは、逆に、ソ連型「社会主義」との区別があいまいになり、結局は、過渡期社会における中、ソ、朝鮮等の歴史的経験を、一国独自の地理的民族的属性の結果として、その普遍的な意義をおとしこめることになるのではないか。

党の必然性、不可避性について、彼らは黒寛「自己解放の自覚」を強調することで論証しようとしているが、これは第二次ブントでは、プロレタリアートの即自的階級意識を即自－対自的なそれにまでたかめるものとして、革命党がローザ、ルカーチに依拠しつつ、いわゆる「党は過程の意識」、「媒介の党」として位置づけられたのよりはるかに後退しているものである。一方でのレーニン教条主義の外部注入論と他方での「自覚の論理」は決して結びつかないのであって、外部注入論は、階級意識の引きあげというところに主眼があったのではなくそのような媒介として党を位置づけたところに、運動主義的根本的弱点があるとはいえ、第一次共産同解体後の革マル主義の流入と闘争することができたのである。科学的社会主義とは何かしらインテリゲンチャの認識の優位性によってではなく、種々のブルジョアイデオロギーや小ブルイデオロギーの流入と闘うこと、あるいはそれを立脚点とする政党と闘いうる政治理論の科学性、人民との結合度などの対象化されたものとして主張すべきなのであって、〃区別〃するところにあるのではない。

－帝国主義とプロレタリア・国家－　略

－過渡期世界とプロレタリア・国家・党－

この項は、いわゆる『赤軍』№4での三つのテーゼ「ⓐ階級闘争の世界史的攻撃段階（つまり世界革命戦争の形態をもつ世界プロ独運動の段階）－世界武装プロへの到達テーゼ、ⓑ現代帝国主義の恒常的な国内的、国際的侵略抑圧反革命戦争となし崩しファシズムの階級危機という特質と、これに規定された発展途上国の民族解放－社会主義、先進国の前段階決戦＝攻撃的蜂起＝プロ独社会主義戦争、プロ国家の根拠地化と共産主義継続革命の必然性とその攻撃性、及びこの三プロック階級闘争の結合としての世界性、攻撃性等として位置づけられる逆制約の能動のテーゼ、ⓒ過渡期世界のかかる特質を止揚するものとしての世界プロ独共産主義革命（世界同時革命）－世界プロ独－世界党－世界赤軍－世界革命戦線」（『論叢』№6）の基本的立場を「防衛、発展」させて展開されている。その特質は、世界武装プロ論が後景に退き、代って、蓄積論を導入することで、その「史的唯物論の悪しき体系化」をなしくずし的に修正している点である。

ロシア革命の実現－国際プロは「防衛から攻撃的段階に到達し、プロとプロの階級関係の世界史的変化の中で帝国主義は危機を解決するため、ワイマール、ベルサイユ帝国主義反革命体制構築（資本過剰を

一国的国際国内蓄積構造＝反革命経済体制）↓多国的国内蓄積構造（IMF－GATT体制）↓多国籍国際・国内蓄積構造（超国際独占体）↓別の蓄積（資本の）体制を提案できない↓この蓄積構造と国際反革命体制の再編強化以外に延命の道はない」、とされている。いかにもかつての「一向過渡期世界論」の根本的欠陥が資本主義の〃原理〃的認識の欠落にあるとはいえ、〃蓄積構造〃の過渡期世界における歴史的転変で素描することでそれを克服することには極めて大きな疑問があり、その内容としても要は、ブロック経済、世界経済体制の成立、超国際独占体の各段階における資本蓄積の型を、いわば類型化しているにすぎないのであって、その意味では、過渡期世界における帝国主義の運動法則を内在的に位置づけるものたりえていないといわねばならない。それと同時に、いわゆる「第三世界」論を積極的に主張するものとして、この蓄積構造の矛盾が形成されたとして、帝国主義相互の不均等発展が事実上軽視されているが、戦後世界体制－ヤルタ・ジュネーブ体制を根底的に覆えした民族解放闘争の前進と相まってのIMF－GATT体制の最終的な崩壊、そして今日におけるいわゆる石油、資源問題を主軸とする「第三世界の台頭、天下大動乱の時代の到来が示している事実は、単に「第三世界」が、国際帝国主義の矛盾の転化、犠牲となっているという常識を踏みこえ、いわばオイルダラーの還流という形で国際帝国主義と金融的に結びつかざるをえず、一層内在的結合を深めていることを示しており、不均等発展と並列して矛盾が激成されているのではなく、不均等発展をより強めるものとしての「第三世界」との同時的な矛盾の爆発こそ今日の過渡期世界における〃危機〃なのである。

－日本帝国主義とプロレタリア・国家－

米帝従属帝国主義として日本帝国主義を規定しているが、その理由は、独自の勢力圏を構築できない〃日帝弱い論〃に求められている。だがいわゆる従属・自立論争の歴史的総括、日共の従属論についての評価が欠落していること、本文に即していえば、相対的過剰人口形成、労働者の搾取、抑圧、隷属、無権利の促進、あるいは七〇年代革命勢力の実体的な登場と金融寡頭制支配の再編－強化は語られるが、むしろ日本帝国主義の国際的位置とその中での再編の動向こそ、従属規定の証左とされねばならないのではないか。

次に政治戦略について「戦後ブルジョア独裁の民主主義形態たる憲法体制からのブルジョア独裁のむきだしのファシズムへのなし崩し的権力再編の追求」と規定している。そもそもこうしたとらえ方は、戦後ブルジョア独裁が、アメリカ占領軍の反革命的援助の下に沖縄をアメリカ帝国主義への軍事占領に委ね、「本土」での日米安保体制として貫徹されていたこと、その意味では、むき出しの暴力的支配体制を伴っていたことを軽視することである。

今日の危機は、「純粋ファシズム」の前段的様相を呈している「なし崩しファシズムの混合体制」として、危機を権力再編の動向や、あろうことか「ソ連社帝の反革命干渉を利用」などという要件から推論するのではなく、階級及び階級相互の現在と過去の厳密な総括にたって規定すべきなのである。このことを抜きにした革命戦争路線よりする「世界＝日本革命戦争の持久的対じ段階に照応する権力形態」といったところで、それは空虚な概念のこねくり回しにしかならないだろう。

－日本（世界）革命の基本性格－

まず、日本革命と世界革命との関連が厳密に把えられていず、綱領的見地よりすれば、本文の中で一国社会主義を認めている以上、日本（世界）等という訳のわからない規定でゴマカすのではなく、はっきりと総和革命を明言されんことを要求する。このような混乱は、生産手段の共有化＝社会主義なる不明確な規定に依っているのであって、例えば、中国共産党は、国家的所有と集団的所有として社会主義の所有形態を具体的に規定しており、従って、全人民的所有にむけた継続革命、「社会主義」下階級闘争を位置づけることができるのである。

これは、中国共産党の如き内実を欠いた場合、「世界プロ独への到達が長びき」などという未来の予言で「一国社会主義」を主張してみたり、米帝の反革命的介入はともかくとして、ソ修＝社帝の反革命的干渉を予知してみてもはじまらないのではないか。「反日帝、反米帝、反社帝の世界共産主義（社会主義）を展望し、世界プロ独を具体的射呈とするプロ独、社会主義革命」、この日本革命の規定は、敵＝日本帝国主義と日本革命、蜂起の実現と日本革命の国際的性格とが混同されているのであり、マル青同の反米帝、反社帝と五〇歩百歩にすぎない。ところが奇異なことには、階級敵に、好意的に解釈しても、反社帝の対象として日共以外に挙げられていないことはいか様に考えたらよいのだろうか。

又、「本隊、推進力、同盟軍」というあいもかわらぬ階級配置論階級実体論であり、これでは「毛沢東教条主義」の「小ブル民主主義」と一体どこがどう違うのか明らかにしてほしいものである。

－現代過渡期世界の革命の基本性格－

いまや完全にドグマ化している、マルクス－「恐慌革命論」、レーニン－「帝国主義戦争を内乱に」という資本主義の歴史的発展段階に照応して、あるいはその矛盾の発現形態から一元的に革命論を定式化する貧しい抽象から解放されるべきであり、マルクスであれば共産主義者同盟↓第一インター、レーニンならば、ボルシエビキ↓第二インター↓第三インターの建設、革命党建設をめぐる国内－国際的党派闘争を一体的に彼らの革命的実践の歴史的継承と、その発展の見地に立つべきである。

多国的・国際的・国内蓄積構造によるプロ人民と「第三世界」人民への矛盾の犠牲的転嫁故、恐慌や帝国主義間戦争は回避され、「平時から革命戦争と内乱」が可能であると主張しているが、恐慌が回避されるというのは、例えば、大内の如き宇野右派の国独資段階での政策によって帝国主義の矛盾の処理は可能である、と極似したものであり、そもそも、多国的・国際的・国内蓄積構造が例えば、国際通貨体制をさすとすれば、それは帝国主義の政策にすぎず、あるいは、この体制の崩壊以降の様々なびほう策は、まさに政策そのものである。

こうした帝国主義の内在的法則とは無関係に、世界社会主義革命戦争を空語的に主張しても一切たわ言であり、自己の主観主義の露呈にすぎない。かりに、彼らの言に従ったとしても、民族解放戦争は、様々な色あいの違いを含むのであって、「小ブル民族主義」を克服せんとするならば、少なくともこの点に留意してほしいものだ。革命左派批判の成果は、一体どこに生かされているのか。少しばかりマルクス主義に忠実であろうとして、唐突に「世界共産主義の物質的基礎」を云々しても、何か色あせてしまっていると感じるのは、何も我々だけ

ではあるまい。

－現代メンシエビキ・小ブル日和見主義批判－

蓄積構造が革命戦争として発展し、その特質が党組織の基本性格を決定する、とは一体どういうことなのか？　さて、その内実である。

現代メンシエビキ派＝待期主義的蜂起、及び、蜂起・ソビエト派＝新左翼運動総体である。かっての革命戦争路線からの潮流規定を「深化」させ、自己の小ブル性をマルクス・レーニン主義で粉飾し、現代メンシエビキなる革命戦争上での潮流規定が行なわれた!?

さて、現代メンシエビキ派とは、「彼らのマルクス・レーニン主義は現実に全くそぐわないものであり、マルクス・レーニン主義を発展させず、これを講壇化、俗流化する教条主義と修正主義のアマルガムたる俗流マルクス主義であり、彼らはプロレタリアートの小ブル性・自然発生性に拝跪する」ものらしいが、これは社帝日共にも、反革命革マルにも、社民にも通用し（完ぺきにだ）、新左翼運動の日本階級闘争上での歴史的正当性をおよそ主張しえない、何の正当性もない前代未聞の規定である。我々は、かかるマルクス・レーニン主義の俗流化を決して容認することはできない。

この現代メンシエビキ派の対極として、軍事至上主義の小ブル革命戦争派＝ゲリラ派が存在するとして、その典型を革命左派に求めている。このことによって、かっての赤軍派の歴史的位置、この潮流規定のどこに位置していたのか少しも明確でないのだが、それを小ブル革命戦争派批判－社会主義革命戦争派を前面に押し出すことによって、何とか位置づけんとして、珍奇な革命理論、主観主義的意味付与を行なっている。

ここでは、革命左派の毛沢東教条主義批判のあまり、中国共産党のマルクス主義的性格を、かっての一二・一八路線下での鈴本君の中国共産党＝ナロードニキ論よろしく否定しさり、自己のマルクス主義的超原則性を誇示しているのだ。「中国共産党が農民を主体とする（少数のプロレタリアートとその指導部共産党によって指導されていたが）民族民主革命であり、そのイデオロギーは必ずしもプロレタリア思想、マルクス主義を必要不可決としていず、封建経済が、自給自足の分割経済であり、封建体制の粉砕は、空間的に地方割拠方式で行われ、割拠すれば、急進民主主義の自営農を主体とする資本主義経済を創出し、これを基礎にして、農民革命軍たる正規軍が編成され、党－農民革命軍－農民資本主義経済（解放区）の陣型が形成され、陣取り合戦の農民から、都市への侵攻方式が可能であったという中国革命の法則（毛沢東思想）」と、のたまうのである。

中国共産党は、二二年結成以降、スターリンコミンテルンの指導の下、李立三、王明路線の「左」右の日和見主義路線によって、都市に於ける革命根拠地を喪失し、又、この日和見主義との闘いの中で、プロレタリア社会主義革命の一環としての民族解放民主主義革命であること、コミンテルン二回大会テーゼを援用し、革命軍－根拠地建設一体となって、国民党、軍閥、日本帝国主義との困難な闘いを統一戦線を駆使しつつ、中国革命を勝利に導くためには、中国共産党がマルクス主義を不可欠としていたこと、中国経済を一面的に封建経済とは規定しえず、四大財閥を中心とする大資本、中小民間資本などの、部分的ではあれ資本主義経済が存在していたこと、などは彼らには全く無視されているのであり、いわゆる解放区は、井岡山、瑞金ソビエト、

内戦下での土地革命の徹底化等の事実を考えると、農民資本主義経済とかいう奇妙な資本主義経済ではなく、現実的には社会主義建設に向けた中国共産党－人民解放軍（紅軍）の指導下での過渡期社会の建設の第一歩として把えるべきであり、単純に農村から都市への陣取り合戦ではなく、民族解放－抗日統一戦線の成立（辛亥革命以降の国民党政権の中央集権国家支配の未貫徹、軍閥の台頭、日帝の侵略）という条件下で、「革命の一国性と世界性、連続性と段階性」とを創造的に発展させたことなどの中国革命の歴史的経験を、党－軍－解放区の戦争路線にのみ切りちぢめて、仏派なみに総括することは、一体何ということか?!

－プロレタリア社会主義革命戦争の特質－

特質の最大のものは、言辞としてのマルクス主義の正当性、革命性を無内容に羅列しているところにあるのではなく、資本主義批判に於て小ブル的であり、従って、党（軍）＝共産主義の母体論に屈伏し、かつ革命戦争路線が、社会革命主義的な代物に転落していることである。

「権力闘争は、資本主義の経済・社会・政治・思想やその暴力装置の体系を解体し、プロレタリア独裁、社会主義の経済・社会・政治・思想・暴力を対抗的に創出すること」「この権力闘争が長期に持続するのが革命戦争であり、瞬間的に制限され、短いのが蜂起」日本の権力闘争は長期にわたり、そのため「赤軍が根拠地を独立採算的に、自家製造する能力」が必要、だが、民族＝農民戦争型の解放区のように「公然たる割拠経済」はできないが、全能の党－軍の正しい指導路線があれば、プロ独運動の中でプロ独経済が潜行的に形成される、というものである。先の資本主義下での〃逆転論〃は、今や全面開花した!

我々は、資本主義社会の下では、存在が意識を規定すること、ある時代の思想は支配階級の思想が支配的であるという意味で、様々なブルジョア、小ブルイデオロギーによってとりまかれている。ある時代の意識は、その時代の階級的現実の反映であり、未だ資本主義社会を打倒しえていない以上、実現されていない未来に身をおいて、後代の平均的意識におしこむことはできないのであって、資本主義社会において何かしら共産主義的な社会的諸関係が成立するかのごとく錯覚するのは、全くの小ブル的願望にすぎない。どのように強弁し、全能の党・軍の正しい指導路線を持ちだそうとも、それは不可能であり、そもそも〃正しい〃ということを先験的に定式化し、それから現実にあてはめていくのは、全くの非マルクス主義でありカント主義に他ならない。

このことをあいまいにし、「第三世界」の民族解放や、プロ独国家の継続革命に救いを求めたり、あるいは「経済活動」「生産＝労働活動」と言いかえても、事の本質は一切かわりはしないのである。

－プロレタリア革命党の基本性格－

プロレタリア社会主義革命戦争のプロ党－プロ革軍＝赤軍－解放区＝根拠地の陣型によって規定される革命党の性格は、彼らプロ革派にあっては、世界＝日本革命戦争が開始されているという階級闘争の認識にたっているが故に、単にプロレタリアートの階級形成を党建設の同心円的拡大に置換していくという革マル主義的なそれに転落している。

従って、〈原則綱領－実践綱領〉という綱領問題の提起も、原則綱領はプロレタリアート解放に関する学説としてのマルクス主義に、実践綱領は権力闘争（武装闘争）と最小限闘争という闘争形態に還元されてしまい、プロレタリアートを支配階級にたかめる革命党の戦術までたかめあげるものとして提出されていないのである。

「党としての立場や党建設の観点に立」つや、「プロレタリア社会主義革命戦争＝建軍攻撃的蜂起の陣型を前進させる観点に立」つといっても、それは「立場、方法、観点」の確認にすぎない。又、世界党として自各国党をその綱領上主張しているが、国際共産主義運動の第三インター、とりわけスタ・ブハ綱領に対する態度や、かつての世界革命－世界党－世界赤軍－世界革命戦線の総括との関連があいまいであり、その矛盾を各国革命の「同質性と有機的統一性、単一性と連関」「不均等発展、相互矛盾」という弁証法的言辞で粉飾しているにすぎない。

以上より、彼らが党の組織性格の規定に終始するスローガンに帰結するのは、理の当然といわねばならないのである。

＝おわりに＝

彼らプロ革派の主張は、思想がマルクス・レーニン主義の認識に昇華され、綱領が権力問題とされ、ここで旧来の赤軍派、過渡期世界論の教条主義的防衛と、「第三世界」論－中国共産党評価と、蓄積論をもっての内的補強が計られ、更にプロレタリア社会主義革命戦争の特質から陣型－組織論が位置づけられ、認識の優位性をもってする党のマルクス主義性が「理論闘争主義的に」強調されている。

従って、思想－綱領－組織－戦術がばらばらで一体として展開されていず、彼らが思想問題として接近を試みたマルクス・レーニン主義の主体的把握が、その実践性においてではなく、常に認識と超原則主義的主張に置換され、革命戦争路線なる政治的急進主義の陣営にとどまっているのである。政治主張上での散見されるマルクス・レーニン主義からのはなはだしい逸脱は、その証左である。

我々は、共産主義者同盟の理論と実践の総体を、部分ではなく、その全体性において総括すべきであると考える。そのことが今一番要請されているのだから。

「赤軍」M・L派批判

（Ⅰ） 綱領の原則的部分について

わが赤軍ML派は、次のように〈プロ革〉派批判を行っている。

第一に、「プロレタリアートが、共産主義社会を実現する社会革命を実行できる革命的階級である根拠を、資本主義の下で搾取され、支配されている階級であることに求めており、社会化した生産力を代表する階級であることに求めていない」（『ML主義』創刊号）。

第二に、「剰余価値の生産＝剰余労働の資本主義的搾取について、その状態である所の直接的生産過程、つまり、工場内におけるプロレタリアートの奴隷状態を暴露することに重点を置いている。その原因であるところの、全体的、根本的な生産関係＝階級関係、つまり、生産手段から分離したプロレタリアートが経済的に従属していることを暴露することに重点を置いていない」（同）。それ故に、「〈プロ革〉

派は、プロレタリアートの大衆の自然発生性に拝跪する経済主義となる。……つまり、直接的生産過程＝工場内における奴隷状態に反抗するプロレタリアートの闘争の発展、爆発の延長上に、生産手段を私有するブルジョアジーに生産手段から分離したプロレタリアートが経済的に隷属している全体的、根本的な生産関係＝階級関係を変革するプロレタリアートの闘争を展望している。しかし前者は自然発生的な闘争であり、実際には資本主義の枠内で搾取を軽減する闘争、すなわち経済闘争であり、その政治的反映としての民主主義的政治闘争、すなわちブルジョア独裁の枠内で、個々の政策に反対する闘争である。そして後者は、社会主義社会を実現する社会革命であり、ブルジョア独裁＝資本主義を打倒、廃止する社会主義革命（プロレタリア独裁を樹立する政治闘争）である。〃だからこれは、プロレタリアートの経済闘争や民主主義的政治闘争の発展、爆発の延長上に社会主義革命（プロレタリア独裁を樹立する政治闘争）を展望することになる。そしてこれは、経済主義であり、実際にはプロレタリアートの闘争を経済闘争や民主主義的政治闘争にとどめてしまう」（同）。

以上引用してきた点がＭＬ派によるプロ革派批判の核心であるので以下詳しく検討することにする。

さて我々も、塩見君が赤報派（一二・一八）批判として、「資本主義的生産様式は、商品経済社会であり、マルクスの指摘する如く、全ての商品は使用価値と価値の契機で構成され、商品にあらわされる労働は全て資本の下での労働であり、〃生きた労働〃など存在せず可変資本としての労働の消費を意味し、価値や資本が人と人との社会的関係の経済的表現形態である以上、それは資本の統制下での奴隷労働とならざるをえない」（『論叢』№6）と述べる点に、彼の陽性的な講座派的思考があると考えているが、これをＭＬ派の諸君のごとく、「労働の二重性を否定する故に資本制的生産様式に対する労働者の叛乱がまったく理解できず、労働者に奴隷労働の状態に我慢する様に説教しているにすぎない」（『通信』Ｐ四七）とか、「マルクスは労働の二重性を否定し、この様に労働の二面性を説き、プロレタリアートの叛乱の不可避性とその限界を措定する」（同）という様な観点から、それ故に「一向は労働者の自然発生性を全く否定するということ、あるいは過少評価に陥っているということ」（同Ｐ四八）と結論づけることは認めることができない。

ＭＬ派は、「労働の二重性を否定する故に資本主義的生産様式に対する労働者の叛乱」というふうに、もっぱら「労働者の叛乱」や「プロレタリアートの叛乱の不可避性とその限界」を解明するものとしてマルクスの労働過程論を理解しているようである。

マルクスは、『直接的生産過程の諸結果』の中で、「労働者に対する資本の支配は、人間に対する物の支配、生産者に対する生産物の支配なのである。というのは、労働者に対する支配の手段となる商品は、実際、生産過定の単なる結果であり、その生産過程の生産物だからである。これは、観念形態の領域に於て、宗教の中にあらわれる関係、すなわち主体の客体への転倒、およびその逆の転倒という関係と全く同じ関係が物質的生産において、現実の社会的生産過程において現われ出るものである。歴史的にみれば、このような転倒は、富そのものの創造を、すなわちただそれだけが自由な人間社会の物質的基礎を形成しうる社会的労働、容赦ない生産力の創造を、多数者の犠牲において強制するための必然的な通過点としてあらわれる。この様な対立的

形態を通らなければならないのは、丁度人間が自分の精神的諸力をまず第一に、自分に対立する独立的な諸力として、宗教的に形づくらなければならないのと同じである。それは人間自身の疎外過程である。この点では、労働者は初めは資本家よりも高い立場にある。というのは、資本家はこの疎外過程に根を下していて、この過程の中で絶対的な満足をみい出すのであるが、労働者はこの過程の特性として、初めからこの過程に対して反逆的な関係に立っていて、この過程を奴隷化の過程として感ずるという限りにおいてそうなのである」と、述べている。

ところが、マルクスは「労働の二重性を否定し」たと思いこんでいるＭＬ派は、マルクスが引き続いて、「しかし労働過程そのものは、ただ価値増殖過程の手段として現われるだけであって、それはちょうど生産物の使用価値がただ生産物の交換価値の担い手として現われるだけなのと同じことである。だから資本の自己増殖＝剰余価値の創造＝は、資本家の規定的な、支配的な、圧倒的な目的であり、彼の行動の絶対的な動因と内実である。それは実際、貨幣蓄蔵者の動因と目的が合理化されたものでしかない。その内容は、……資本家を、たとえ別の面から見ての、反対の極においてのことであるにせよ、労働者と全く同様に、資本関係への隷属状態のもとの現われなのである。」（同）「労働者が暮しを立てていくために、自分の労働能力の処分権を、自分の労働を売るという本源的な関係は必要な準備であり、条件であって、それ自体として、それ自身のうちに、いま現実の生産過程で展開されている関係を含んでいる。すなわち、その関係の中では、商品所有者は資本家に人格化された資本になり、労働者は単なる資本のための労働の人格化になるという関係を含んでいる。この両者が外見上互に商品所有者として相対するところの第一の関係は、資本主義的生産過程の前提であるが、……資本主義的生産過程の結果であり、所産でもある。しかし、それから後ではこの二つの行為は区別されなければならない。第一の行為は流通に属する。第二の行為は、第一の行為を基礎として現実の生産過程においてはじめて展開される」（同）。つまり、「生産過程は労働過程と価値増殖過程との直接的統一体であって、それは、この過程の結果である商品が使用価値と交換価値との直接的統一体であるのと同様である。しかし労働過程は、ただ価値増殖過程の手段でしかないのであって、価値増殖過程はそれ自身として本質的に剰余価値の生産、すなわち不払い労働の対象化の過程である。これによって、生産過程の全性格が独自に規定されているのである」（同）ということがＭＬ派にあっては把えることができないのである。

何故なら、「労働の二重性」を否定することは、「具体的有用労働」と「抽象的人間労働」という、商品にあらわれた「労働の二重性」を否定することであり、それ故に、生産過程における「労働の二重性」の否定ということは、「生きた労働」と「対象化された労働」の生産過程における合体を、「まさに、価値形成者として、生きている労働はたえず価値形成過程において、対象化された労働に合体されるのである。骨折りとしては、生命力の支出としては、労働は労働者の個人的な活動である。しかし、価値形成者としては、労働は労働者の個人的な活動である。しかし、価値形成者としては、自己を対象化する過程にあるものとしては、労働者の労働は生産過程に入ってしまえば、それ自身資本価値の一つの存在様式であり、これに合体されている。それだから、このような価値を維持し、新たな価値を創造する力は資本の力なのであり、かの過程は資本の自己増殖の過程として、またむ

しろ労働者の窮乏化の過程として現われるのである」（『直接的生産過程における諸結果』）として把えるのではなく、労働の自己疎外論のレベルにまで引き下げて把えているということに他ならない。

かくて、ML派の資本主義批判なるものは「資本主義的生産は剰余価値の生産であり、又このような剰余価値の生産としては、（蓄積においては）同時に資本の生産であり、絶えず拡大される規模での全資本関係の生産及び再生産である」（同）に根本をおくものではなく、それを塩見にならって、剰余価値生産に切りちぢめ、なおかつその内在的把握に失敗していることは明らかではないか。

以上のことの結果として、プロレタリアートの革命性を、「共産主義社会という新たな生産関係を内包した社会化した生産力を代表する階級」にもとめるという史的唯物論への逃げこみを行っている。

マルクスははたしてこのような形而上学的命題を述べたであろうか。断じて否である。「この転化過程の凡ゆる利益を横奪し、独占する大資本家の数の絶えざる減少につれて、貧困、抑圧、隷属、頽廃、搾取の度合が増大するが、しかしまた、たえず膨張するところのそして資本制的生産過程そのものの機構によって訓練され、結合され、組織されるところの労働者階級の叛逆も増大する。資本独占はそれとともに又その下で開花した生産様式のしっこくとなる。生産手段の集中と労働の社会化とは、それらの資本制的外被と調和しえなくなる時点に到達する。この外被は破砕される。資本制的私有財産の最後の鐘が鳴る。収奪者が収奪される。〃資本制的生産様式から発生する資本制的所有様式は、従って、資本制的な私的所有は、自分の労働を基礎とする個人的な私的所有の第一の否定である。だが、資本制的生産は、一自然過程の必然性をもって、それ自身の否定を生み出す。これは否定の否定である。この否定は、私的所有を再建するわけではないが、しかし、資本主義時代に達成されたものーすなわち協業や、土地、および労働そのものによって生産された生産手段、の共有ーを基礎とする個人的所有を生みだす」（『資本論』）。

このようなあますところのない唯物論的な洞察の上に立って、必然の国より自由の国への転化を論証し、そして又、その綱領上での表現として、マルクスは次のように述べたのである。

「生産階級の解放は、性又は人種の差別なくすべての人間の解放であること。生産者は生産手段を所有するかぎりでのみ自由でありうること。生産手段が生産者に所属しうる形態は二つしかないこと、すなわち個人的形態ーこの形態はかつて普遍的事実として存在したことはなく、又上記の進歩によってますます排除されつつあるー、集団的形態ーこの形態の物質的、知的諸要素は資本主義社会そのものによってつくりだされているーのどちらかであることを考慮し、このような集団的取得は独自の政党に組織された生産階級ーすなわちプロレタリアートの革命的行動の結果によってのみなされうること」（『フランス社会主義労働党綱領』）、と。

次に我々はML派の弁証法的唯物論と史的唯物論の検討をすることにしよう。「弁証法的唯物論は、弁証法つまり矛盾論と唯物論、つまり認識＝実践論とで構成され」、「矛盾論は客観的物質の運動法則に関するものであり、客観的物質の普遍的本質は矛盾である。実体は矛盾の両側面の相互関係であり、一方が主要な側面から均衡を経て副次的な側面に転じ逆に他方が副次的な側面から均衡を経て主要な側面へ転じていくのに対応して、三つの特殊な発展段階をもつ。普遍的な本質＝矛盾は実体＝矛盾の両側面の相互関係を媒介とし、その特殊な発

展段階に対応して特殊な形態で現象する。認識＝実践論は、客観的物質を変革する実践に対する主観的観念の認識に関するものであり、認識は実践を基礎とし、客観的物質の主観的観念への反映である。しかし主観的観念は客観的物質に対して逆規定、反作用し、認識は実践を自然発生的状態から目的意識的状態へ転化する。客観的物質を変革する実践に対する主観的観念の認識は、客観的物質の特殊な現象形態に対応する、特殊な発展段階の実体に対する認識を経て、普遍的本質に対する認識に至り、感性的認識から理性的認識へ至り、客観的物質を変革する実践を自然発生的実践から、普遍的本質が実体の特殊な発展段階を媒介として特殊な形態で現象するという運動法則に従った目的意識的実践へ転化する」（『通信』）。

第一に指摘しなければならないのは、ML派が弁証法と唯物論を分割していることである。すなわち、弁証法（矛盾論）と唯物論（認識＝実践論）より構成されると、そしてその上で分割された弁証法と唯物論とを再び結びつける、それも両者の折衷として。

ML派にあっては、矛盾が客観的本質の運動法則の根源的な主体に転化され、なおかつ、「主要な側面から均衡を経て副次的な側面へ」と転化するところの実体＝矛盾の両側面の相互関係という認識論的な構造化を計るのを特徴としている。これは、矛盾ということが、対象的物質の本質と内在的に規定されるのではなく、その発展の、従って又その闘争の諸過程、諸連関において展開しうるありかたと理解されていることにある。それ故に、矛盾が前提的に「主要な側面」と「副次的な側面」とにより構成され、「矛盾」という論理的規定とは違背する「均衡」という思弁が同居するのである。

第二に、ML派の諸君は「現象」と「本質」の間に、武谷三段階論流の「実体」概念を導入し、同時に、普遍的本質＝矛盾の認識をもって理性的認識が可能となり、目的意識的実践が可能となると論じている。我々は彼らのいう、「矛盾の両側面の相互関係」としての実体と現象を本質的に区別することはできないと思っているだけでなく、客観的（物質）世界の認識の方法の中に、実体なる概念を持ちこむことには反対である。レーニンの『弁証法について』では、弁証法の論理的概念として、現象ー個別、本質ー普遍以外のものは使われていないし、これこそがマルクス主義の科学的認識方法にもっとも忠実なものといえる。ML派の諸君の「実体」なる認識の契機は、一体何を意味しているのかかいもくわからぬ代物である。

更に、彼らのいう認識は、客観的物質ー実体ー普遍的本質という経路で実現され、又、物質の自己展開は逆の道筋を通って達成されるのだから、彼らの認識の最高の段階としての理性的認識は、普遍的本質＝矛盾の理解におしこめられてしまうのであって、このような認識から目的意識的な実践が導きだされるとすることによって、彼らの認識＝実践が極めてスタティックな現実世界の法則的説明活動に陥っているとしてもいたしかたないというものであろう。

第三に、その唯物論の内容である。ML派は、単なる実践に対する観念の認識ということに昇華させ、無規定な「実践」概念をもちだして、作用・反作用の力学的、機械的唯物論を説いているのである。いわゆる「反映」ということと、「逆規定」「反作用」とを同一の「認識＝実践論」で解明することは、かのプロ革派と同様の弁証法の詭弁への歪曲に他ならないであろう。

さて以上のような弁証法的唯物論が人間社会に適用されると、ML派版「史的唯物論」が成立する。まずわがML派は、スターリンにな

らって、史的唯物論は「弁証法的唯物論を人間社会に適用したもの」といい、「人間の労働は、人と自然との自然的関係＝生産力、及び、人と人との社会的関係＝生産関係という二つの側面から成る」と述べ、次のように独自の見解を披歴する。

「生産力については、矛盾の両側面の一方が人間であり、他方が自然であり、この生産力が生産関係を規定し、自然が主要な側面で人間が副次的な側面であり、生産力は、剰余労働が存在しない発展段階であるのが、原始共産制の無階級社会である。自然と人間が均衡した生産力は、剰余労働が存在する発展段階にあり、剰余労働が搾取され、この生産関係の反作用で生産力が発展するのが、私的財産制階級社会である。自然が副次的な側面で、人間が主要な側面であり、生産力の発展によって、剰余労働の搾取が廃止され、その生産関係の逆規定で、生産力が発展するのが共産主義の無階級社会である。」

このような史的唯物論の誤まりは、第一にマルクスが「物質的生活の生産様式が、社会的、政治的及び精神的生活過程一般を制約する」（『経済学批判・序言』）と述べている史的唯物論の基本的命題に対して、「生産力が生産関係を規定する」という具合に大幅に切り縮め、なおかつ両者を、規定－被規定の実体的関係においていることである。

第二に、弁証法的唯物論の成果（？）に立つところの均衡概念をもちだすことによって、歴史的現象の唯物論的把握ではなく、観念的、思弁的図式主義に陥っていることである。

第三に、こうした考え方は、マルクスが批判したラッサール主義と同様に、「自然」と「人間」とをあらかじめ区別して、歴史の唯物論的な把握を拒否するものに他ならない。

次に我々は、「革命的階級としてのプロレタリアート」が、ML派にあっては極めて歪められていることを指摘しなければならない。「社会革命の原動力となるのは、支配階級に対する被支配階級の反抗ではなく、旧い生産関係を代表する支配階級に対する、新しい生産関係を内包した新しい生産力を代表する革命的階級の階級闘争である」とし、ここから「奴隷制から封建（ママ）への発展は、奴隷主階級に対する奴隷階級ではなく、地主階級の闘争によって、又、封建制から資本主義への発展は、地主階級に対する農奴階級ではなく、ブルジョアジーの階級闘争によって実現されてきたのである。資本主義から社会主義への発展を実現するのは、ブルジョアジーに対するプロレタリアートの被支配階級闘争としてではなく、革命的階級としての階級闘争である」としている。

これは非常におもしろい論理ではある。第一に、それ以前の「公式」に従わずに、ただ革命的階級としてのプロレタリアートが資本主義から社会主義への発展を実現するとのべている点に注目しなければならない。ML派は奇妙な〝いきづまり〟に陥っている。「革命的階級」ということで、諸社会の発展に伴って前時代に対する新たな階級ということと、こうした階級対立を止揚することのできる能力と物質的条件とを具現しているプロレタリアートということが混在して、このような混乱をもたらしたわけである。

それは次のように、「ⓐ被支配階級としての闘争」と「ⓑ革命的階級としての闘争」という先験的な区別を行う戦術観の定式化へと向うのである。いわく「ⓐとⓑは、プロレタリアートの全く異なる二つの闘争であり、ⓐがいくら発展・爆発してもⓑにはならないのであり、プロレタリアートは、ⓐとは別に独自にⓑを闘わなくてはならない」（『ML主義』創刊号）と。マルクス・レーニン主義によるプロレタリアートの歴史的地位の規定から、いかにML派の主張が逸脱していることか！

（II） 戦術における生きたものと死んだもの

前節で引用した個所に続いて、ML派は次のようにのべている。「それ故、プロレタリアートは、経済闘争や民主主義的政治闘争を発展・爆発させ、それに軍事性を付与すると同時に、それにとどまらず、それとは別に、社会主義革命（プロレタリアート独裁を樹立する政治闘争）を遂行し、この発展、別の手段による継続たる革命戦争（権力奪取の武装闘争）を遂行しなくてはならない」（同前）。

さて、わがML派の戦術の基本的な特徴は何か？　ML派は、まずプロレタリアートの階級闘争を二つに区別し、絶対的な境界を引きながら、それがいとも容易に革命戦争という、主観主義的戦術によって結合しうるというのである。

では、そのような革命の本質規定や、階級闘争の諸領域の区別が、マルクス・レーニン主義的な戦術の基礎となりうるであろうか。我我は断じて否と答えざるをえない。「『民主主義的要求を完全に拒否しながら、権力獲得をめざして直接にたたかう』というのは、なにか、はっきりしない、考えぬかれていない、あいまいなものであって、ブハーリンもまさにこの点で理路を失っているのです。……民主主義のためにたたかわなければ、社会主義は不可能である……民主主義のための闘争と社会主義のための闘争とを結合し、前者を後者に従属させるすべを知らなければなりません。主要なもの、社会主義革命を見失ってはならない。それを第一におきたまえ。それに従属させ、正しい相互関係をもうけ、それに並列させながらすべての民主主義的要求を提起したまえ……そして、主要なもののための闘争は、部分的なもののための闘争からでも、はじまって勃発しうるということをおぼえていたまえ、と。私の考えではこういう考えだけが正しいのです」（『イネッサ・アルマンドへの手紙』）。

我がML派は、民主主義闘争はブルジョア独裁の、資本主義の枠内での改良闘争であるという。だが、現実の生活、あるいは生活上の矛盾とは、経済闘争や民主主義的政治闘争を不可避に生み出すものであり、資本主義の未発展によっても、あるいは資本主義の帝国主義段階における寄生性と腐朽性の結果としても、生起してくるものなのである。従って我々は、このような生きた生活をひからびた教条によって飛びこえて、それは無用であり投げすててしまわなければならないと、結論づけることはできないと考える。

このようにして我々が、プロレタリア革命について真剣に考えれば、ML派の戦術は観念的な区別であり、理念にすぎないことは明らかではないだろうか。

「プロレタリアートは、社会主義革命に於て、民主主義＝最小限綱領ではなく、社会主義＝最大限綱領にもとづいて権力を奪取し、プロレタリアート独裁を樹立しなければならない。そもそも、プロレタリア独裁の樹立そのものが、社会主義＝最大限綱領の眼目であり、党による政治的宣伝、煽動、組織化の基本的な主要な内容は社会主義＝最大限綱領でなくてはならない。」（『通信』）

「民主主義＝最小限綱領」という思想、「社会主義＝最大限綱領」

という思想は、きっぱりと捨てなければならない。それは、考えぬかれていないあいまいなものである。

「プロレタリアートの社会革命は、生産及び流通の手段の私的所有を社会的所有に代え、社会の全成員の福祉と全面的発展を保障するために社会的生産過程の計画的組織化を実施することによって、諸階級への社会の分裂を廃し、こうして、抑圧されている人類全体を解放するであろう。なぜなら、それは、社会の一部分による他の部分の搾取のあらゆる形態をおわらせるだろうからである。」（『一九〇三年ロシア社会民主労働党綱領』）

この社会革命を実現することが、共産主義の究極的目標である。この社会革命の不可決の条件としてプロレタリアートの独裁があり、それは、ML派のいう如く、「プロレタリアートの独裁の樹立」、すなわち、国家権力のブルジョアジーからの奪取という一時的な任務に限定させるのではなく、「プロレタリアートに搾取者のあらゆる反抗の鎮圧を可能にする政治権力をプロレタリアートがたたかいとる」（同）点において理解されねばならない。そして、このプロレタリア独裁の具体的な党の任務の一つとして、最小限綱領の諸課題が実現されなくてはならない。もちろん、その中にはプロレタリア独裁が実現されることによって古くさくなる部分も含まれているであろうが、最小限綱領の全体がそうなることはない。「旧社会の母斑」との闘争においても、最小限綱領の必要性は明らかである。そして、我々が、「全世界を新たな共同体」に組織する任務の過渡にある以上、ロシア革命や中国革命の歴史的経験を総括してみても社会主義にとって最小限綱領が必要でないという結論を導き出すことはできない。もし、社会主義にとって最小限綱領が必要でないということが完全にあますところなく言いうるとしたら、それはいわゆる理念上での〃世界共産主義〃以外にはありえないであろう。だがしかし、綱領は、又戦術は、「不可避の思想を表現すべき」（『小委の綱領草案に対する意見』）である以上、理念や死んだ教条的な思想に依るべきではないのである（これは、かの高原君も含めて、ML派に共通の傾向である）。

故に、ML派は、例えば農民問題について「社会主義革命においては富農＝ブルジョアは敵です。貧農＝半プロレタリアは革命勢力ですが、中農＝小ブルジョアジー（と都市ブルジョアジー）は、敵でもなく又、小商品生産者という立場にとどまる限り、革命勢力でもない。しかし、小商品生産の集団化を通じた社会主義化を承認し、プロレタリアートの立場に移れば、革命勢力となる」といって、社会主義革命に於いて敵でもなく味方でもない中農を想定することは、「一般的に言えば、小所有を支持することは反動的である。なぜなら、そういう支持は、資本主義的大経営に鋒先を向けており、したがって、社会の発展を阻止し、階級闘争をぼかし、緩和させている」（『ロシア社会民主党の農業綱領』）のであり、一口でいえば階級闘争をまったく思弁的にとらえていることの結果である。

その挙句のはては、「メンシエビキ＝経済主義」にも、「武装闘争については日和見主義的であるが、労働運動との結合の開始という、成長を反映する病であり、だから、武装闘争についての日和見主義を根拠にして、この積極的な面を否定し」てはならないという奇妙な論理で、その意義を見いだすのである。

このような代物が、「党による政治的宣伝、煽動、組織化」の成果なのであろうか。彼らは、なぜこのような改良主義に陥ったのであろうか。これはML派が、連合赤軍の総括において、「戦術問題が、〃せん滅戦の思想〃として、党の思想問題にたかめ上げられる中で銃を担う党員の質＝共産主義化が、党員の均質化、整風運動が展開される。これは、党の思想路線を、政治目的と革命路線の下での政治的意志統一におくのでなく、戦術を媒介にした〃せん滅戦の思想〃においたことに根本的誤まりがあり、マルクス・レーニン主義の修正、否定である」として、プロ革派の「共産主義化の疎外論」を批判する立場にいったんは立ちながらも、全面的にそれを貫徹できなかったためである。ML派の諸君は、プロ革派の問題設定の土俵の中で、小ブル革命主義の内容規定や、「小ブル革命主義からプロレタリア革命主義への止揚」というような連合赤軍総括での弁証法の関係論にひきずりこまれ、「急進民主主義のテロリズム（小ブル革命主義）とマルクス・レーニン主義（プロ革主義）の矛盾の指摘という主要矛盾の指摘は正しいが、矛盾の主要な側面はどっちであったかということを故意に間違えている」として、プロ革派は後者を主要矛盾とすることによって小ブル急進主義とマルクス・レーニン主義の折衷になっているという指摘しかできないのである。かくして、彼らの不徹底さとは、「革命戦争路線の正しさ」を否定する寸前までたどりつきながら、それを貫徹できず、マルクス・レーニン主義の〃真理〃を理念的に語ってみたり、それを現実に生かすことなく、折衷主義の泥沼に落ちこんでいることである。

最後に、日本革命の規定、及び、いわゆる二段階戦略についての見解を検討しよう。

「現在の日本の国家権力は安保体制であり、それは、①日帝と②米帝の連合支配である。だから日本革命は、①日帝、ブルジョア独裁＝資本主義を打倒する革命、つまり社会主義革命と、②日本の一部を占領し、民族主権を部分的に侵略している米帝を追放する革命、つまり、民族解放とが同時に進行するところの民族解放を含む社会主義革命である」。「マルクス・レーニン主義、毛沢東思想の正しい、真の永続革命論＝二段階戦略は、反帝・反封建、民族解放民主主義革命で、最小限綱領を実行するプロレタリアートと農民の連合独裁権力を樹立し、この権力を最大限綱領を実行するプロレタリアート独裁権力へ転化して、連続的に社会主義革命に至るというものである」。

まずML派がいわゆる「二段階戦略」の問題を極めて形而上学的にとらえている点が指摘されなくてはならない。ML派の〃戦略〃は、スターリンの主要打撃論に基づく〃革命の型〃論にもとづいたものであり、二月革命時のカーメネフそっくりである。「連合独裁」という規定は、プロレタリアートの主導性を否定し、小ブルジョアジーにそれを譲りわたすものに他ならない。

次に前者に関しては、安保体制が日本の国家権力を握っているという見解は、〃従属帝国主義〃論と大同小異である。連合支配論によってだれが国家権力を握っているかをあいまいにするよりは、従属規定で主を米帝とし、日帝を従として、まずブルジョア民主主義革命の実現をいう日共と、それと反対のプロ革派の方が、まだましというものである。民族解放の任務が日本プロレタリアートに課せられているという見解は、その意図のいかんにかかわらず、権力のブルジョア独裁としての階級的性格を見失なわせ、民族主義、排外主義への途を歩むものに他ならない。

ロシア革命においてもレーニンは、「大銀行の〃活動資本を構成する〃約四〇億ルーブルのうち四分の三位上、すなわち三〇億ルーブル

以上」（『帝国主義論』）が仏、英、独金融資本の支配下に、民族主義者好みの言葉でいえば、〝従属下〟にあったロシア資本主義の〝民族主権〟を云々することではなく、かかる帝国主義の金融的－経済的結合を通じて不可避に育成される日和見主義、社会排外主義との闘争と、帝国主義戦争の開始にあたっては、その内乱への転化を訴えた。レーニンは、「民族主権」という（小）ブルジョア的規定から完全に自由だったのである。

きたるべき日本革命は、明確に社会主義革命でなければならない。我々は、全力でそれへの移行と、接近の形態を、社会排外主義、日和見主義との闘争を通してかちとることこそが要請されているのである。

（Ⅲ） 組織路線について

ＭＬ派は、その革命戦争路線の不徹底な総括のために、組織路線でみじめな混乱に陥っている。

第一に、「革命戦争がゲリラ戦としてある現在では、専門的な高度な軍事技術は存在せず、不可能かつ不必要である。だから、本当に党組織全体が武装組織であるのなら、党の内部に、更に、専門的な軍事組織を建設する必要はない」と断言している。そして、「党組織は、政治的宣伝、煽動、組織化を遂行する組織であり、それは同時に、武装闘争を遂行する組織として、非合法軍事組織として、一本立として、労働者の組織とは異る革命家の組織を中心にして建設されなくてはならない」と結論づけている。

彼らは、「革命戦争路線」に立っているために、政治的宣伝、煽動、組織化が、〝武装闘争〟とあたかも対立するかのように映ずるのである。

「その綱領も、戦術も、組織活動も、いっさいのものの重点を全人民的な政治的煽動におくものこそ、革命を見おとすおそれが最も少ない」（『何をなすべきか』）のであり、「全人民の武装蜂起を準備し、その日取りをきめ、実行することにいたるまでの、あらゆる事態にたいする準備をもった組織」（同）こそ、我々の建設すべき組織なのである。

ＭＬ派は、「あらゆる事態に対する準備」ではなく、「革命戦争がゲリラ戦としてある現在」のみに心をひかれているが故に、こうした混乱と誤りを犯すことになってしまった。彼らは、労働者の組織＝労働組合、労働者の共闘組織＝合法組織であり、党は「非合法」「武装闘争組織」であるというふうに結論づけ、その区別から組織、戦術がかたられることによって、活動を狭め、結局プロ革派と同一の地平にとどまっているのである。

ＭＬ派の諸君達よ、「日本革命的プロレタリアート、アジア三国の継続革命－根拠地化の闘い、第三世界の民族解放－社会主義としっかり団結し、プロレタリア革命党を創建し、プロレタリア革命戦争を再開し、正規の進攻－建軍・攻撃的蜂起の道を大胆に切りひらき、その陣型をきたえあげていく任務を、焦眉のものとしている」という「共通の認識」などとはきっぱり手を切りたまえ。そうすれば、君達が努力している赤軍派－連合赤軍の総括－プロ革派との闘争に勝利し、マルクス・レーニン主義の大道を歩むことができるであろう。君達はその瀬戸際まできて、折衷主義の沼地におぼれんとしているのだから。

労働運動と社会主義の結合をはかり
“正規の攻囲”を組織する――
闘う労働者の政治機関紙

マルクス・レーニン主義通信

毎月10日発行　1部100円

鉄鎖を砕け　第二号
発行日　一九七八年七月二五日
発　行　共産主義者同盟（全国委員会）
　　マルクス・レーニン主義派
連絡先　横浜港南郵便局私書箱一六号
振　替　横浜三七一九
定　価　五〇〇円

五〇〇円